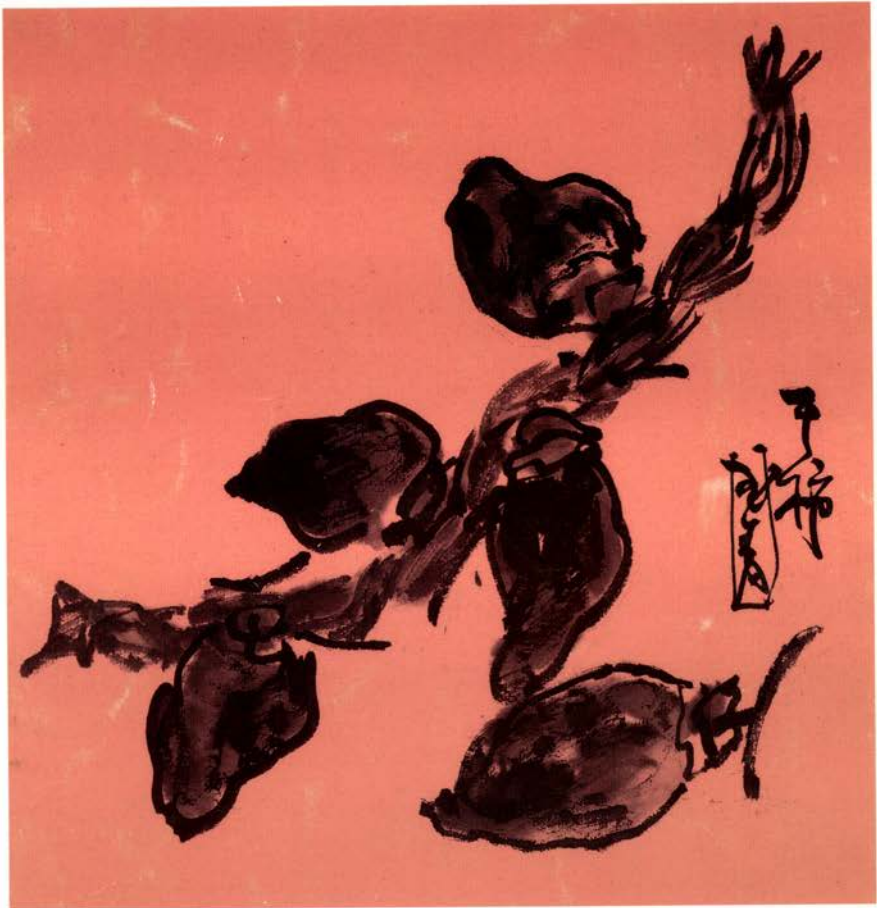


川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成四年十二月十五日 印刷
平成四年十二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷七七八号



日川協加盟

No. 787

十二月号

新春おめでとこう会

と き 1月15日(祝)午後1時開会
ところ 大成閣

(心齋橋「大丸」と「そごう」の間を東へ百米)

◎句会

兼題

「空」 小島 蘭 幸選
「鳥」 春城 武庫坊選

◎祝賀会

会費 7000円

川柳塔社

年賀広告募集

★個人 一口二、〇〇〇円

(氏名・住所・電話番号など掲載)

★団体 次の四種といたします。

①1/3頁 六、〇〇〇円 ③2/3頁 一、二、〇〇〇円

②半頁 九、〇〇〇円 ④一頁 一八、〇〇〇円

▼最終原稿締切 12月7日までに本社事務所へ

〒545 大阪市阿倍野区三明町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

川柳塔社

第16回 鳥取県川柳大会

と き 平成5年3月28日(日)午前9時開場
ところ 国民宿舎「水明荘」

鳥取県東郷町字旭 ☎085813210411

(JR山陰線松崎駅から徒歩3分)

兼題と選者

「絵」 西尾 栞選
「よみがえる」 番野 多賀子選

「開」 竹内 寿美子選

「笑」 谷川 醉仙選

「考える」 森田 熊生選

「色」 門脇 かずお選

「響」 大坪 天涯選

「船」 市村 京子選

特別席題

1題 当日発表 各題とも2句ずつ

出句締切

兼題 午前11時 席題 正午

会費

出席者 二、〇〇〇円(作品集・昼食呈)

欠席投句者 一、〇〇〇円(作品集呈)

3月10日必着

投句締切

〒689-25 鳥取県東伯郡赤碓町花見 明里かつみ方

第16回 鳥取県川柳大会実行委員会

前泊会費

一〇、〇〇〇円 夕食会費 五、〇〇〇円

主催 鳥取県川柳作家協会
協賛 鳥取県・鳥取県教育委員会

新日本海新聞社

コイシイ

西尾 葉

いよいよ師走に入った。師走はもともと「為果つ」の月であり、一年の終りの物事を為し終えるという意味であった。それが何時の間にか、先生が走るなんてことになったのも、十二月の忙しさの間違いだろう。

今年は十二月二十一日が冬至である。二十四節気の一つで、太陽の黄経が二七〇度の時である。一番日の短い時で、昼間が九時間四十五分しかない。

この日に民間では、冬至粥という小豆粥を作り、冬至南瓜というて南瓜、コンニャクを食べる。また、冬至の日に風呂に柚子を入れて柚子湯に入る。こんな句がある。

ペンだこの指もみほぐす柚子湯かな
雑誌の編集にたずさわっている人には、一入感慨のあることだろう。

久保田万太郎の「春泥」の一節に、銭湯の貼紙を見て「今日は柚子湯―そうか今日は冬至か」とつぶやく情景がある。

こんな句もある。

師走かな出先へかかる電話とて

ポケットベルやコードレスの電話が出来ていよいよ電話に追いかけられる時が来た。

毎月二十三日は「ふみの日」だが、手紙をしたためる美風は更に遠くなる。皆さんが、おっくうがる手紙も、ときには「郵情」を広げる「遊便」となる。

太宰治の手紙に用件だけ事務的に書いた余白に、片仮名で小さく「コイシイ」と書いたのがある、という。ニューメディアの時代に電話は不可欠だが、しかし、電話では決して伝わらないものだってあるうではないか。



座右の句

面の裏菩薩も夜叉もなかりけり

(薫風)

私の句

日溜まりの落葉 葉になった夢

岩津 ようじ

川柳塔 十二月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言	コイシイ	西尾	葉	……(1)
わんこそば	……	黒川	紫香	……(2)
川柳塔(同人吟)	……	西尾	葉選	……(4)
自選集	……	東野	大八	……(41)
川柳の群像	武部香林	黒川	紫香選	……(46)
■古川柳	柳籠裏三篇研究(十五丁〜十六丁)	橘高	薫風	……(48)
水煙抄	……	川島	諷云児	……(50)
大空のこころ	(24)	吉岡	きみえ	……(71)
秀句鑑賞	同人吟	河内	天笑選	……(72)
	水煙抄	八木	千代選	……(70)
銀河系	……			……(76)
茴香の花	……			

わんこそば

黒川 紫香



川柳塔おもしろ川柳大会に参加した一行のうち八名は、奥東北を巡って二日後盛岡へ着いたのは、霧雨になった真昼時だった。

藁と湯煙に包まれた八幡平の湯治場「ふけの湯」を出てバスで下山する高原は八甲田山奥入瀬溪流とは違った色彩を見せ、赤・橙・黄三色が織りなす山肌の美しさに、思わず歓声を上げずにおれなかった。

途中、浜民村の啄木記念館に立寄り、若くして世を去った詩人啄木の生涯と苦難、そして芸術を肌で感じた。遺跡になっている小学校の台地から見下す北上川は、啄木の詩情そのままだった。

さて盛岡駅に着いてから、切角来たのだから名物の「わんこそば」でも食べようと、駅前ビルの二階にある東屋という店に入った。ムシムシとした熱気と満員の人海を抜け、蓋付の汁椀と具を入れた木の小皿が並ぶテーブルの前に一同、相対して座らされた。具と言っても大根おろし、海苔、鶏肉の搦身、しめじ茸などが小椀に載っているだけ、およそ殺風景なものである。

「神父」……………	永田俊子選……………	(78)
一路集「見る」……………	山崎君子選……………	(78)
「十二月」……………	上田佳秋選……………	(79)
初歩教室「貰う」……………	吉岡美房……………	(80)
川柳塔あおもり五周年記念大会……………	宮西弥生・田中叶・西出楓楽……………	(82)
唐津バンザイ……………	林荒介……………	(84)
■各地句会日より 南大阪川柳会……………	金井文秋……………	(85)
各地柳壇(佳句地十選/井上白峰)……………	堀江芳子……………	(99)
十一月本社句会……………	津守柳伸……………	(104)
梅みどりさんを悼む……………	柳界展望……………	(105)
山本規不風様を偲ぶ……………	十二月各地句会案内……………	(107)
柳界展望……………	■編集後記……………	(108)

座右の句

古里の山は黙って見てくれる

(迷親子)

私の句

狭い門 桜の咲いた知らせ受け

永峰 伽名子

係の女中さんから一通りの説明を聞き、いざ挑戦とばかりに椀の蓋をとると、いきなり一塊のそば玉が放り込まれる。一塊は僅かな量なので、箸で口へ吸り込むと、間髪を入れずに頭の上から次のそば玉が飛んで来る。舌で味わう余裕もなく吸り込んだと思うと、掛声もろともまた次のそば玉が、息つく暇もない有様。腹いっぱいになって、もう沢山と言っても通じない。向うは、頭の上から見下しながらほろり込むのだから素早い。椀に蓋をしないと終ったことにならぬから、駆け引きが大変だ。やつとの思いで蓋をして終ったので、前以て渡されていた勘定するマツチ棒を数えると十四本、普通三十四、五本が標準なのでとても高齢者には無理だ。

隣の規不風さんとは見ると、さすがに都人らしく、大様にねちねちと味わいながら食べるので一向に進まない。結局、女中さんの方が根負けして終らせたが、マツチ棒が三十本あった。

後で沢山お食べでしたと言うと、一杯終ることに二本並べたと豪快に笑われた。その規不風さんが帰宅二日後、心臓発作で救急車で運ばれ、また二日経って忽然と逝かれた。その訃報を聞いた時は、余りの事に震えが止まらなかった。諸行無常という言葉があるが人の命の果敢なさをしみじみと知り、啞然とした。合掌

川柳塔

西尾 栞 選

堺市 高橋 千万子

生甲斐を問われて語るむなしさよ

職人の手腕 赤札つけさせず

今日もまた必要経費とかで酔い

病床へ孫にまでウソ行き渡り

不仲ではないが温みのない団地

口あけて目刺の首が並んでる

松原市 玉置 重人

亡父の齡超えて凡愚を繰り返す

よく染まる色を悪友持つてくる

無料パス師走の用事頼まれる

何もでけへん人やと女うれしそう

スロースロースロー勘忍袋縫うている

熊本市 永田 俊子

給食論争軒のつばめが聞いている

スビード出世誰かを踏んだ足痛む

余暇知らぬ父の軍手のひとり言

酒に逃げ酒に甘えているピエロ

六法に縁なき幸せお茶の花

ああ余生つるべ落しに日が暮れる

鳥取県 松下 たつみ

明と暗 昇進の椅子一つ空く

自惚れの耳には風となる助言

頼られた時から自由奪われる

故郷はどの子もあてにして居らず

峰打ちで男の芯を試される

シグナルが変って二人だけの別れ

美禰市 安平次 弘道

白紙委任それが喜劇のはじまりで

美辞麗句 鬼もころりと騙される

池の鯉もボクも手の鳴る方へ行く

ワープロの誤字が気になる懺悔録
良心が疼く日もある多数決

結論を急ぐと狂う点と線

今治市 矢野佳雲

蜘蛛が糸張るの高からず低からず

泥吐かぬままにシジミは処刑され

高慢な男が高所恐怖症

価値観の違い宝は子か石か

握るなら握ってみよと栗のいが

短い縁だったと派手な週刊誌

竹原市 小島蘭幸

栗ごはんで松茸ごはんいだいた

正座していただく味のないメロン

七輪で秋刀魚を焼くと亡父がいる

新米も秋刀魚もキラリ秋が好き

ハードルを跳ぶ娘に秋が澄んでくる

仏も鬼も採点表をもっている

和歌山市 西山幸

知らず知らずさむい科白になっている

いつまでも鬼にはなれぬ鬼の面

にんげんになろうと整理整頓す

耳鳴りが続く浮き世の風の音

罪の数かぞえて年賀葉書買う

おでん煮て理想に遠くいるゆとり

西宮市 奥田みつ子

父の墓 木の実の落ちる音を聞く

大嫌いな自分に今日も化粧する

愛敬愛敬 律義な人の忘れもの

一瞬だが疑ったこと悔いている

雲と遊び風と遊んで秋深む

檜重の随筆を読む菊の月

八尾市 宮崎シマ子

庭の隅一人ぐらしの葱がのび

尼寺を賑わす柿の実が熟れる

枝豆を食べ食べ話し限りなし

保護者交替夫を守る番になり

癪性に疊ふいてる十二月

せめてお前は肩を落すな影法師

大阪市 神夏磯典子

鯛雲 柿の実りと淋しさと

有頂天 ゆるいカーブへさしかかる

少しずつ呆けて話が噛み合わぬ

だんだんと未来の地図が鮮明に

何の心配もないのが恐ろしい

ドレスアップ ポックリ寺はやめにする

出雲市 板垣草丘

茶に呼んで句会の首尾も聞いてくれ

パジャマ脱ぐ虫から蝶になる如く

月よりの使者にも秋は肉がつき

善人に道を聞かれてついて行く

後添いが三倍生きて墓守る

貰い乳はたちの胸を今思ふ

倉吉市 奥谷弘朗

父の日だ心をピンと張って生き

天皇と一緒に植えた松が伸び

女房をじりじりさせている亭主

夢のごと二人で登るダイヤ婚

母さんがコツを教えたおとし蓋

伊丹市 榎谷寿馬

思い出の顔が重なる唐津焼

函館と唐津が絡む糸造り

車椅子には情け無用のパラス道

七十五これほど半端な年は無い

姉の忌へ供える庭の柿三つ

笠岡市 松本忠三

爪弾きされねばならぬ土性骨

七十四まだ戦争の夢をみる

亡き年をせめて数えてよんでくれ

出る釘になってやろうかどうしよか

わたしだけ一人にさせていいですか

下関市 石川侃流洞

晴耕雨読 風マンネリになりたがる

熱爛のポットがせかす紅葉狩

言い分は判る判ると承知せぬ

声楽科出してあつさり主婦希望

幸せいっぱい朝の蛇口がほとばしる

藤井寺市 吉岡美房

コスモスは処女懐胎の夢を見る

逢えそうな子感で揺れる秋桜

瞑想の中で散れない曼珠沙華

燃え切れぬ薔薇の叫びが落ちている

人形の眼が秋風を放さない

大阪市 西出楓楽

カタカナの仕事を持って髭をつけ

サングラスかけて自分を過信する

嘘少し身すぎ世すぎのつれづれに

羽根ぶとんわたしをフォロワーしてくれる

沈みたくない日もあるだろう夕陽

鳥取県 土橋螢

真実はひとつ未完の絵の中に

黄昏の吐息を洩らすことなかれ

噂して足を引っぱるだけのこと

足音は確かに秋が逃げる音

人間は怖いこわいと虫が鳴く

鳥取県 新家完司

通りすがりの街うつくしい人がいる

ポチ君の墓に野菊が咲いている

美しい秋に扉を閉めたまま

とり敢えず机の上を片づける

少しだけ損して憂いなく眠る

豊中市 安藤 寿美子

岡山県 嘉数 兆代賀

バス ケーブル運動不足になる登山
トロッコ電車あるだけのもの首に巻く

この町のやさしさに触れ旅たのし

おみやげを買わんでもいい旅したし

第一のアクセサリーは入歯です

倉敷市 小野 克枝

生きてゆく折目重ねて十二月

父に似た頑固を父は叱りつけ

いやだとは一度も言わずはずむ毬

結局は涙に負ける母の膝

寿命に媚売って心の灯をともし

柳井市 弘津 柳慶

靖国へ形見の品と参拝し

来賓の短い祝詞へ拍手する

反抗期黙して語らず寝て終い

惚けが来て孫の名前を皆忘れ

押し売りへボケて見せて押し返し

奈良県 田中 紀美代

教科書にない手料理でよろこばせ

肥満度はサンマにまかせておきなさい

価値観の違いで始まる一悶着

あたりまえの返事書くのが苦手です

仕方なく留守電つける十二月

街は砂漠で雨はころろの中に降る

美しい訣れとおもう木の葉散る

汐満ちる時もあるさと縄を縛う

死にたくない死なせたくない老い二人

顔のない紙人形でたそがれる

廿日市市 林 野甦 光

知恵の輪がだんだんゆるむ蒸シタオル

帽子被れば若く見えますよと女

手を合わすとにかく今は真人間

一言を拾い集める秋落ち葉

審査員の顔で見ているのど自慢

松原市 小池 しげお

新幹線パントマイムで別れたり

税務署と話がついた酒の味

似た者夫婦貧乏神に顔がきく

父の日をころっと忘れられたまま

こおろぎが鳴いてゆつくり納屋閉める

高槻市 川 島 諷云児

辞書まめに引いて明日へ背伸びする

計算はうまいが金に縁がない

妻病んでまな板乾く皿乾く

指切りの温み信じて米を研ぐ
尾を振ってまで生きるなと影が言う

豊中市 田中正坊

たのしみは新刊の書を開くとき
たのしみは校了のペン擱いた時
たのしみは名曲聴いて憩うとき
たのしみはこころの友と語る時
たのしみは古寺の山門潜るとき

東大阪市 森下愛論

ころころと理屈を変えてくだをまき
自販機を叩きぶつぶつワンカップ
戦友会また二つ三つ顔が減り
ヤッホーと叫ぶ屋上あかね雲
地下街で迷い一べん外へ出る

奈良市 宮口笛生

いい事はわかつているけど要は金
炊きたての御飯 仏を大切に
履物がきちんと揃えられた家
機械化へ百姓位とはいかず
野仏が犬におしっこかけられる

西条市 片上明水

ふと夜中手を心臓に当ててみる
老いふたり祭りに招く客も減り
大臣がどうのこうのと暇なひと
盗られそうな枝から柿が熟れはじめ
お隣は釣に出かける朝の音

大田市 藤田軒太楼

良心に疼く話を持って来る
本筋を承知しているから慌てない
最高に事が運んだ酒の味
養命酒だから女房大目に見
お宅に限ってと探り入れてみる

島根県 堀江正朗

盃にくすぐられてる誕生日
酔い醒めてからの真夜中長いこと
戦盲も耳の樂園なくすまい
盲人の負けだと知った汗を拭く
眠るまで笑いで埋める妻といて

島根県 堀江芳子

白い杖はずます靴を磨きあげ
七十歳なりの円描くむずかしさ
挨拶のしどろもどろにある温み
落ちついて読書なにも優るとき
ひと恋えば秋ひたひたと胸を打つ

名古屋 越村枯梢

不倫とは何 未亡人に尋ねられ
亡母よりもモンローの影鮮明に
おんなを賞める お世辞ですよと付け加え
傘寿喜寿仲よく喧嘩しています
ちよつとモダンに装ってみる八十路

松江市 柳 樂 鶴 丸

奈良県 天 正 千 梢

母が苦しんだ日 僕の誕生日

週休二日楽しむ人と悩む人

一匹狼が僕の性に合ってます

イエス ノーはつきり言えぬのがいばり

幸せは配偶者有りへ〇をする

松江市 舟 木 与 根 一

国境が見えぬ地球は素晴らしい

霧濃くて北方領土未だ遠し

左遷地は故郷と同じ祭笛

少しづつ熱爛に変え秋深し

孫が手に負えなくなった自閉症

西宮市 林 はつ 絵

秋風に策の無い顔撫でられる

もう一人の私が医者のおを利く

スピードを落して老母を乗せている

砂漠渺茫クレオパトラも見た夕日

老いて母祈ることしかしてやれず

富山市 舟 渡 杏 花

哄笑をされる愚直に気が付かず

手抜きなど許してくれぬ手打そば

芸人の足袋が汚れている落ち目

イミテーションの指輪でおわる妻の乱

おはぎ届く 亡夫忘れる程うまし

億の金食って秘書がを連発し

閻魔さん舌抜いて下さい政治屋の

性格が反対なのに気が合うて

子や孫に食わすボタ餅棚に上げ

音符など読めんが歌えば鐘三つ

神戸市 山 口 美 穂

丸い背をより丸うして老母祈る

どうしてもNO言えなくて自己嫌悪

少しだけ老いを認めてローヒール

チーズケーキのカロリー思いつつ食べる

片ちびの靴がわたしに合っている

弘前市 村 田 善 保

カラオケは心の棘抜く処方箋

金婚の箸で人生語り合い

ユトリ口の絵には住みたい街がある

放心で浮き雲となる癌告知

運命に流れ流されユダになる

弘前市 真喜内 實

父さんが洗えば皿が音変える

紅に燃えてるりんご小春です

好きな道好きな歩幅で行きましょう

一切の生きるかわり捨てて生き

温泉でまた赤くなる赤とんぼ

弘前市 小寺花峯

茶柱が立つて谷間を信じきる
幕切れになって演ずる茶番劇

出がらしのお茶にからんでいる孤独

茶柱と二黄卵から貰う夢

ひとり去りふたり去り茶碗持て余す

弘前市 肥後和香子

秋だもの二倍返しのおおしい
困っちゃう女らしくという言葉

ななかまどポロリポロリと罪を吐く

びろうどの会話にくすぐられる夜

咲いちゃったとみようがの花がウインクス

十和田市 斉藤 効

葬儀屋が帰りぼっくり陽が落ちる

秋灯火 母の履歴に戒名を

亡母蒔いた種がこんもり豆の出来

ななかまど少し気高く色めいて

三年余住んでも石の冷たさよ

十和田市 阿部 進

二代目のボスが小粒で頼りない

鼻ぐすり効く上役で頼りない

子にかけたでかい期待がしほみ出し

職場では歓迎しない天下り

父の地図 近道などは書いてない

五所川原市 加藤彩人

歯ぎしりをいびきが叱って性が合い
吊り橋の真ん中 保険かけてない

一生の傑作 白寿の恋実る

一億の祈りへ遠い北の島

揺れながら独楽は余命を考える

五所川原市 對馬一閃

長靴をさかさに干して秋仕舞い
朴念仁 女の謎がまだ解けぬ

気まぐれな神に相性あやつられ

百号が仕上り風が流れ出す

眼が入りこけしは亡母の貌になる

黒石市 相馬一花

似顔絵が実物よりも美しい

妻よりも長く付合う米の飯

アオムシのように野菜を食わされる

梯子酒居眠り代も払わされ

美人だけ採用される化粧店

堺市 板尾岳人

十和田湖に別れを告げて逝き給い(故 山本規不風さん)

旅好きが旅の終りに行く彼岸

奥入瀬と彼岸の紅葉見くらべに

もう少し易観て欲しい運命線

聞き上手話し上手な易学者

堺市 藤井 一二三

コスモスを揺らす風あり師のおわす(恩師を山口に訪う)

五十五年振りです先生となみだ声

分教場の話も遠いとおいこと

念願の叶った今日の秋日和

小京都師に吹け風のやわらかく

堺市 黒田 真砂

夫にやさしくすれば怪訝な顔をされ

全自動何か物足りないお前

一人よがりの思いであったと知る鏡

病院へ着てゆくもので未だ迷い

夫の留守夕餉空しいなすきゆうり

堺市 柿花 紀美女

肩書のとれた貧しい印を押す

ふる里の道新しく友は老い

毒づいて見ても世の中変らない

待たされるたのしみもあり花時計

北方領土の岸へ仲々近づけず

米子市 林 荒介

眷属が揃うて島に灯が点る

コスモスの堀から姉は出て来ない

ポストまで歩いてわたくしを捨てて

謎解きに少し時間を掛けすぎた

天秤は損をしたとは言わなんだ

米子市 林 瑞枝

昔も今も野菊の揺れる寺の坂

一幅の絵にして少女山羊を抱く

負けの込む胸でざくろの実が弾け

賑々しい夢に南天髪に挿す

滝壺と語り明かさん太平記

米子市 小西 雄々

ホールインワンを自惚れてはならぬ

オープンングセールスすむと閑古鳥

代表は二十一世紀をもう見つめ

休肝日 言葉すくない父になる

泣き事を言わない亡母は偉かった

米子市 石垣 花子

川上は神楽ばやしに炎えている

吊橋をからかうように川が荒れ

海が見え川も優しい顔になり

坂越えて鬼は油断をしてしまふ

赤ちゃんの笑顔に負けている平和

米子市 青戸 田鶴

立ち上がるチャンスは秋の気配りか

手に合った軽い茶碗を買ってくる

いつまでの暮しか茶碗拭いている

健康食品ばかりが幅をきかせている

父母の忌が過ぎると秋が深くなる

米子市 菅井 とも子

追悼茶会 老母の晴着を借りて行く
忘れたい事があるので香をたく
スカートを短くしたい老母です
出揃った稲穂にはずむ祭り笛
里の水飲むと生き生きする金魚

米子市 田中 亜弥

シグナルは赤 躰の悪さ見てしまふ
白波が立つとつくろう網がある
古里に落武者というくだりあり
振り回すヤングを二人飼っている
染まりやすい白を過保護にしてしまふ

米子市 野坂 なみ

復元の仁王いのちを張って立つ
親方になって相撲がよく見える
座りだこ立つことさえも忘れそう
これからは楽しみながら歩きたい
他人から見れば遊びの稽古事

米子市 政岡 日枝子

手品のようにポンポンと出るホラばなし
内緒なら愛していると言わないで
同族の親近感が豚にある
ザクろ弾けて己の馬鹿をまるだしに
雑談の種を蒔くにはコツが要る

米子市 寺沢 みどり

差水で煮え立つものを静めてる
描き足した眉の左右が揃わない
足並みがそろふ頃には日が暮れる
虹色の糸で袋を刺して置く
雑巾を刺して傷口忘れよう

米子市 澤田 千春

赤い靴 波はさらって行ったまま
気に入りのベレーかぶって旅の町
生き生きと瞳の輝きを子にもらう
ほどのよい助走で生き生き峠越え
刺のある言葉呑みこみ丸くなる

米子市 新正子

街路樹の小さな秋が降って来た
半分は僕が作った妻の鎗
正解と言えないけれど多数決
目の鱗ひとつ落として坂を越す
雑巾の裏の白さがいじらしい

米子市 光井 玲子

分守る野菊がほんにいとおいしい
一つずつハードル越えて二人ざり
子の手紙 頭の中の霧が晴れ
雑学が時折り味方してくれる
孫たちに幸せの種播いておく

米子市 金山夕子

えへらへら刺さる言葉のうらがえし
詮索をされては困る男とおんな
すっぴんのおしゃべり和む秋の中
短足のわたし犬掻き似合っている
健康な家族で動く十二月

米子市 白根ふみ

白線をはみだし森がよく見える
株分けて他人ではない鉢の砂
百歳と話す気力を溜めている
大名の越した峠は蟻の道
正解が出ていてうんと言わぬ夫

米子市 中井ゆき

五十年振り友の笑顔に少しかけ
美しい切手ゆがまぬようにはる
百匹の羊でねむれずワインのむ
忘却の川が火となるまんじゅしゃげ
木犀にひかれて辿る風の道

和歌山市 堀端三男

お揃いでないとその他で扱われ
雑談が多く核心見失う
水甕の底にアイデア溜めている
深追いをすると傷付くのは自分
乗り遅れていいよ三途の川の渡しなら

和歌山市 若宮武雄

自分だけまっすぐ歩いてた迂闊
今日もまた子に叱られるのも余生
ほろ酔いの舌から洩れていた本音
赤とんぼ見ずに今年の秋なかば
政界は荒れて狂って空は秋

和歌山市 福本英子

菊活けて昨日のことは忘れよう
気分転換 雨にうたれる貴船菊
叱られるのは長女ばかりの玩具箱
簡単にお遍路という長い径
窓際の南風ネクタイを締めなおす

和歌山市 内芝登志代

実直な父を頼りに傘の中
均等法男は馴れぬ皿を割る
半端者同士 気楽な旅に出る
耳うちへ納得したよに聞いておく
伺える時間を通知するマナー

和歌山市 松原寿子

自分と言う立場を悟る風に遇う
ひよつとこの面へ怒りを鎮ませる
生き方のひとつ足元ふみならず
休日の運河が深い蒼になる
ときめいて十指も弾む毛糸玉

和歌山市 木本朱夏

秋のうつ眉根に溜めている阿修羅
口紅を替えてわたしの秋にする
謎解きの下手なおとこを道連れに
分別があつて弾まぬ毬ふたつ
泥水のようにコーヒー苦い午後

和歌山市 桜井千秀

人前は闊歩アビールしておこう
毒食らわば皿までこれも自尊心
ぎりぎりの線で足踏み見苦しい
まんざらでなさそう影が従いてくる
あつち見てこつち見てもう十二月

和歌山市 内田結実

ひそと咲く野菊おまえも古い女
何時からか男嫌いになつた毬
柿熟れる止そうよ恋のかくれんぼ
人恋し雨の夜長はことさらに
身構えてみたとして所詮女なり

和歌山市 福井桂香

秋の色にすつぱり染まるシルエット
艶やかな唇あなただけのもの
七草にトルコ桔梗も入れてやり
ごめん御免を乱用してはいませんか
躰かぬようたつぷり聞かす子守唄

和歌山市 宮口克子

平凡が幸せなんて退屈な
振り向けば愛に彷徨い酒に逢い
運動は苦手ワープロ上手です
苔むした石と私の人生と
如才ない嫁にハイハイハイと母

和歌山市 青枝鉄治

ベルト穴一つ緩めて秋を食う
出す辞表裏へホンネを添えておく
二度の靴 元肩書きを言いたがり
薦の子はトンビと知つた参観日
駐在が凧を揚げてる日の平和

和歌山市 山田高夫

僕らしくありたい向い風の中
立ち止ることを許さぬ世の流れ
利子のつく金を預けたことがない
念押しした上にもお灸すえておく
雨しとど焦燥感に包まれる

和歌山市 細川稚代

雨女 雨にためらうことなかれ
秋冷へ人恋う心捨てがたし
ジェラシーを愛の証と思ふまい
栗御飯独りの秋が深くなる
そつとしておこう風がはこんでくる噂

和歌山市 田中輝子

鏡磨いて言いたい事がたんとあり
一枚の葉書 結婚する葉書

あと一步近よりたい薔薇の花
敬語使つて難を逃れた事があり

かけがえのない時間に墨をすっている

海南市 三宅保州

角のある石にも使い道がある

手の内は真面目一徹だけのこと

追伸に本音その手は古すぎる

一本の画鋏見当たらない不安

メロドラマだから安心して泣ける

有田市 松井かなめ

神妙に叱られた意味わからない

我が子でも嫁がついたら言えぬ事

紀州弁で鳴く鈴虫も蟋蟀も

大病で断酒してくれ有難い

盆僧は代理の息子医学生

羽曳野市 榎本吐来

先送りした一日が重くなる

浪人の秋を数えている財布

煽てられ煽てる銚子追加する

建前と本音に揺れる金バッジ

行楽の酒は忘れぬもの忘れ

岸和田市 福浦勝晴

絵ハガキの道頓堀にレトロ趣味
さりげなく順番を待つくじの列

師走多忙貧乏神と福の神

ジャンボくじ当ててすぐ死ぬ不運とや

死んだほうがましとのうのう生きている

岸和田市 植山武助

ホーム・ステイ喋りになって帰つて来(孫婿)

手持ぶきた内職なども手伝つて

不眠症 昼に眠つてまた眠れず

それまでは癌だと思つていたエコー

後四年 金婚式へ頑張ろう

岸和田市 高須賀金太

石槌の峰はこの日も雲の中(亡父五十回忌法要 於愛媛重信町)

墓石を洗つてくれて時雨過ぐ

いつ来ても重信川に水がない

菩提寺の和尚はかなり弱つてた

菩提寺の隅にひっそり伯父の句碑

岸和田市 岩佐ダン吉

塾帰り分別臭い顔がいる

退職をきめた夜しきり虫時雨

カレンダーめくれば猫が寄つてくる

残された案山子ひとりが意地をはり

柿熟れたと長い電話の母がいる

岸和田市 島崎 富志子

頑固一徹そんな夫でばけられぬ

よい手相逃げられぬようにぎりしめ

老いなのが色気も欲も小さくなり

やっと閑出来たに根氣ついでこず

たのしみはミニ缶一つの夜の酔い

岸和田市 古野 ひで

いいわけは聞くまい心冷えるから

ぬるま湯に身をゆだねてるやすらぎよ

正信偶 今朝も元氣な老母の声

潜在の意識 言葉になるこわざ

死ぬ時へ好きな袖を撰つておく

岸和田市 原 さよ子

町内を一つ和にする秋祭り

美しく老いる努力を語り合う

ブラウスの襟からチラッとお灸膏

習字展 孫と見に行く秋日和

絹にない木綿のよさをおしやれする

岸和田市 清野 こう

黒髪をばつさり命にかえられぬ(8月27日、嫁くもまくか症で入院)

看病の日々十月の声をきく

看病で姑嫁 絆が太くなり

さする手に縫りすまぬと嫁の涙

快復期 娘の名を呼んで待ちわびる

八尾市 宮西 弥生

道づれの身の上聞いている指定席

平凡な暮らしでよかつた露天風呂

ペランダの一鉢ずつが秋になる

義兄さんの日記気になるイニシアル

眼も耳も達者で敵がふえてゆく

八尾市 高杉 千歩

来世も女がいいと満場一致

病院もBKも休み冬木立

花ことば確かめているクリスマス

成長に合わず楽しさ毛糸とく

ハッピーエンドで平成四年除夜の鐘

八尾市 鷺見 章

嬰鑠の真を埋めるスケジュール

毛糸編む春には母になる師走

信号に来てハンドルのコミック誌

老兵に師走限りの時間給

健やかに三度頂く母の義歯

八尾市 山下 美津留

川柳が武蔵の里でざくろ食べ(鳥取句会の旅)

倒産の噂 呑み屋で聞かされる

筋一本通して鬼が降りて去る

控え目の化粧で詣る亡父の墓

割り勘で恋が突って行く若さ

八尾市 吉村 一風

出雲市 園山 多賀子

ぞうりにも枯葉のからむ負けが越し
ほりあげた下駄にけじめを聞いてみる
釣り書きがよすぎて流すことにする

噛みしめる言葉時々夫がくれ
二階から一日降りず独善家
愛と憎交々女の不整脈
こだわりはもう捨てました酔芙蓉

年寄りの家を覗いて日課終え

素通りは決してさせぬ曼珠沙華

けじめつける積りが酔うた不甲斐なき

過去の事流した斐伊の川あらし

八尾市 飯田 悦郎

出雲市 久谷 まこと

奏でてるススキ悲しい死を見つめ

齢だから忘れた事にしておこう

菊日和 隣は留守か電話ベル

顔色は本当の事かくしてる

両親に言えない貨車の下り坂

補聴器を外して渦中からのがれ

エイズ病み余命を春の詩に燃やす

レストラン子等の機嫌は安上り

畦に鍬立てて異状のない水車

魚屋の仏頂面が活きがいい

出雲市 金村 青湖

出雲市 伊藤 寿美

木犀の香り約束まだ信じ

許し合う時なり白い薬包紙

秋霖へ出れば男の顔をする

息子よりいけずな孫を嬉しがり

老眼の視野へ錦秋まぶしすぎ

恩きせて子の無い伯母の愛し下手

病院の裏から発った黄泉の旅

傷口に触れる善意を持って余す

元首相マオタイチューはうまかった

傷口に触れる善意を持って余す

出雲市 吉岡 きみえ

出雲市 石倉 芙佐子

この笑顔久しく忘れていた鏡

光と影を追うて優しい回転木馬

老斑ができて長生きできそうだ

はるばると銀河を渡る回転木馬

七十五日噂も消えた青い空

ベレー帽に抱かれて乗ってるあの子

芋づるも平和の中のグルメとか

回転木馬昔の愛が去来する

炎えつきるその日がこわい闘病記

四十年墨絵のように夫婦坂

出雲市 小玉満江

P K O 帽子がとてもチャーミング
助手席に土産の酒が置いてある
身がまえる悲しい癖が直らない
帰ったら大きな欠伸一つ出す
秋深む飛驒路なつかし朴葉味噌

島根県 西村早苗

嬉しそうな真似でいいからしてごらん
どこへ行くともなく歩く悩みごと
ぐっすりと眠れる冬の藁帽子
海猫が波ぎりぎりの風に乗る
そんな気で聞くから不吉な鳥鳴き

島根県 小砂白汀

隣まで伸びた蔓だが霜が来た
スカートへへばり付いてる盗人草
少年のままでおとなになりました
小物だねえ五億ぐらいと縫は言い
ややくそにさせては困る銭をやり

島根県 榑原秀子

計報きくその驚きとかなしみと
遠慮して会わずじまいの悔いばかり
やっときさペンを執る気になって秋
それからがこたつ布団が縫えました
することがあるよろこびで日が暮れる

島根県 松本文子

コスモスや短き命よしとする
わたくしが播いた大根だと分かり
誰も知らない街でわたしを解き放つ
苛めても泣かぬ女で物足らず
歯ざしりの音を消さんと枕干す

島根県 加本義良

研修と言う名の山の酒に酔う
秋祭り今日は何にも忘れよう
一石を投じた正義たたかれる
精一杯動いて善人腹が減り
コップ酒勇気が一人空回り

鳥取県 林露杖

コスモスが揺れるやさしい風に会い
倒伏の稲も農政批判かも
丸優がどうあれ縁のない財布
虚しさは屋台でとばす政治論
次の世はお前の好きにしていぞ

鳥取県 森山盛桜

友が逝くその時デイスコから帰る
野仏に似たいと思う鬼瓦
知らぬ地で犬は首輪を外される
同意語が辞典に見つからぬ不安
敵陣と見えるあたりでごろ寝する

鳥取県 土橋 はるお

小走りに回覧板がやって来た
寄付帳にまたどんぐりの背くらべ
野次馬を見て野次馬の仲間入り
ズボンが皺にならないように立っている
野良猫が僕に似ている飯をやる

鳥取県 羽津川 公乃

スランプと二人三脚秋深し
晴れ晴れと菊の香高き婚の朝
さんま焼く七輪だから捨てられぬ
子だくさん母に指抜き光ってた
ジーパンの嫁きびきびと小気味よい

鳥取県 さえき やえ

酔芙蓉みごとに咲いて嫁にゆく(友人の娘さん結婚 二句)
初孫を待つて見送る車椅子
年一度写す子宮が美しい(ガン検診 二句)
異状なしもう産めないがまだおんな
ストレスを捨てに来いよと畑が待つ

鳥取市 両川 洋々

ルンルンルン熟女が鬼とよく遊ぶ
佐川汚職へ葵の印籠借りて来い
札束の海で政治家また溺れ
とどめ刺す剣が札束から覗く
癌と知る父だ気ままを許されよ

鳥取市 小谷 美つ千

指きりの指うれしくて走りだす
煩惱をグラスの底に沈めたい
意気地なしいつまで空を見ている気
白いスーツを脱ぎ捨てて母になる
A型で赤鉛筆を手放せぬ

鳥取市 西原 艶子

遠来の友に華やぐ日をもらい
イメージを広げ未来図描いてみる
夕明り明日へ望み播くように
刺をさすのも抜いてくれるのも人間
秋の陽は短い逢瀬急くように

鳥取市 春木 圭一郎

借景が無情なビルにうばわれる
歩いても走ってもわが人生だ
飯食えるほどに裏芸冴えてくる
あれくれと言えば妻すぐあれを出す
人柄が良くても一つ物足りぬ

鳥取市 武田 帆雀

謙遜はしてるが狙う菊の賞
白旗を降ろし専ら菊作り
酒のつまにされて阿呆らしもう出まい
一馬身 鼻の短い馬を飼う
最大の敵を最大にほめておく

鳥取市 美田旋風

深追いはやめてきれいな愛にする

誤解とく言葉が右往左往する

言い出せぬままに雑談して帰る

裏の顔見たくて酒を酌いでいる

手に入れた椅子がなかなか温もらぬ

倉吉市 野中御前

ちよつとりツチに止り木で飲むワイン

枯れた花ばかりで唄う枯れた歌

刺客かな差出人のない手紙

百薬の長とキャベジン飲んでます

スイツチオンそれから続く長話

倉吉市 淡路ゆり子

神様は見通しだった手の汚れ

ねぎ刻む手許の狂う歳になり

入院を祭すむまで待たせてる

人間が一番恐い闇の道

幾星霜同じ日はなし夫婦日々

倉吉市 渡辺菩句

齢ふえてゆく鉛筆は減ってゆく

ここに住みここが好きですここで死ぬ

じいさんと呼ばれ淋しい秋である

赤とんぼ捕つたらお目目腫れるんよ

こおろぎのお爺が昔咄する

香川県 松村迷観子

口紅の彩で女を計るとは

因縁を果す相手は鬼か蛇か

ホームラン ベンチ温めていた補欠

窓ぎわに居てカタカナ語よく使い

眼科では近視 耳鼻科は遠い耳

香川県 木村明人

手土産はヒョツと贈賄かも知れず

天高し一度は翔んで見たくなる

額に汗して農夫症だけ残し

空手形切つて世間をせまくする

真つ白に洗うと川は黒くなる

香川県 成重放任

もうひと汗かくかとリーター立ち上がり

ダイエツトしながら妻の二重あご

患者より顔色悪い看護人

手の内を見せぬサインの送り合い

手抜きしたたたりで世間を狭くする

香川県 川崎ひかり

花植えて幸せごっこしています

その先を言えば傷つく人がいる

実家には私の座る椅子がない

片方の私の耳は噂好き

待つ事も幸せでした恋の日

香川県 池内 かおり

竹原市 時広一路

一豊の妻で話題の株を買う

継ぎ足せばまだ乗れますよ縄電車

野次馬が散って話に尾ヒレ付き

グーチョキパーいつもグーから出す私

シルエツト妻が美人に見える宿

一合の酒が嬉しい人にさす

新婚の師走は全て親がかり

たおやかなコスモス風もまた愛す

福娘良縁というオマケ付き

悪人は僕だと言っている喜劇

呉市 榎田英詩

竹原市 岡本清水

瘦せてゆく曆に過去が裁かれる

清々し秋の稔りに齡わすれ

熱のない男が蚊帳の外にいる

免許更新あつと言う間の三年目

病む床に障子影絵の雀たち

風向きを厭うています蝶と蟻

酒を呷って自分を責める卑怯者

酔うくらい木屋匂う朝の晴

雨上り電車に傘が捨ててある

嘘一つないと言うのは本ものうそ

竹原市 三宅不朽

竹原市 岩本笑子

お粥さん窓開け放ついのち哉

二十年まだ旧姓で来るハガキ

これからが道連れうどん吹きながら

我一人犬一匹の昼が済み

ことさらに秘仏へこころのこす霧

忘れな草買う初恋の一里塚

ある女の憶いからむ曼珠沙華

Uターンそろそろ見えて来た老後

愛恋のザンバラ髪か曼珠沙華

古里をガイドしてます塩の町

竹原市 森井菁居

広島県 田村新造

縁談の輪の外に居る男親(長女愛婚約)

重病になってアムールまた渡り(興安嶺逃亡記)

柱磨いて待つ吉日の靴の音

シベリアがロシア嫌いにしてみまい

大安の花器あでやかに盛るがいい

人の死を見飽きてやっとな春の雪

結納が来たと知ってる近所の目

冬越して生気が戻る解水期

父らしく唄うてやるか祝い船

流水をぼんやり見てる病みあがり

広島県 藤 解 静 風

政治改革へ揺さぶりかける上申書
泰平が続いて男脆くなる

フルムーン金はよう使わず帰り
満月にぶつかり島のバス曲がる
ふとん叩く欲求不満かも知れぬ

大和高田市 岸 本 豊平次

学徒動員の頃も話題に同窓会

山の辺の道は足もとから秋に
マザコンもいる幼稚園の運動会
妻の客 勝手口からやってくる

誰にでも好かれる人に気がおけぬ

西宮市 門 谷 たず子

妻という通行手形幅きかす

一蓮托生あなたまかせの木の葉舟
すこし浮きすぎていないかハイヒール
どんじりを走ると拍手あたたかい
竿竹売りの声が切ない雨の午後

姫路市 人 見 翠 記

防災の日 今朝はクローラーの一休み

涼風が渡れば読書欲も湧き上がる
赤とんぼ人恋しいか追って来る
布団着て寝心地のよい今朝の冷え

気温不順 一人芝居の七変化

箕面市 坪 田 紅 葉

若き頃帽子できどってハイヒール
面倒な話にのらず酒を出す

気にした事が片づく秋日和
犬の子が生まれてからは便りなし
秋の風おしゃれ心をはこびます

高石市 浅 野 房 子

一線を引いて夫婦も友情も

祭り太鼓うつつに聞いている朝寝
気まぐれに買って被らぬベレー帽
遠い日の記憶の中のかくれんぼ
終章にきて退屈と空しさ

大阪市 大 塚 節 子

心臓にどんと負担のタイガース

重陽の栗の節句に父逝きぬ
飾りたてた新仏の前むなしかり
何となく帽子の似合う父でした
赤ちゃんのままの心で逝った父

寝屋川市 岸 野 あやめ

ライバルの手紙達意で達筆で

句がどうも下手になってと病み上がり
千年を耐え仁王さんリフレッシュ
もう師走 本家の嫁は気丈者
連休日 働き蜂にない居場所

宝塚市 丸山 よし津

暮しの音少なくなつて老いてくる

老いたなとしみじみと見る試着室

日本茶は丸いお盆がよく似合う

月参り賽銭箱が多過ぎる

財産は残さぬ夫婦旅行好き

唐津市 田口 虹汀

闇夜でも母には分かる父の船

立って見る歩いてみるという意欲

無欲では呆けてしまふと自画自賛

なんぼ指繰つても酉は僕の干支

闘病の支えに筆と詩がある

唐津市 久保 正敏

反省は猿に任せる茄子の花

肩書があるから小卒だと言え

家系図の家紋迎れば二人扶持

不確かな仲で確かに待てる人

百の坂まだ七十の集印帳

唐津市 仁部 四郎

畳替え父上横になり給う

横文字とカタカナ村は選挙中

新聞を二紙横に読む無位無冠

横槍が仕分け直した敵味方

横からの口で味方を一人捨て

唐津市 山口 高明

国政を任すお方が呆けて居る

ハイハイとあんた本当に養子むき

懐妊の兆し御式を急がねば

慌て者足から先に出て来るな

レーニンに気触れた昔若き父

唐津市 筒井 朴竜

一徹な神父が説いた唯心論

碌で無しギャンブル狂の悪女殖え

質暖簾潜りマイカー足を入れ

鉢分けて花も延寿の君子蘭

苦劳甲斐在つて上棟マイホーム

唐津市 浜本 義美

昼と夜の二つの顔で子が育ち

俄雨 自動ドアの前に佇つ

碑に雄叫びをきく古戦場

肩パットどころか背中丸くなり

勝星の汗が流れるインタビュ―

唐津市 浜本 ちよ

新製品見ればどうでも欲しい若さ

ふんわりと温い布団のような女

減らず口多い年寄り放つとかれ

空想は数限り無く湧く女

待たされて怒つて泣いて女老い

尼崎市 春城 武庫坊

雑念が多くて馬鹿になりきれず
昔話の好きな奴で前向かぬ
思いたつたらすぐやらないと後がない
薄命の美人は過去の語り草
神ほとけ何のサインもしてくれぬ

尼崎市 春城 年代

三つ違いの叔母と話が弾みます
古希をものかはナナハンぶつ飛ばす弟
ネジを巻かれて反発をする長い脚
七十歳の大台ときに忘れさせ
病を連れてどこまで続く旅かとも

尼崎市 奥山 美智子

朝やけの海に思いを溺れさす
石けりの石の行方がままならず
ジャンケンポン負けてもグーを出している
好きな子の名前知ってるシャボン玉
掌をつくづくと見る十二月

尼崎市 田中 薫

人形の吐息が洩れている楽屋
死に行く大和の雪に燃ゆる頬
撥冴えて恋のふたりに雪が降る
死に急ぐお初に鐘は聞えたか
七三で柀頭を打つ死出の旅

京都市 故山 本規不風

激流に妻の指一本で繋かれる
バラの花棘痛くても抱き続け
吉年が廻って裏から良い縁談
何日誰が何を貰うた相続税
嬉し涙が溢れるので顔を洗う

京都市 都倉 求芽

見限ってみても日本でしか暮らせない
小役人の座右の銘は正誤表
山道の爪先あがりの秋探る
それぞれに鬼を飼うてる都市砂漠
ネクタイを朝の理性で締めて出る

京都市 松川 芳子

スカーフで秋を着こなすハイセンス
ストレスが溜るパチンコ屋の欠伸
話半分もう手の内は読んでいる
猫の話でもめている隣
ばあちゃんの九十年と言うドラマ

京都市 山海 友照

辻棲の合わぬ夫の脂汗
猜疑心の強い目を女から移される
恥ずかしい絵を褒められている画廊
その傘にその花言葉に熱くなる
弁護士に返す秋の絵を送る

柏手を打つともかくのよりどころ
岡山市 川端 柳子

芒野に居心地のよい秋の風
見届けておこよう愛の水溜り
赤ちゃんに見詰められてるうろたえる
魅せられて紅葉に負けにいく夫婦

岡山県 小林 妻子

心にもないお化粧がはげてくる
口上の上手さに猿が引っかかり
人間を陶冶しすぎたとも思い
煽てられ足の位置まで見失い
愚痴は皆吐き捨てましたさようなら

岡山県 矢内 寿恵子

白百合の視野に面影浮ぶ句碑
日進月歩老いの歩幅の立ちくらみ
仏と向い合うロウソクのつきるまで
つるべ落しの秋陽が染める余命表
合掌の深さにこぼる萩の墓

岡山県 山本 玉恵

無一文になって地獄を見て戻る
火の山を抜けシナリオを書き直す
親想い子を又想う柿の初ちぎり
絶ちきれぬ未練にとんぼ来てとまる
虹を見てどんでん返し立ちくらみ

岡山県 二宗 吟平

道しるべ細ごま柳友ある恵み
初対面でも柳友のすぐなじむ
有難や大浴場を一人占め
握手したけれど多くて直ぐ忘れ
隣の句抜けてはらはらするばかり

岡山市 井上 柳五郎

立直る意欲は妻子から貰い
三度目も高い敷居の意識なし
粘られてやっぱり甘いパパとなり
居眠りも特技のような妻の冴え
さよならの別れを包む秋の雨

岡山県 荻野 鮫虎狼

惣菜を土産に妻の旅終る
過疎捨てた男が過疎へ戻る雪
是々否々がはつきりしないが解説者
湯豆腐の湯が沸き上る妻の留守
病床の天井ストレスだけ映る

岡山県 岩道 博友

老人会の小さな派閥の中で生き
通帳で裏金欲しい十二月
ウインドを覗いただけの秋財布
あの峠越えれば昔の義理がある
運針の指から大きな愛を産む

岡山県 池田半仙

赤旗の列の如くに曼珠沙華

ワントンポずれてチャンス逃すはめ

包丁を研いで炊事のお手助け

欲があり過ぎてマナーも忘れられ

若者が迷惑顔の老婆心

大阪市 河井庸佑

だんだんと節を越えるに苦勞する

忠告を聞けば良かったでは遅い

善と悪住んでる自分恐くなる

古傷に触れないように遠回り

新しい出合いは大事に育て上げ

大阪市 津守柳伸

おせちより湯宿を選ぶ母の新春

正月の留守当然の独り者

軌道から逸れ諦めが先に立つ

還暦の上座で揺れるイヤリング

健康で明るい母の物忘れ

大阪市 藤田頂留子

不景気で頼みの綱は十二月

どたんばで勝利の神の根性悪

極辛の世論をはこぶ佐川便

にぎにぎの性根は江戸の昔から

世をなげく庶民ひがみだけやない

大阪市 本間満津子

備忘録練っても出ない付け忘れ

手探りに応えてくれる鈴が好き

こたつと蜜柑いつも明るい茶の間の灯

メロンの通になつたと快氣祝い来る

破りたい汚した今日の一ページ

大阪市 北勝美

鹿笛に哀愁おびて深む秋

秋と冬一つになつた七合目

過勞死も思ひようでは安樂死

過勞死の出来ない人の不仕合せ

必勝祈願効き目なかつた神無月

大阪市 井上白峰

真直ぐに生きた誇りの無位無冠

善人と言われて下積抜け出せず

先頭で旗を振ってるお人好し

気の焦りまたも釘をかけ違う

背を向けた隙間に愚痴が渦を巻く

大阪市 北山悟郎

四帖半宇宙に構想を捻ってる

母ちゃんの無理が通らす父孤独

闘魂が今も燃えてる七十三

一皮を剥く技 後一步苦しんで

愛国を捨てれば義肢がわめき出す

大阪市 中西 兼治郎

地下足袋も帰り道には重くなり

朝までの命蜆は鍋で生き

栄転か左遷見送る人の数

家柄が良すぎなかなか来ない嫁

バスガイド外の景色に味をつけ

大阪市 榊 本 落 児

気にかかる百体仏の眼の行方

残暑の日 切手ななめに貼って出す

勲章の欲しい男は信じない

鹿寄せのラッパに僕もつい走る

邪鬼の眼が悟り開いたようにみえ

大阪市 寺 井 東 雲

順番が来たか停年避けられぬ

火打石旦那の土産待ってます

ジャンプして出世をすればおちつかず

血が走る親子の絆争えず

ゴルフ場トラ刈の山増加する

大阪市 上 田 柳 影

騒音に慣れた雀で太らない

八公のような男で御しやすい

頂点に立つと札幌欲しくなる

赤坂の夜にきれいな酒がない

もみじ今見頃と赤字線が誘う

大阪市 板 東 倫 子

税務署へ書いて出したい上申書

松茸少々焼くか煮ようか揚げようか

秋刀魚焼く家の灯があなたにかい

家族とは名のみこころはホームレス

飽食も飢餓も体験した強さ

高知県 赤 川 菊 野

薬害の怖さを語るこけた頬(骨折の治療で薬害に)

余命表だんだん薄くなつて秋

夢の中あなたのボタン付けてます

あの日から夢がふくらむ好い出会い

誰がために生きるか今日も米を研ぐ

高知県 北 川 竹 萌

知事 議長 OB会のカメラアイ

里の秋 茶園に唸る刈り込み機

一条の茶畑見真似の鉄刈り

土日休みたまに不便を思う日も

子よ何故にご先祖祀る神伐る

高知県 小 澤 幸 泉

黒ひげにどこか足りない父の顔

ネズミ捕り五人家族がわびしすぎ

一病がまた追いかける食の秋

辞書を引くそんな親父の丸い背な

秋深しそろそろ仕事かわろうか

吹田市 山本 希久子

紅をさす嫌い嫌いと言いながら
好いたのは同時嫌いに時差があり
くたびれてます三人の真ん中で
嫌われてます正論吐いてます
世話好きの耳が難儀をまた拾い

吹田市 栗谷 春子

この年で覚えた酒でよい月見
このところうれしい友がふえまして
木犀散る自転車置場雑然と
ひもすがらほほ杖ついた雲博士
ほんにほんに私も丸うなったもの

吹田市 茂見 よ志子

なまくらになれば包丁までも似る
ジョークには取ってもらえぬ生真面目さ
秋芳洞夫とつなぐ手の温み
山頭火 旅情を誘う防府駅
大は小兼ねる袋をはなさない

姫路市 大原 葉香

その中にテレビも過労死するだろう
パートに出て世間の裏がよく見える
山頭火の暮らし羨む車いす
一連の思索をつなぐ深呼吸
首縦に振ることに飽き目をつむる

仙台市 川村 映輝

脛かじりカード使って自己破産
北方領土強奪しながら居丈高
国土だけ大きくチンピラ小僧のよう
相続税 人ごとながら取り過ぎる
クリスチャン悔い改めた顔をして

羽曳野市 吉川 寿美

生真面目に生きて来ました土踏まず
ライバルと競う明日へ火の匂い
雑学を詰めてふくらむ老母の耳
一大事わたしの影を見失う
沈黙の妻が抱いてる不発弾

東大阪市 崎山 美子

普段着の女将は茶の間の匂いする
ごひいきへ女将の声が高くなる
夕やけにふと口ずさむ赤トンボ
病窓を染める夕日に里心
まだあった案に気がつく昼下り

富田林市 松本 今日子

エッセイをひたすら読んで充電す
みそしょうゆ充分持っている不安
良い話話せば半分取られそう
抱き上げた子供は日向の臭いする
むかで競走 心の合わぬのが一人

富田林市 片岡 智恵子

肩の力抜いてくるくる風ぐるま

成松先生 男は一度勝負する

なるようになるさ眠れば朝がくる

残り火をゆさゆさ孫を目に入れる

利にうとい女に神は味方する

羽曳野市 田中 透太

松茸に秋だ秋だと言われても

焼き芋の匂 隣の換気扇

定年をむかえ晩成とは言えず

美人薄命それはわたしのことですか

持ち点を使い果した十二月

富士宮市 渥美 弧秀

積もる話相づちを打ち酒弾む

バスまでの道苦になつて住む老夫婦

カラオケもゴルフも好かぬピアノ弾き

五時起床 紫紺の富士が待つてゑぞ

寝転ぶと富士眼のあたり日本晴

静岡県 蘭田 猷杏

干し物をパパが取り込む共稼ぎ

地獄へは一本道と聞いている

港の女見送りに慣れている

線路際庭にホームがあればよい

政治不信四コマ漫画に皮肉られ

今治市 越智 一水

人間をまる出しにして損をする

どうしても先におじぎをしまい

夕陽のように真つ赤でいのち沈めたい

孫がキスしようと孫にほれられる

父に似た人に結局娘は嫁ぎ

今治市 野村 京子

中流の気分にしたコンサート

ひとひらの風のセリフに萩が散る

一人住むドラマ見あきたドアチェーン

酔ったふり眠ったふりを終電車

罪の彩恐く自画像未完成

松山市 谷 真風

ヘルパーさんは女弁慶頼もしい

ヘルパー多忙心に襷しゃんと締め

のじ菊はもう見あたらぬ白い風

まんじゅしゃげなつかし長崎物語

病窓へ雀が見舞に来てくれた

寝屋川市 江口 度

戯画一枚残して杳と消えた友

タイムカードをガチャンと押している絆

ミソ汁の匂い鼻から起こされる

先生に波長を合わす本を買う

無病息災 老妻は手なれたお茶をいれ

寝屋川市 柴田 英壬子

和解することは出来ない留守でんわ
ハローページ敬遠してたほどでない
シンブルに生きる冗談つつしもう
親ばなれ子ばなれ知らぬ財布持つ
度忘れへペン進まない花の詩

寝屋川市 稲葉 冬葉

夜が長いと悪いこと考える
秋の夜が怖いアルコール依存症
ハミングを褒めたのが間違いのもと
コミュニケーションで塗り変る風の街
有名税にしては哀しい週刊誌

寝屋川市 平松 かすみ

面接へ特訓される三歳児
立ち読みはおいしい話ばかりなり
母になり子になり連れる影法師
遊覧船ガムの甘さが消えるまで
上にぎり食べて転換しましょうか

守口市 結城 君子

木犀の匂いに変わる秋の街
人ひとりあやめた記事のいと軽く
メキシコの松茸ですがとすすめられ
秋風やさんまは豊漁との報せ
絵のような化石転がるムスタンに

守口市 野呂 右近

仲秋の匂 流してさんま焼く
丹精の菊切り老母墓参り
ほおずきを鳴らして偲ぶ老いの過去
健康度腕の日焼が語ってる
秋淋し種なし柿や干ぶどう

七尾市 松高 秀峰

もう修理きかぬ命透析す
金貯めて渡る世間は甘くない
後ろから落目を笑う声がする
汗の価値汗を流さぬ子は知らず
一部始終言い過ぎ反省させられる

羽咋市 三宅 ろ亭

文化祭 色紙短冊書きなぐる
読書会 妻二日ほど読書づく
デリカシーの意味を妻に質される
十年一日 賀状文言変えぬひと
盤持ちが終ると村は報恩講

茨木市 井上 森生

豊年の稲穂は知らぬ米事情
京の恋 枕の下の水の音
三歳でおんなのことばしたたかな
フロリダの土産話にワニ料理(アメリカ旅行)
ロケット発射アメリカ国家ここにあり

西宮市 西口 いわゑ

町田市 竹内紫鏞

菊人形その香に負けぬ美男ぶり

たんねんに鶴を折っている絆

ためになる本を立ち読みしています

人の世や逢うも別れも酒を酌む

雑草の哲学 土は選ばない

奈良県 長谷川 春 蘭

角切りを知らずに歩む鹿の影

菊育て日日足るを知る凡夫婦

破れ堀の土のつぶやき秋の声

駅のコスモス人の訣れを見るばかり

秋深し有為転変の星に生く

宇部市 平田 実 男

人情も空気も昔のままの過疎

食欲の秋もて余す紙おむつ

金竹小やはりこん畜生だった

酒に酔い話に酔ったクラス会

嫁をほめ過ぎて娘の気を損ね

姫路市 丁坪 サワ子

友見舞い明日の我が身を模索する

やがて来る恍惚という刑の彩

マネキンが着るから引立つニューモード

電話帳見て初恋に掛けてみる

億の夢一発買うか宝くじ

専門馬鹿ばかり兄弟集まらず

発汗の分布も変わる肌の老い

世は平和チンと温めるさつまいも

電話網ひとの病気をふくらまし

妻入院 次男いつから家事上手

玉野市 小谷 仙 山

昔むかしを語るに砂の一握り

生きのびて幸せ多く恥多く

お勝手になさいそれも作戦か

水苔のよし悪しにありランの出来

姫だるま私一生棚の隅

境港市 細木 歳 栄

わざと神逢いたい人に逢わせない

天網恢恢 神様矢張り知っていた

癌と言う噂うっかり痩せられぬ

秋深し蚯蚓鳴くとは誰が言いし

雁金の飛来に近き冬想う

伊丹市 山崎 君 子

赤トンボ新幹線に追い越され

通帳に娘の温さ溜めてゆく

待ち呆け犬だけが尾を振っている

今朝の夢誰にも言えぬバラの色

冬の海波の誘いはきつすぎる

和泉市 岡井 やすお

七十五日経たないで復活し
改革は投票なさるお方から
平和でも貨物空襲地獄図絵
冷凍でとは考えた輸入ずし
名案も顔のわりにであしらわれ

箕面市 椎江 清芳

喝采は一度も聞かぬ馬の足
赤ランブ生死の境抜けて消え
大物は過去の修羅場を語らない
背を向けた男に遠い祭り笛
逢い引きの部屋に酸素が薄くなる

阪南市 坂口 公子

ちっぽけなお腹ようまあ多病飼い
まんじゅしゃげ何と佻しい惚けかた
夫病んでカロリー計算飴ひとつ
松茸のもう諦めたい匂い
偶然から俄然味方につけた愛

豊中市 辻川 慶子

春夏秋冬ときめきがあり菊活ける
木犀の香に振りむけばいい月夜
参道の寄り道たのしみ月参り
信号を何度見送る立ち話
キャッシュカード プレーキかかる十二月

宝塚市 吉田 笑女

気の重い椅子へ一年座らされ
行く先は姑の気まかせ足まかせ
難問のヒントを拾う古日記
二三日続く母さんの無言劇

岸和田市 芳地 狸村

道標の向きに迷いの岐れ道(逢坂山)
句碑のある芭蕉ゆかりの幻住庵(石山)
朱に染まる山の景色に酔っている
おまつりの蟹の料理に和む顔

守口市 羽原 静歩

賀状書くあの顔この顔すまぬ顔
書きたくはないが案内状に欠と書く
終章を消しゴムで消せる術なきか
もつれ糸ほどいて亡妻の瞳が笑い

河内長野市 井上 喜醉

健康のためと六十路の共稼ぎ
魂の洗濯彼岸の墓参り
人間の顔色読めぬコンピュータ
優勝は騒ぐと逃げて行くらしい

藤井寺市 福元 みのる

チビ同士合図しあって親だます
ガン告知むしろなごやかホスピタル
検査信仰ストレス殖やし病んでいる
庭の木々主の心に良く応え

静岡市 安本晃授

落葉焚く一年の罪消えるまで
足踏みの好きな私とボチがいる
何気ない愛嬌らしい妻の惚け
天と地のドラマで踊る年の暮れ

奈良市 米田恭昌

立ち読みのよう松茸の匂いかぎ
あくぬけてまあるくなつてただの人
善人の面つけ肩をこらす鬼
脂肪肝にもなるでしょう午前さま

姫路市 中塚遊峰

辻地蔵ペダル踏みしめ「あんかかかびさんまいそわか」
乳ガンで老大の友一人逝く
雨の夜もヒーローがまた通りすぎ
修羅の面外すと足まで呆けて来る

八尾市 古川 覚然坊

歩き過ぎ歳考えと医師は言う
不渡りへ男の意地がはねかえる
日曜日 電気鉋に使われる
十二月まとめて貰う金が有り

八尾市 片上英一

北海の珍珠の声が遠くなる
賞罰はナシで通してきた履歴
ショッピン グ カード破産という言葉
刺のないバラもまれには咲くのです

大阪府 榎山 隆

風下のさだめ枯葉の吹き溜り
慶びと淋しさ灯す娘の華燭
ファミコンの子は叱つても上の空
銀髪は集大成の光なり

米子市 茂理 高代

みの虫も辛抱ですとぶらさがり
手招きをされても霧から抜けられぬ
ふるりの螢やさしい光もつ
彼岸花 妹や友を思い出す

島根県 藤原 鈴江

歳重ね達者になるのは口ばかり
だんだん交じえて温い出雲弁
夏バテでちよつとスリムになりました
お姫様育ちの頃の夢よ夢

島根県 高野 律子

この橋を渡れば自分史終りそう
ぬるま湯に浸って夢がみのらな
億の夢みのらぬままに宝くじ
耐えぬいた柵 田の汗は忘れない

出雲市 竹治 ちかし

宇宙から見れば国境ない地球
締め直す兜の紐が伸びていた
ソロバンがいらぬ仲間の旨い酒
出世せぬ男に里が遠くなり

西宮市 秋元 てる

天翔ける夢は捨てない車椅子
人待てば雀が傍に来て覗く
狼が白い手見せる話だナ
猫嫌ひ彼の猫撫で声に似る

茨木市 堀 良江

いつどこでこんな話になったやら
七十五日待たず噂は風に散り
見解の相違とだけで済まされぬ
手をつなぐ二人のあとを一人行く

吹田市 井上 照子

よい香残して美女がすれちがう
痴れるとも妻たらんとす茶を入れる
トラバーユ夫唱婦随の汗実る
妥協してついでにだけフルムーン

和歌山県 小倉 アサ

母の掌をやつと抜けだす躰糸
白羽の矢当ると恐い対角線
好きな糸ばかりを寄せる冬景色
四捨五入 石にもあつた運不運

和泉市 西岡 洛醉

朝露に昨夜の罪を詫びた背
良妻の城に我慢の強さ見る
老いの背を陽炎ゆらゆら温い声
金平ごぼう妻のうまさ盛ってあり

川西市 松本 ただし

ふる里の墓で待つてゐる父母の耳
ここだけの話が好きな九官鳥
陽当りが良いのでひと言多くなる
風に乗るコツを覚えた竹トンボ

大阪市 富岡 温子

友情を大事にしたい苦言吐く
淋しい日 仏と会話多くなる
反論をイライラ抱いて見るテレビ
出るとこへ出ろと言うほどの事でなし

大阪市 町田 達子

口答え出来て幸せ嫁の位置
我を折つて少うし嫁に甘えとく
うっかりと乗つた話の舞台裏
若さとやレモンの香り文化祭

出雲市 小白金 房子

牛飼いに惜しい刈田の藁を焼く
なりふりも構わず牛飼う嫁の意地
一杯がいける男の口上手
母と子の会話がもれる仕舞い風呂

堺市 一瀬 福一

浮世絵の女は炊事などしない
足の裏泡ゆらゆらと海女沈む
今まじめ百面相をする化粧
知り過ぎてやっぱりに情に流される

鳥取県 江原 とみお

鴟の贅 秋は深まるばかりなり
曼珠沙華の嫌いな女好きなおんな
気紛れな神が結んだ縁らしい
祭笛 収入役が吹いていた

鳥取県 乾 喜与志

挨拶にたつぷりと湧くユーモア
赤飯をじっくり噛んだ米寿の日
甘柿も渋柿も虫には判る
お守りが余所見した間の事故になる

鳥取県 津村 八重子

受験子をもって信心厚くなり
ほどほどに節度を守り老いを生き
柚子風呂の香り冬至の夜をつつむ
暑さにも弱いが寒さなおこわい

鳥取県 上田 俊路

晴れる日を黙って待っている自信
自信過剰 修正液は置いてない
決断の速い男の勇み足
幸せがかさむ眼鏡をとり替える

鳥取県 谷口 次男

監督が替っただけでV騒ぎ
総理よりヤクザが威張る国に住み
外面のいい娘だね母いびる
相性は悪いらしいが子沢山

倉吉市 最上 和枝

カーテンを引けば仮面が剥げてくる
傷心を抱いて引算ばかりする
脱皮する少女の胸の低い丘
胃カメラにまだポリープが生きている

加賀市 細呂木 魯木

口下手は露骨に本音白状し
分け合った雑炊戦時を語り継ぎ
ガンと知り曆に命かけている
若気のいたり一途に惚れて後悔し

貝塚市 行天 千代

むつかしい事件も金で丸く済み
裁く人も自分の首が大切だ
十五夜の月の心でいたいもの
長袖の肌着に替える今朝の冷え

香川県 新川 マサエ

宇宙から地球見守る夢を乗せ
ポケベルを持たせ塾まで気を使う
子供産業 裾野は広い花盛り
古根から何と可愛い花が咲く

諫早市 原田メイシユン

口止めをしたのに孫はすぐ忘れ
よく学びよく遊べるか五日制
夕月を見て金丸さん何思う
駐在所に野良猫平気で日向ぼこ

箕面市 中嶋 田実子

政治家の錬金術はきな臭い
法の前 政治家にある貴賓席

柿の実のたわわへ子供みな巢立ち
豆さんを煮ながら主婦のティータイム

大阪市 神保拓生

半値だと言われその分無駄遣い

悪友の誘いは語尾を省いてる

マドンナにもう歳ですは禁句なり

あの母のコピーですから美人です

島根県 槻谷一葉

宍道湖も風いで術後の朝が来る

宗教を哲学で説く強いもの

気がつけばシルバー席にいる私

サルビアも夕陽も燃えて秋がゆく

出雲市 富田蘭水

ダイエット秋たけなわの膳が待つ

明暗の入った手紙に深呼吸

ふれた手に全神経の心地よさ

革かばん持つと昔のよい姿勢

島根県 佐々木芳正

誠実に生きいい顔がそこにある

弔意と見栄のどちらも秘めて黒真珠

脱色をして剃り上げて自己主張

ループ橋おろちとなって山を縫い

伊丹市 梅田宣司

老妻の目に叱られる席に着き

母を待つブランコ一番星みつけ

瞑想を惚けてるなんてよう言うわ

その話少し美化していいいかな

和歌山県 西口忠雄

倅せは何でも噛める自歯を持ち

好き好き好き野菜サラダは山盛りに

ゼニカネで買えない杖は一つある

早う来い待っててよてなことというて

鳥取県 黒田くに子

気位の高さでこせぬ水たまり

じわじわと老化を刻む背が曲がる

夢も希望もない言うて良く食べる

指切りのやがて炎を生む風を生む

鳥取県 乾隆風

老いてなお色鮮やかな唐辛子

もう逃げられぬ人間の列にいる

生きのびる杖を一本買い添える

うしろからお寺の鐘が鳴っている

鳥取県 幸家單車

老人も生き生きしてる艶ばなし

嫁ぐ娘に父の短い独り言

化粧した顔に心の棘がある

棘出さぬうちに女を飼ひ慣らす

鳥取市 岩原喬水

薬飲みながら酒とは縁切れぬ
ブランドの下着女神になったよう
優しさは犬も知っててよくなつく
泥舟に乗って不運な星に会う

和歌山市 北山好笑

ピンチにもピエロを演じ切り抜ける
下心グラスの底に揺れている
身に余る椅子に評価が待っている
用心して言った言葉に返る針

守口市 森川まさお

鱗雲 人みな地下の道を行く
道路鏡斜め飛行雲映す
曼陀羅や真っ白い虫浮遊する
夜の間に草は働く土の下

大和郡山市 坊農柳弘

七五三 秋有終の美の祭り
花金の最終電車高軒
オールドミス陰でセクハラ笑ってる
姿見に話しかけてる妻外出

河内長野市 植村喜代

幾許の命逆転するまでは
居直って済むものでない新事実
口止めをされたか元氣見失い
窓開けて出てほしいのに出ない虫

出雲市 板垣夢酔

信号のない虫たちの道楽し
洗うたび顔の不出来がしゃくになる
奇麗でも花も落ちればただのゴミ
山へ来て山の心に二人溶け

岡山県 花田たけ志

ちよっとした出会いが余生の杖になり
汗しとどかけば聞こえる天の声
失言が独り歩きをして困る
くだらない話へ妻の空返事

出雲市 島祥庵

囁い声だけが聞える穴がある
手鏡を覗くと首の長い女
この森の良さを知ってる蝶 蜻蛉
司法解剖 心の飢えはさばかれぬ

香川県 永峰伽名子

著名の師変った名ですねとファミリアに
「愛忘れないで」つまされ涙ると落ち
どうしてこう涙もろいのでしょうか
愚痴なんて勿体ないです朝の湯舟

藤井寺市 中島志洋

今年また無駄でよかった保険料
しげしげと名刺と顔を比べられ
思い出の中に生きてる泣きぼくろ
鏡台の妻を急かせる鳩時計

大阪市 渡部 さと美

細描きの眉根にゆづらない個性

大物はいない多勢という味方

四季咲きのバラよ張り切りすぎぬよう

為すすべもなく雲ゆき萩は散り

豊中市 吉田 あずき

肩書がついて笑わぬ人となる

間違いを隠す笑いが多くなる

愚痴詰めた袋が秋の陽にすぼむ

子の便りまた読み返す午後窓

倉敷市 田辺 灸 六

忘れがち空気と妻の有難味

逃がしてはならぬ手許に来た金魚

入院のたびに少うしずつ悟る

入院の部屋にも御座る半名主

福岡県 横地 正好

平均年齢読んでこつこつ女蓄め

稼ぎ過ぎなどと男の背骨抜く

安かったのよとたんすの中が増え

均等法飲み屋も夫婦連れになる

寝屋川市 堀江 光子

通の店こも迷路の奥にあり

使い込んだ艶が自慢の母の家具

切れ端のメモの気になる女文字

趣旨はよく分かりましたと賛否まだ

和歌山県 寺田 裕 美

繕って後生大事な知恵袋

腹すえて二番煎じに甘んじる

神棚で充電してる守り札

本心を消す消しゴムに笑われる

倉敷市 井上 富子

スポーツの妙味覚えた車椅子

寝たきりも祭気分にする太鼓

宇宙飛行見ながら煎じ薬をのむ

もう少し猫を被っている打算

池田市 岡本 吉太郎

いいわけに花一輪を残し去る

気くばりで弁解の余地残しとく

嫁ぎし娘無心に来てても妻いそいそと

妻と旅 声を殺した小言食い

箕面市 岩津 ようじ

仕事では見せない顔で孫自慢

使途いえぬ金その理由もまたいえず

お互いに我慢してる気 社と社員

脳死でもないのにヒヒは肝取られ

島根県 石飛 水煙

冬の風残暑がよかつた老いの愚痴

いい夢を見たか笑顔で児が眠る

玄関に亡夫の靴を揃え置く

黙祷は左派も右派も肅として

豊中市 滝北博史

ビルの窓師走の夕陽拝んでる
階段を上る以外に道はない
女房があなたと呼べばご用心

豊中市 三宅つえ子

恍惚のドラマの中に父の役
彼岸前 亡母の姿と秋海棠
車椅子 他人の笑顔に晴れ上がる

西宮市 瀬尾六郎太

無礼講蜂須賀文化阿波踊
うら盆会万灯かかげ人惚び
過去未来現在凝縮忘れなそ

和歌山県 岩崎瑞穂

痛む腰なだめすかして過疎守る
口裏を合わす見舞の罪な嘘
飯場みな昼寝している蟬しくれ

鳥取県 石谷美恵子

巣づくりが下手かアパート出られない
金婚式駄馬も晴れ晴れいい笑顔
さようならなんて今のはジョークよね

大阪府 清水利武

若禿が男の婚期妨げる
曲がりなり生きて来ました古希の坂
スケジュール妻が立てたが愚痴ばかり

鳥取市 前田一枝

捨てに来て拾って帰る粗大ゴミ
大根足ミニスカートをはきたがる
旅支度 家出するほど荷を揃え

倉吉市 米田幸子

恋人に逢うとえくぼが深くなる
自信持て母は背中を押して出す
米余り落穂拾いの絵が笑う

大阪府 松尾柳右子

兎も角もタイガース見てやすみます
健康に暖衣飽食掌を合わせ
ブービー賞貰って機嫌が悪うなり

鳥取県 西川和子

さば読んだ齢が気になるアンケート
母さんの下さる刺は温かい
顔ぶれが揃えば金のいる話

岸和田市 三輪通彦

そろばんを弾けば奉仕など出来ず
忌憚ない意見へ強い風当り
穏やかな顔に戻った定年日

吹田市 瀬戸まさよ

夕焼けを信じ生きますこれからも
店構えご立派なかはアルバイト
老い忙しあちこち痛む医者通い

茨木市 藤井正雄

占いは相手の気持ち見てくれる
ファミコンゲーム塾へ追いつくママの声

主義主張違うが握手だけはする

大阪市 岡田ふみ

裏道に秋が顔出す枯落葉

孫の婚招かれました車椅子

萩の寺和服の女がよく似合う

倉吉市 野口節子

寶石を散りばめ心飢えている

うっかりと絡んで火傷してしまふ

足並を揃えたふりをする他人

鳥取県 石尾かつ乃

彼に逢う言葉を探す遠まわり

二次会の仲間やつぱり刺がない

奮い立つ刺激がほしい青二歳

鳥取県 太田幸枝

仕合せは磨いた靴が朝そろう

七坂を越えた足並よく揃う

夜中起きキス一匹を釣って来る

鳥取県 田村きみ子

童うた唄う会です行きましょか

このままの若さで居たい紅を引く

友達が沢山あつて坂もある

大阪新聞土曜川柳の会

と き 12月3日(木) 午後5時開場
午後6時締切

ところ サンケイビル本館3階322号室
(桜橋交差点西入る、サンケイホール隣)

お 話 大阪新聞社 塚本修三

宿 題 (各題2句)
「募 集」(選者当日発表)
「贈 る」 西出 楓楽選
「しぶちん」 岩井 三窓選
「人 間」 磯野いさむ選
(人間だけ2句連記)

会 費 500円

*各題秀句に大阪新聞社賞。後日、
全参加者に入選句発表紙郵送。

投 句 11月30日締切

鳥取県没句川柳大会

と き 12月13日(日)午前11時半締切
ところ 鳥取共済5階大ホール
(JR鳥取駅南徒歩1分)

会 費 1500円 宴 会 2000円

兼 題 「敗者復活吟」 角田 千秋選
「婦唱夫随」 石谷美恵子選
「老 人」 田賀八千代選
「病 む」 塔 寛子選
「伝 説」 岡本 和子選
「ピクピク」 徳田ひろ子選
「繁 る」 山根しげる選
「一 」 植田 一京選
「青 い」 奥谷 彩子選
「口 」 西口喜美子選

投 句 12月5日までに1000円を同封
〒689-11 鳥取市東大路64 両川洋々へ

自選集

藤井明朗

晩秋はみじかく暮れてゆく街灯
四季の花咲かせ陽気な無人駅
雑草も野花負けん気競い合っ
ぜいたくに揃うくらしへぐちを言う
環境汚染たばこ喫煙の孤独

辻白溪子

一言に本音が洩れていた不覚
善人を甘く見過ぎた悔い残る
真相の嘘が売れてる週刊誌
寝たきりの長生き杖を祝われる
何故と言う事が世間に多すぎる

波多野五楽庵

いつからか仏と結ぶ赤い糸
間違えて男がピルを飲んでます
ブランドが怖い男と言えませぬ
たった一人濡れてくるのは天邪鬼
会者定離と墓碑にきざんでおいてくれ

小林由多香

泣けるだけ泣いた笑顔が美しい
吊り橋を渡る勇気に橋揺れる
栄転のおいしい酒を飲みすぎた
坂道に向かうとフアイト湧いてくる
宝くじ当たる予感はいつもする

児島与呂志

老い生きるこれもかこれもかと悩む
一本の線つなぎつながら十二月
善人があきれ返って年が暮れ
しがみつくと枯葉をそっと落す風
背を伸ばす吐息を知っている鏡

水粉千翁

もつともな話に締める十二月
落ちつけと自問自答の十二月
足る足らぬ言わぬも芸の十二月
耳掃除済ませ春待つ十二月
春の音確かに聞いて十二月

八木千代

尾が重くなると逆立ちしたくなる
あいまいな影連れているわたしの尾
止り木に並ぶとつても長い尻尾
人間は弱くていつも尾を隠す
尾の痛みをうっかり忘れそうになる

野村太茂津

失態を知らず言葉に棘がある
そつとして欲しい弱みを突いてくる
三百代言のような厭みな臭いする
影武者に開き直れと励まされ
二刀流武蔵の構え視て悟り

松川杜的

うろこ雲株価上ろと下ろうと
老いらくの恋ハンカチが赤過ぎる
通称寺散步あぶり餅のうまい寺
同年輩の老いの姿は見えない事
朱印帳私より下手な字も混じる

野田素身郎

ドラマから何かをひとつ学びたい
孫が来る掃除をしても無駄なのに
集金人から僅かに情報得る独居
空任回収自分が捨てた缶もある
宮参り一家眷族従えて

正本水客

早咲きの萩おとずれる人待つ
萩めでた母なつかしむ萩の頃
萩活ける後ろ姿が母に似る
雨こやみ萩のゆれ見ていたり
去年は涼しかったかと話とぎれる(義弟一周忌)

岩本雀踊子

残高が0でよかった凡夫婦
生きていた朝をきれいに歯を磨く
姑の鱗を妻が拾ってる
落ちつける私の部屋に冬の蠅
逃げ場所があるおふくろの台所

工藤甲吉

十二月一日ことしまた遂に
金丸の擁護に回るへそ曲がり
君ちよつと鬱という字が書けるかい
ウーロン茶ばかり飲んでる惨めさよ
八十がふんばつたとて知れている

有働芳仙

三三九度ふとライバルの顔うかび
読書の秋 僕も隣もマンガ本
政界へ浄化装置はないものか
猫の声聞いてもねずみ驚かず
石路や遠き想い出 昼の月

よそおえど踊る心が洩れこぼれ
雀の先祖に舌の無いのも混じり
散り敷いた落葉落葉に迎えられ
作柄を案山子はちゃんと読んで
石仏のほお笑み温し里の道

本田 恵二朗

久家 代仕男

断崖を覗く覚悟は出来ている
動物の臓器もろうて生きたとて
優しさの海に溺れていませんか
鸚鵡にも教えて置こう留守のこと
そう言えば川にメダカを見なくなり

恒松 町紅

有頂天な男の影がうすくなる
案外な淋しがりやの自画自賛
ミニスカート流行日本語が乱れ
まだ田舎エイズの話など知らず
伯父叔母の区別も知らぬまま大人

藤村 女

ふるさとのロマン水車の詩がある
心憎い娘の気配りへ胸せまる
辞書を繰る情熱八十路まだ捨てず
今更に背伸びはいらぬ齢である
人前で泣かぬ明治の母でした

褒められて少し用心しています
エステサロンとやら家計簿とにらめっこ
青春はアツとモンペで走り抜け
粕糞んだなんて聞えてないでしょね
おしゃべりも消えて夏服売れ残り

遠山 可住

大矢 十郎

鉄を捨て卵を投げて佗しき世
袖の下からは我が世の春は来ぬ
聖職という職ありきその昔
軽蔑の目とブランドの似合う女
丸刈りの訳は野球に負けたとか

月原 宵明

戦争を忘れよなどと指が無い
戦いを忘れた軍鶏に葉鶏頭
雑兵に安くてうまい焼鳥屋
七人の敵へハンカチ渡すだけ
伝言板一つ一つにあるドラマ

金井 文秋

米寿まで自分で太鼓判を押す
医者のはからいで心電図 超音波
補聴器へ街の騒音戻ったぞ
もの忘れ鍵も怖いが火もこわい
ジーパンの色褪せたのがおしゃれとか

谷垣史好

たかが検査に手術室とは大袈裟な
肝が据われれば局所麻酔の面白さ
唯一の不安外科医の毛深い手
電気メスこれが人肉焼く臭い
終了間近 鼻歌が聞こえそう

小出智子

嬉しいときの癖を財布が知っている
茴香がひらりと届く脳天に
足りなかった時間を風呂で埋め合わせ
ときどきは病気も思い出してやろ
誤解今寒冷前線通過中

西田柳宏子

金出して貰う卑屈な笑み作る
土壇場の腹芸茶番めいてくる
埋戻し遺跡安らぎ取り戻す
立話長なが昨日の続きなど
プロとして敵の傷口容赦せず

植村客遊子

不機嫌はミシンのリズムにもひびき
万策がつきて煙草の輪をながめ
歛洗う所へ夕餉を告げに来る
誘われた貴男が悪い二日酔
隣席が美人新幹線がうらめしい

黒川紫香

リングリングよく晴れました岩木山(弘前)
くれないがムンムンとして八甲田
ちっぽけな滝も奥入瀬景になる
パノラマで撮っても十和田入り切らず(発荷峠)
もう冬の音して湯治場の煙(ふけの湯)

高杉鬼遊

孫を連れキリンの首の長さなど
まっすぐに生きたし曲り角ばかり
死にたいと思う日がない空の青
地獄から極楽へ行く周遊券
人は人わたしはわたし冬の天

新春 津山市民川柳大会

と き 平成5年1月10日(日)
開場10時半・締切11時半
ところ 津山市総合福祉会館大ホール
(津山市北520番・市役所隣)
会 費 1000円(発表誌呈)
お 話 土居 哲秋
題と選者(共選)
席 題 松本 藍・中川きよし
「炎」 池田 陽香・小島 蒼洋
「水」 浜子佳津江・寺尾百合子
「札」 下山 蛙柳・尾高比呂子
「魂」 山本 玉恵・服部 藍子
*各題2句(欠席投句拝辞)
15位まで呈賞
主 催 津山市教育委員会

一人吟

秀句鑑賞

11月号から

川島 諷云児

十人十色、人それぞれ句の味わい方に違いがあると思うが、平成四年の締めくくりとして、私なりに心して鑑賞させて頂いた。

句主の創意と相反したものがあっても知れないが、その点をご容赦頂きたい。

ロボットに義理人情も教えとく

羽津川 公乃

ロボットの進出が最近著しく目立ち、近い将来、ロボットに人間が使われる時代が来るだろう。人間の作ったロボットに人間が支配されるとは、皮肉な現象である。精巧な頭脳を持つロボットに義理・人情が理解出来れば幸いである。むしろ、ロボットを扱った人間に徹底した教育をすべきではなからうか。

マンガ読むセビロの顔を見せしう

玉置 重人

マンガブームはまだ衰えず。通勤電車内や喫茶店で、よく見掛ける光景である。何を読

もうと勝手と言ってしまったればそれまでだが、分別を弁えた人が、マンガでにたりほくそ笑んでる姿は頂けない。句主ならずともつい顔を見てしまふ。立派なスーツが泣いてますよ。おとろえぬ酒量中毒ですやろな

宮口 笛生

軽いタツチでユーモラスな句である。中毒と勝手な言い訳をしながら飲んでる姿が目につかび、思わず笑いがこみあげてくる。酒もたばこも、命あつての物種、ほどほどに……

錠剤を増やしてくれる医者がある

西山 幸

国民一人当りの医療費が、年々増加するのにも背かれる。句主の創意を、推量しかねるが親切と解釈するか、患者の申し出でくすりが増やす儲け主義の医者と解釈するかは、読む人の判断にお任せしたい。

飲み過ぎは逆効果。くれぐれもご注意を。枯葉一ひら頼れるものの無くて舞う

時末 一灯

この句を読んで、人生のはかなさをつくづく感じるのには私ひとりだけだろうか、人は皆何れは枯葉のように老い朽ちてゆく。宿命とは言え、淋しい限りだ。老いた姿を枯葉に置き換えたところに妙味がある。頼れる妻子が達

者でいてくれる幸せに感謝したい。

とある日綱引きしてる善と悪

山本 希久子

一瞬、「ふ」の脱字ではないかと疑った。普通なら「ふとある日」とか、「ある日ふ」と言うことを見聞しているが、とある日と強く四文字で言い切ったところに魅力を感じた。特に中七の綱引きが、この句を一層引き立てている。人には誰しも善と悪が同棲しているが、悪を押し殺すのは、本人の心掛け次第だろう。

たまに來た論吉泊らず出ていった

木村 明人

ユーモアとウイットに富んだ面白い句である。論吉泊らずに、つい声を出し笑ってしまった。偽の論吉さんでよいから逗留してほしい。大いに共鳴できる愉快な句である。

順調に老化をたどるしあわせか

舟渡 杏花

これと言った大病もなく、順調に歳を重ねて行く。結構な事ではないでしょうか。これ以上何を望まれる。

余生に非ず浪人の酒を酌む

榎本 吐来

軽い靴はいて余生を歩きたい

澤田 千春

川柳太平記 (175)

川柳の群像

武部香林

東野 大八

雑誌 No. 389 の『失明の柳人武部香林』不

二田一三夫。

この稿には、香林の人柄や柳界貢献ぶりが二頁にわたって詳記されているが、省略する。

今更結婚ロマンスといわれても、だが、私達は、お互いの母と母が従姉妹同士というわけで、縁談はお互いが適齢に満ちた二十五歳と二十三歳に手間ひまかからずまとまったのである。

私(香林)は、父が少年期に亡くなり、母は私を主人の如く大切にしてくれた。私が兵庫駅長をしていた叔父を頼って神戸に住んでいる頃、その母も病に伏して、岡山から見舞いに来た義母に「量義の嫁に貴いちゃんが来てくれたら……」ともらしたところ、「必ずよこします」と病人を安心させて帰ったのが、二人のこの世の別れとなった。

其の後、私もまだ若いし、奈良駅長になった叔父も、母同士の約束も口に出さなかった。時々墓参や用事で帰郷しても、叔母の家に寄っても彼女は畳に手をつけて「御機嫌よろしく」と挨拶して貴いちゃんは頗るすましていたし、私も無関心ではないが、おとなしい青年だった。

引越しの荷物となって手を引かれ 香林
柳友が寄って転宅させてくれ 若菜
「さびしい句だね」

と路郎先生は門下生を思うのあまり、目がし
らをそつと押さえられるのである。

淀川支部のリーダーとして幾多の俊才を川
柳界へ送り出した武部香林である。淀川支部
に好作家が多いのも、この人の指導力が大き
く評価されているゆえんでもある。

昭和17年に不朽洞会員になり、すぐその年
に中央委員に指名されるほどの手腕家でもあ
る。戸倉普天、中島生々庵、北川春巢の不朽
洞会三理事長を助け、よく三代の副理事長を
務めたのは、上下の信頼厚きたまものであら
う。

昭和3年(32歳)はじめて活字になった川
柳は、郷里岡山の山陽新聞の雑吟であった。

死んだ児の顔を見つけた夏まつり 量 義

この頃は本名で投句していたが、川柳はこ
れが処女作ではなかったのである。24歳に阪
神電鉄に入社、27歳で初代動力課の書記だっ
た頃、飲んだくれの課長の机へ

たこ梅のマツチ課長の席に居る

と川柳をモノして課長を怒らせたというエピソードもある。30歳で阪神電鉄を退社するま
での七年間、8時出勤の一時前にはキチン
と出勤していたという勤勉家であった。路郎
先生がどんな会合にも必ず定刻前に、早目に
出席されるが、香林氏がこよなく先生を敬慕
したのも、こうした共通点からである(『川柳

筒井筒の発端もなく、このまま推移していくかに見えたが、叔母は抜目なく私の月給の上るのを待っていたらしい。道具長者といわれた我が家も、父の死により岡山に移り住み其後上阪、母の死と、すっかり身軽になった頃、彼女の兄が上阪して縁談が具体化した。茶わんも何も新世帯の道具類は一切、彼女の母が整えてくれた。

妻の待つ方へ電車もまっしぐら
愛妻へフンフンと銭がなし
老婆は平戸するめの味もせん

〔『川柳雑誌』No.388〕わが愛妻の句――
従兄妹同士―武部香林

香林は本名武部量義 明治29年、岡山市生れ。有限会社「日東商店」代表取締役であり、不朽洞会副理事長で活躍していたが、昭和30年、十三年間にわたるそのポストから勇退し、特別会員、待遇になった頃から視力が日に日に薄れていって、はじめは老眼のレンズの加減かとの思い過ごしもあったが、なんとそれが不治の緑内障とは夢にも気づかなかつたという。

それが不治の眼病と聞かされた時、「いっしょに死のうかと思いました」と貴いちゃんこと若菜夫人はもらしていたという。彼女は

香林より二つ齡下だが、18歳の時には既に川柳を作っていて、ご亭主より柳歴は上である。「川柳さえあれば、生きていく杖にも光にもなります」と健気にもこの夫婦は、言い交わしていたという。だがついに失明の時がきてしまふ。

頬にふれるは秋の手のひらか 香林

十月（昭和37年）の本社句会で、生々庵理事長から、突然、武部香林氏ご夫婦の訃が報じられて、のけぞらんばかりに愕然となった。先月の十六日、徳島県箸蔵山の杉林で、男女一組の白骨死体となって発見されたという。なんと非情な新聞記事の報道だろう。僕（高鷲重純）は、これは人ごとではないと思った。（中略）眼疾で不治といわれているもつとも怖ろしい緑内障に罹った香林は、僕より一足先の盲人となり、若菜奥さんに手をひかれた黒眼鏡と固い握手を交わしたのは昭和三十五年の春で、それは郷里岡山市へ引揚げのため、大阪駅のプラットホームまで見送っていた時のことである。

僕は握手した彼の掌を両掌に包んでささやいた。盲人が目明きの句を作らずに、盲人の句を作ってほしい。心境の吐露やな。そう、

生命ある句だ。うん、うん、今までもつと重純と話したかったな。俺もそうだ。同病相憫でもある。あんたも目を大事にしなさい。ありがと、と逆に僕の方が見舞われて、瞼の裏が熱くなったが、その時彼の黒眼鏡が外されて、キラリと光る目がしらを拭いていた。僕は彼ら夫妻を乗せた列車がガタンと動き出した時、列車の進む方向へ大腿に歩きながら、頑張れと叫んだ。窓から黒眼鏡をとったま、うわつっらの視線を空に向けて、アリガトウと機嫌のよい表情だった。

僕と似たり寄つたりの、脚の短い男だったが、顔も胴も団子のように丸っこい僕に対して、頭鉢の広い団扇のように薄く平べたい彼の顔からは、陰相など絶対に見られず、いつも風呂から上ったようにつやつやして明るかった。彼の大阪にいる時は、川雉と路郎師に盡した業績は大きく、その輝かしい功労は、声涙ぐだる路郎師の感謝表彰となった。数多の温い友人と、相愛の閨秀柳人の愛妻と還暦まで連れ添った。そこで子のない二人だけの哀しい生涯を結んだのである（『川柳雑誌』No.427、秋のてのひら、高鷲重純悼文）。

▼次回は「高橋 操子」

柳籠裏三篇研究 (十五丁〜十六丁)

岡田〓出菌亀やフィクシオンではない。

259 へのこをばどこか仕廻ッて角力出る

佐藤〓それだけの句。

またくらにぬか袋程角力とり

宝二三札 4

土俵入りへのこの衣裳見もの也 末四 3

鈴木〓賛。つまらぬ句。

岡田〓関取の小まらは当時の通説なりし。

260 きれいな欲八月の能イ所コへ座し

佐藤〓これを欲と言えるかどうか。欲とすれば風流のなせる業であるので、きれいな欲といったものであろう。

青木〓主題句、単数とも取れますが、複数とした方が欲が効いてくるように思われますが。

岩田〓青木説賛。

西原〓賛。きれいな句。欲の句に、

説法の場合でさへ欲のすわり所 三〇 4

岡田〓同。

261 中将だけに人間が書いて出し

佐藤〓意、全く不明。ご教示を乞う。

岡田〓同。難句。宿題。

257 仏縁がなくて傘持人なし

佐藤〓和尚が雨に外出する折、傘をさしかけてくれる若い僧がいるのであるが、貧乏寺であるため、そういう男も所化も居ないという意か。

他に適解があるかも知れない。

岩田〓あるいは坊主持ちか？（しかし、傘の必然性がない）。

西原〓坊主の俄雨に逢う図か。傘を借りるにも知人がないことを、仏縁がないと表現したのであろう。

鈴木〓岩田さんの「坊主持」が適解と思う。

必然性がないと言いますが、晴天に傘を持ち

佐藤要人・八木敬一・七久保博
岩田秀行・紀内恒久・西原 亮
大野温干・青木迷朗
鈴木倉之助 故岡田 甫

歩くぐらい邪魔なものはないでしょう。

岡田〓小生も坊主持を考えていたが、どうもしっくりせぬ。不明。宿題。

258 こうかでも花蠟尻をすぼめてる

佐藤〓「すぼめる」は、しばせるとかちぢこまらせるの意で、便所で不覚の音をたてることを恐れるのであろう。例えば、おならとか、その他の音である。若い嫁の心情としてはさもあるう。

尻をひつて嫁ハ雪隠出にくがり 六 36
返事仕にくい雪隠の嫁 ケイ三

西原〓賛。出菌亀の作。

鈴木〓川柳子のフィクシオンです。

262 名代とともに夜具迄落ぶれる

佐藤 貰い引きを詠んだ句。折角の登楼にも
かかわらず、相方を他の客に貰い引きをされ
てしまい、本人は妹女郎の新造とともに、夜
具も三ツ蒲団などでなく、粗末な新造の夜具
へ寝る仕儀となる。まことに情けない次第。

きこへぬは名代がおんなじ直だん

一九五九

めう代をとってわつかな住居なり 一五三四

岩田 贊。三つ蒲団から一枚蒲団であろう。

御名代として蒲団か一ツ来る 二二四〇

紀内 岩田説、御明解と思ふ。

岡田 同。

十六丁

263 法眼の門へ馬上でくすり取り

青木 法眼は、法体の者に与えられる位。法
印につく僧位で、僧都に相当する。共に絵師
または医師などに授けられた。

主題句の法眼は、大名の御抱医か。薬取り
は待たされるのが常であるが、待つ事もなく
馬上から薬を受取るとは、この患者は身分の
ある家柄でもあろうか。

佐藤 贊。ただし、馬上の「上」をあまり強
く解釈しない方がよいのではないか。馬に乗
って薬取りに来たというだけで、勿論、大名
とか旗本など、身分のある患者からであろう。
岩田 贊。法眼は相当身分ある者の病氣を見
たらしい。

法眼をまたせて四ツ五ツける 五五

西原 贊。この法眼はお抱え医師であろう。

岡田 法眼は主として幕府のお抱え医を指し
て、句では詠んできます。

264 むすこを書くと物語たんと出来

青木 川柳に出て来る息子は、大体ドラ息子
が多く、この分野での一立役者であるが、主
題句に言う物語に成り得る息子とは如何なる
種類の人物であろうか。

佐藤 ドラ息子それ自体の体験を書けば、い
くつかの物語ができてよとの挿掄であろう。

七久保 贊。物語の構成に事欠かないほど、
ドラをしつくしているの……

西原 佐藤説賛。好色一代男以来、江戸期に
息子をテーマにした作品がすごい量である。

岡田 同。

265 腰をかけて、呼び出シを買って来ル

青木 「呼出」という場合、一つには吉原に
おける呼出し女郎の略称、もう一つは深川岡
場所における私娼の一種を挙げることででき
る。

主題句の呼出しは、上七「腰をかけてて」
から、深川の私娼が考えられるが、具体的に
何に腰をかけているのか不明。乞御教示。

佐藤 吉原の句と思ふ。仲の町の桜が満開の
時分は、茶屋の縁先へ腰かけながらの夜桜見
物、酒を汲みながらあっさりとお遊興するのが
通人の心意気であろう。「呼出し」は、呼出
し女郎のことで、昼三、三分女郎、二分女郎
が入る。もつとも、三分と二分女郎の中には
呼出してないものもいた。

八木 深川の句と考えていました。安直に時
間をかけずに遊んで来るのであろう。

西原 腰掛けてては、俚言集覧の「腰掛、俗
に仮に暫の間その処に居るを腰掛と云」の動
作を示したもので「チョンの間」である。

チョンの間に吉原の呼出しを買うはずがない
から、深川説をとる。

鈴木 この場合は深川。

岡田 同。吉原では仲之町の茶屋の腰掛けで
客を待つのは女郎、客は外聞をはばかり腰掛
などに腰をかけたらしなかつたようです。



黒川紫香選

熊本県 大川 幸子

通ぶって手が出ぬ陶器見るばかり
ふるさとが昔むかしとしゃべり出す
いい方に取ればやさしい風の向き
過疎になり鳥も人恋い山を降り
三寸の舌大それた事をいう

西宮市 牧 淵 富喜子

小川一つ消えて想い遠くなる
おでんぐつぐつ一つの家の味になる
救急車虫すだく町駆け抜ける
姑はまだわたしと同じ色を着る
その場所にしっかりと座る古机

名古屋市 藤 井 高子

ほめられて組んだポーズがほどけない
趣味会でジャンケン他愛なき老後
幽冥の境も解ける花手桶
ひとりより二人の好きな影法師
やり残しばかりに埋もれ十二月

浜田市 中 尾 まゆみ

ゴム毬のように弾んで鳴る電話
にくい人の胸に本音の種を播く
お父さんの肩へ登ってみたくなり
計画も白紙のまま風で舞う
天と地のはざままで想い叩きつけ

松山市 宮 尾 みのり

ゆっくりと歩けば風がみえてくる
半熟のままの女でBカップ
ご厚意に甘えすぎてたやじろべえ
指図する指しか持っていない不幸
ヨメハンの里で踊っている婿よ

富山市 島 ひかる

我が青春今だいまだと若返る
五百羅漢のやさしい風に逢いにゆく
ふるさとの水で献茶をする遺族
禅修行煩惱ひとつ落ちたかな
大井戸の句碑に出合える旅の夢

富田林市 池 森 子

切なさを沈めて秋の水溜り
青リングとレモン弾んでよく笑う
明るさにふと目が眩む秋の坂
谷間から背を押す風が吹いて来る
若返る距離に檸檬とひまわりと

藤井寺市 田 中 孝 子

残照の駅に來ぬ人待ちわびて
友の忌に静かに撫でる沙羅双樹
会釈するだけの愛にも深きもの
草笛の余韻しずかに訣れの日
廢線の雑草ひそと白き蝶

尼崎市 児 玉 歌 子

キツパリとけじめ大阪弁になる
非常口探す女の不倖せ
最良の伴侶がてんでこ舞いをする
女運もろに描いている背中
武勇伝編み込みながら口説かれる

富山県 高 畠 五 月

恋人のように老夫と一つ傘
ピーポーをお地藏さんも聞いている
夕焼けへ逝ったわが子と呼んでみる
吊り橋の揺れを気にする村長さん
有髪の尼僧が怖い仏さま

撰津市 木 下 道 子

幸せを呼んでる孫の片えくぼ
化けの皮剥がれるまでの夢芝居
浪人の息子にテキの厚いこと
一筆描きを心ゆくまで飛行雲
営業用の笑顔を詰めている靴

柏原市 大 峠 可 動

枯葉舞う人のところを暗くして
幻想といくたび母の子守唄
晩酌は一本母乳が恋しくて
身は悪魔悟りきれずに堕ちてゆく
死ぬなら百歳喪主に詫状書き添えて

尼崎市 野 瀬 昌 子

意地っ張りな老母の涙を見てしまふ
言い訳も媚びもしませぬ眠いだけ
珍客に先ず枝豆を出しておく
仲間割れまたすぐ遊ぶランドセル
世渡りが下手で律義な菜葉服

大阪市 勢 理 客 トミ子

ありがとうセール ファンでないけれど
予約する年賀はがきや秋の天
秋空へ跳ねたボールが帰らない
間違ひ電話一本あっただけの午後
郵便受け今日も空っぽ深む秋

熊本市 宇野昭代

折り返し点からゆるくなる歩幅
海に来て海の広さと向い合う
門までの連れと野良犬心得る

焼き畠の灰からのぞく小さな芽
そこそこの縁でよかつた共白髪

兵庫県 森脇和子

あした逢う約束小指がもう騒ぐ
湯けむりのロマンに憧れ北の旅
けつまずく石に気づかぬ有頂天

止り木へ小さな約束したまんな
幸せな女の顔で米を研ぐ

松山市 白石春嶺

敵に背を向けた武将の小さい塚
どの窓もしかと生きてる団地の灯
トタン屋根を狂騒曲にするアラレ

消印も笑顔に見えるいい知らせ
それぞれの暮らしを詰めたゴミ袋

久留米市 鶴久 百万両

遊び下手の蟻へ助太刀してやろう
クイズ百問 解いたら充電したくなる
昼食付きの会費 選挙が近くなる

ピアノパーで紅の洗礼浴びてくる
巨人敗るもう弁解はやめ給え

広島市 流 奈美子

以心伝心 電話のベルが鳴っている
一言も告げずに去りし雲よ雲
本心を言いすぎました罪ですか
来年も生きると鬼に言っておく

静岡市 沢田 きん

幸せへ眼を光らせている他人
ご自慢をすらすら話す軽い口
人生へ悲喜こもごもの一行詩
貧乏神肩を落とすと寄ってくる

尼崎市 森 安 夢之助

年毎にだんだん遠く故郷の灯
思惑が外れた父の苦笑い
母さんが笑うと猫が背伸びする
この辺で言い訳をする曲り角

鳥取県 大角 正道

親となる責任感の名をつける
子守唄うたって親となつてゆく
ゆつたりと子どもの顔を見てやろう
雑学という生き方を学ぼうか

鳥取県 大角 幸代

昨日今日わたしが少しずつ変わる
一心に私を見てる子の瞳
双子ですえくぼの場所で見分けている
虹を捜していつもふたりで歩いてゆく

鳥取県 大角 幸代

虹を捜していつもふたりで歩いてゆく

藤井寺市 高田 美代子

挽歌聴く魔女のまつ毛が美しい
諦めたわけではないが陽が落ちる
見ない振り親切なのか意地悪か
ためになる本を枕に寝てしまつ

芦屋市 黒田 能子

乗り降りの自由な切符持っている
すり切れてやつと馴染んできた靴
うたた寝に枕をそつと差し入れる
ママの趣味に飾られている女の子

熊本県 岩切 康子

いい出逢い趣味でつながる友が出来
恩師に捧げる花は庭育ち
ハイキング会員外の夫も居て
半額の切符で友情温める

尼崎市 的場 十四郎

門構えだけでは見えぬ家のなか
陽溜りで弾む毛玉にジャレる猫
溜め息に妥協はしない山男
燃えるものあるから明日を信じきる

尼崎市 尾宮 弘治

信じきる母への嘘が汗になる
浪花節唄うて孫を眠らせる
米研ぐ手とめて虫聴く台所
散らかしてあるけど温い台所

尼崎市 山本 すみ

居心地が良過ぎて輪から抜け出せぬ
物腰が柔らかいので油断する
決心がついて迷いのない歩幅
星回りのせいで縁談断られ

尼崎市 長浜 澄子

遅咲きの青春キラキラしています
白い歯が二本期待を担ってる
ライバルのなだめ素直には聞けぬ
駆け込み寺の門は情けで開けてあり

出雲市 原 章峰

根回しの根っ子に水をやりすぎる
病人にまだなりきれぬ人嫌い
薬局を覗くと会釈してくれる
疲れてるものを盥によく浸す

砂川市 大橋 政良

頭数だけを頼みの綱にする
木枯しに追われてくぐる縄のれん
一升瓶立てると男臭くなる
八方を丸くおさめる背が丸い

和歌山市 森 茜

紅ついた白磁の湯呑残される
かみ合わぬ歯車自転ばかりする
ため息を聞かれたなんて恥ずかしい
年上と思われていた初対面

香川県 辻上 よしみ

一言で人を泣かせる罪な口
男ゆえ顔に出せない意地を持ち
口癖か顔見りや文句ばかり言う
口紅を引いて女の顔になる

旭川市 朝倉 大 柏

相槌を打つにも右や左見る
仕事着も洗ひ祭の帯を締め
いつか効く錆釘にある父の自負
トンネルを抜けて油断をしまふ

広島市 森 田 文

赤とんぼいつとき空の胸をかり
畦道を走るわたしはまだ少女
雨の日は雨も楽しい鶴を折る
眠りから醒めて下界の騒々し

米子市 足 立 由美子

喜ぶと老母は赤飯炊いてくれ
刺のある言葉流せる耳にする
お揃いを持って同志と決めている
子のように犬に朝晩声をかけ

西宮市 山 本 義 子

旅の終りまた次の旅を計画し
野鳥の名少し覚える散歩道
最敬礼 朝一番の百貨店
雑草を刈りとりやつと庭になり

兵庫県 酒 井 靖 子

幾重にも聞いて実感やつと湧く
喜びを倍増させた花の束
記念撮影主幹の横で堅くなる
体験は強い味方で裏切らぬ

和歌山市 山 口 三千子

嫁が児をあやす異国の子守唄(イギリスにて)
美術館知ったかぶりで見て回り
ワープロ打つ側でわたしは辞書を引く
円安で替えたポンドが下がり出す

西宮市 岡 本 道 子

いつとき秋もこぼれて医者通い
しぶとさもやがて哀れな蚊の夜寒
逆縁の年を数える彼岸花
かぼちや割る石頭割るように割る

今治市 渡 辺 南 奉

行く当てがあるから少し身構える
いたのかと夫婦どちらも思う時
練習をしてもやっぱりトチる嘘
秋灯下猫が原稿紙へ座る

福岡市 井 崎 ミサ子

あいた口ふさがる話おまへんか
そうですか笑って聞くとときや聞いてない
口車乗らずにホツとなでる胸
厳めしい父さん母さんより優し

松江市 松浦 登志子

通帳に歴史を刻む母の知恵
生き生きと話す息子のニキビ面
自惚れの強い男で調教中
学歴で泣いた分だけ子に貢ぎ

和歌山市 辻 翠子

踊りの輪抜ける女の哀しい掌
ナイーブな風の誘いに酔っている
エピソードきれいな彩を塗り足そう
罪ひとつ海の青さへ沈めよう

和歌山市 堀 畑 靖 子

漁火がちらちらふつとよぎる過去
私の意志は殺しておく同居
ひたすらに走り続けて強くなる
煙草くゆらせて男の物思い

西宮市 菊 池 トミエ

人嫌い街にも出ずに本の山
カーテンを替えて落着く秋の風
鳳仙花 小さな庭で爆ぜている
敬老の日 嫁にもあげる感謝状

西宮市 亀 岡 哲 子

揚げ花火に一つの流れ星落ちた
古靴をはたいて亡父の煙草の香
絵ガラスに入陽さしたり君祈る
空港が出来て鯛は雲になる

守口市 森川 春子

一本の白毛抜くのも惜しくなり
講習で娘も喋る自信つき
出目金の尾鰭連獅子舞うに似る
運動会役員としてパパ走る

姫路市 松本 一郎

人嫌い人恋しさが同居する
茶を啜る静かな時が欲しい齡
茶を飲んで人間性を取り戻す
いい友があちこちにありいい余生

熊本県 高野 宵草

苦笑して僕を見ている神仏
女の子バスから降りるまで喋り
昨夜まで孫が走った部屋に寝る
ロボットがロボット作る日が怖い

宇部市 中村 三良

洗濯機も深夜疲れた声を出し
徹し切る雑魚は雑魚なりお付き合
ぎこちなく回る椅子には父が掛け
自責点ゼロとは言えず少し惚け

岐阜市 渡辺 杏村

冬日行く人の背中が丸くなる
温泉の子約がとれた年の暮れ
タクシー待ち首長くして年の暮れ
デイナーショーもう売り切れという噂

長岡京市 山田葉子

制服の下に隠している素顔
露ほどの邪心もないかかすみ草
嫌ってた姑のしぐさを真似ている
旅先できいた一言座右に据え

京都市 本莊福子

マニキュアにたばこはさんで神頼み
道草でもの識りになるランドセル
ラッシュアワーこんな近くに男はん
角切りの空でも青い空がよい

出雲市 岸桂子

海の話をついばい詰めた夏帽子
太陽にいじわるばかりしてる雲
海に流れる川はうしろを振りむかぬ
夜叉の面捨てておかめの面かぶる

鳴門市 八木芳水

父の樹を巣立ち大人になりたがる
橋は一本道で迷いは起させぬ
納得のゆかないままに日が落ちる
妥協癖ついた背中に老い忍ぶ

高槻市 守先伸子

タイガースに花まるつけて年送る
机上では夫より長生きする心算
政治家の胸に偽善の赤い羽根
老いの膳小鉢をしゃれて食さそつ

和歌山県 杉山精子

秋桜に抱かれて仰ぐ青い空
威厳まだ匂う男のいぶし銀
歳月を満たす私の回顧録
コピ―人間ずらり並んで待つ始発

酒田市 永澤裕子

爽やかな印象でした初見合
キツチンに立ち尽してる秋の幸
組み立てのオモチャのように家を建て
嫌な虫水葬にした朝の鬱

佐賀市 江口万亀子

年金をいただくたびに有難う
舟の旅思わぬ方に陽が沈む
諸行無常 健康自慢が先に逝き
針一本落としたばかり這い回る

兵庫県 西井つや子

七十の手習い踊りの輪に入る
カレンダーに三重丸の嬉しい日
罪のない言葉に角を立てたうつ
飴玉をねぶつて今日も栗を選ぶ

高槻市 芦田静江

栄枯盛衰墓はかたらぬ代替り
剪定の音風に乗るいわし雲
もう一度聞きたい亡母の青写真
生字引亡くして孫のコンサイス

貝塚市 池田 寿美子

金は出すが口は出さない人が好き

エッセイを溜めて夜長が待遠し

ポイ捨てにコスモス街道泣いている

京都市 小林 英子

快い眠りに誘ういい別れ

お披露目の妓に行きずりのカメラアイ

真夜中の信号とでもリズムミカル

羽曳野市 芦田 絢子

約束の確認をする雨もよい

美化された想い出ばかり七回忌

時は金 歩くのやめてバスにする

広島市 中村 要

秋風が妻の方から吹いて来た

多数決多数の方へ手を挙げる

タイミングはかりとっさの空涙

寝屋川市 宮崎 菜月

酔い止めの薬あげようトラキチへ

お彼岸へ牡丹餅お萩と名をかえて

同色に枯れて花野に散りたくも

和歌山市 田中 みね

秋雨に打たれて届く計の知らせ

余計なこと言うて大役背負い込み

束の間の夢をもたらず福袋

尼崎市 吉永 伊三郎

音立てて御輿を毀す秋祭り

改札で切符を探す故郷の母

ヘッドホン当てる漫画を斜め読み

尼崎市 中澤 向西

泣き言が猫なで声になってくる

枯れすすき穂が垂れている門構え

牛語る牛歩そんなにおそくない

尼崎市 湊 修水

大井戸にすっかり馴染む川柳碑

近松の庭へ初秋を撮りにゆく

夏物をしまいと秋が急ぎ足

枚方市 森本 節子

手のひらで身動きもせず秋の蚊よ

焼きたての秋刀魚におかわりするご飯

鐘をつく余韻ある間に願いごと

熊本市 黒田 緑

一滴の零命に似て光り

人間味抜き知識を持って離し

こだわりが過ぎて頑固な一本気

香川県 田中 ふみ

悪友と逢えば本音の口達者

嬉しくて弾む笑顔の電話口

いつとなく孫に期待をかけている

新潟県 高野不二

留守番電話へ留守番電話の口調で言う

マスクミの予想通りに票が出る

自動販売機の方がはつきり札を言う

和歌山県 岡本睦美

エプロンが似合い寂しいときもある

ときめきを合わせ鏡にうつし見る

父の忌にまた母の背の小さくなり

静岡市 小木久子

暇すぎて家事がなかなか捗らぬ

気の強い女可愛いくしゃみする

振る旗は曖昧にして生きる知恵

静岡市 浅子まつゑ

平凡と言う幸せに今日も生き

お世辞とは知りつつ顔がほころびる

病む人の様子どうかと窓の月

静岡市 片平静代

恋文を見つけた母の古行李

掲示板錆びた画鋏や師走風

宅急便わくわく開けてせまい部屋

鳥根県 菅田かつ子

手の中へバツタ片足置いたまま

また一花ダリヤが果てた霜の朝

墓を掃くわたしと話す赤とんぼ

高知県 桑名知華子

子の居ない部屋で画鋏が反抗し

一試合観てそれからのファンです

いい仕事いい顔してるなと思う

静岡市 柳沢たま

行き帰り話しかけてる辻地蔵

秘めごとの一つや二つ持って老い

先に逝く友は良い人おしい人

岡山県 土居ひでの

千羽目の鶴を味方に立ち上がる

短冊へけなげな願い吊り下げる

名湯へ妻を連れ出すいい話

岡山県 国米きくゑ

吹く風に四季あり母の障子張り

冷凍にされたサンマも旬の味

戦友会 進軍ラッパのテープから

鳥取県 鈴木公弘

晩鐘といっしょに帰る肩ぐるま

いたわりを妻から貰う食前酒

うたた寝のできる平和が有り難い

松江市 佐野木みえ

木犀の一枝 私を和ませる

庭の樹をさっぱりさせてお茶にする

立ち聞きをして夕月に咎められ

兵庫県 北川 とみ子

和歌山市 玉置 当代

消しゴムと言う便利さに嘘をつく
背伸びせぬ暮らしに慣れて数珠をくる
連休にかかわりのない手内職

先生がお見えになつて和む会
這い這いを始めた孫に逢いにゆく
主導権嫁に譲つて旅に出る

川西市 田中 喜俊

鳥取県 奥谷 彩子

無人駅たった一人の下車でした

指切りで時々絆確かめる

地蔵様秋の味覚に埋もれてる

軽いジョークで心の棘を抜いている
いばら道抜けて歩幅を広くする

夕やけで山の姿が美しい

涙して笑いころげるのも若さ

静岡市 永倉 柳華

今治市 越智 青園

純白のドレス処女とは限らない

十二月八日通じぬ人が増え

一円が不足戻ってきたハガキ

ごもつとも意見へ十指組んで聞く

全没は眠気を覚ます刺激剤

先の先読んでだまつてじつと見る

柏市 上鈴木 春枝

今治市 和田 宏

門限の延長願う電話ベル

ヘルメット男まさりの二種免許

お歳暮にまた床の間を占拠され

給料を運んだ靴が捨てられる

サンタクロース信じ待ってる子の寝顔

今治市 白石 サダ子

熊本市 遠山 夏生

ワイングラス帰りたくない夜にする

一升枺に一升入れて満ち足りる

小走りの癖が抜けない世話女房

玄関に満月連れて客が来る

飲むだけの梯子は妻も認めてる

譲ることに慣れて満月はほえまし

和歌山市 岩本 美智子

松山市 丹下 美津子

黒部峡谷ぶなの紅葉に雪が舞う

テレビ討論女性の口に歯が立たぬ

ダム蒼く湖底は謎に秘められる

四季四季に主役が変わる母の庭

月白く一人占めした露天風呂

明日の分も食べておきたい芋煮会

鳥取県 美 浦 美代子

樹海の中見つけた出口生き生きす

裏口から残飯のよう放り出され

悔恨の手桶をさげて亡母に逢う

鳥取県 小 西 五十鈴

赤とんぼ舞ってせかせる種を播く

読みかけの本ばかり溜め天邪鬼

花に逢う時におんなの髮光る

鳥取県 山 本 正 光

自慢して自分の値打ち下げている

チンだけをして下さいと妻は留守

作業場へ妻がときどき覗きに来

弘前市 佐 治 千嘉子

悪口雑言あの人なりの愛なのか

小心な言い訳インコ嗤いだす

誰もいない草原の風に抱かれてる

吹田市 西 岡 豊

真ん中で記念写真の顔になる

飽きもせずあなたあなたと五十年

起きるまで障子叩いて攻めたてる

米子市 木 村 春 枝

気を許すみんなが集う傘の下

何時来ても子供の話す父

つきつきと仕事増やして忙しい

寝屋川市 井 上 すみれ

間違ひも許し許され敬老日

政治不信の中 毛利さんの笑顔美しい

ふるりの小学校廊下はまだ光ってた

高槻市 執 行 稲 子

おたまじゃくしが宇宙で解る無重力

ライバルに誘われて見る展示会

虐待のそしりを受けるポーズ猿

河内長野市 大 西 文 次

金たまり出してゆっくりしておれず

昼と夜こんなに違う北新地

ラブレター書くペン習字習い出す

十和田市 阿 部 喜久江

倅せは身内にまさる友が居る

青い鳥探し歩いて疲れ果て

秋に拾う山の味覚は旬の味

高松市 狂 四 郎

何役もこなして妻に翹が生え

惚けたのはマネーブームの後遺症

呼び捨てをちよつとためらう嫁がくる

岡山市 中 嶋 千恵子

無人駅ひと待ち顔の彼岸花

ひとり言洩れて口紅厚く塗り

忘却の彼方の火種あおる風

鳥取県 土橋睦子

唐津市 福島紀一

泣き事は蓋をしてから訊いてやる
近況を書いて下さい余白には
抱きしめてあげたいひとが老いてくる

鳥取市 西村黙光

天高し黙っていても腹が減り
しんがりて走っていても精一杯
取り口は覚えていないと勝角力

岡山県 大石あすなろ

ワンカップはずんで火種撒き散らす
文学に溺れ本屋でアルバイト
演歌なら俺にまかせと枯れ芒

姫路市 福島姫女

カスリ傷孫がナースの真似をする
羊まだ迷ってばかり森の径
余生まだ何かありそうノックする

八尾市 秦正子

老男女 仲の好いのはほのほのし
赤い羽根背広の胸が威張ってる
打つ太鼓上手くなったら祭り果て

今治市 渡邊伊津志

ニュールックで決めた女の無表情
箸も付けぬ父と瞳が合うつのかくし
ふとよぎる影が魅力の三枚目

羽曳野市 山本たけし

意地張っていたのが分かる肩の凝り
控え目な態度に風の向き変わる
有頂天網の破れに気がつかず

大阪市 川原章久

披露宴キスさせられている二人
入試前まずコネ探す親心
角道を利かし中飛車突いて来る

兵庫県 奥野テル

メガネやあい何処にいるのか返事して
三十の息子の釣書持ち歩く
朝のナース若い女の香が匂う

八尾市 平川幸枝

引越しの荷物に猫も乗ってゆき
駅前ポストへ急ぐ締め切り日
軽口をきいたばかりに的にされ

大阪市 清水絹子

焼香の列アジの開きの焼く匂い
見舞客嘘の言葉を爽やかに
内緒話孫が暑さで掻き回し

週刊誌ひろげて嫁と手術まち
散歩道Uターンにある植木市
切れはしを持ってとも糸買いにいく

出雲市 園山 かおる
サイコロを振っても決まらぬ風の向き

身勝手な言葉あびせる暇な奴
音無しの構えで無難な時過ごす

相生市 中塚 礎 石

ストレスの街にネオンの灯がともり

沈黙のままで灰皿愚痴の山

指切りを忘れて愛を見失う

兵庫県 倉垣 恵 美

お流れを一つもろって酔いました

まぜごはんグリーンピースのはしやぎよう

満月も地球は一つと言っている

和歌山市 山田 博 章

お父さん今夜鍋です待っています

日曜の先約子らに書き込まれ

P K O 出征兵士の影を見る

東京都 小寺 九

グリーン車ちよつときどつてみたくなる

無人駅草ものびのび生きている

遅刻して守衛に名前覚えられ

東大阪市 指宿 千枝子

色づいた蜜柑が留守をしています

満月を映して杯が深くなる

おみくじを引いて謙虚になる時も

寝屋川市 土井 英 明
病妻に代り凡夫が賞受ける
天高くちよつと目をやる万歩計
先輩に寸借される恩返し

枚方市 濱田 良 知

逃げ足の早い奴だが憎めない

唇の厚い男にある粘り

叱られて寝た孫の顔そつと見る

東京都 山口 新 子

大好きなコーヒーマスターのまぜい喫茶店

ひまわりが高く咲いてるよその家

粥うまく炊けて亡母の忌が近い

香川県 工藤 吟 笑

岩肌に口づけて飲む谷の水

馬トビの出来ぬ子が空を翔ぶ

金脈の流れで黒も白にする

堺市 桜井 莊 次

神様に笑われそう願うごと

どん底で落とす涙に芯がある

つり竿に秋見つけた赤トンボ

綾部市 藤田 芳 郎

幸せにしますと男言うのだが

星占いで軽い火傷をしてしまふ

故郷へみどりの絵の具買ひ足して

羽曳野市 徳山 みつこ

わけまえにあずかっているかばい合

花束を買っひとときの幸が好き

冷蔵庫在庫一掃旅行前

和歌山市 木村 親 路

順番を知っているのは閻魔だけ

出世した順になつて奉賀帳

もう一度火花散らしに二度の職

芦屋市 根 来 敬

粒選りが欲しいチャンスをしつと待つ

究極の食い道楽にある茶漬け

じんわりと昔語れば虫も鳴く

和歌山県 藤 井 春 子

納得をする一言を足し添える

古日記弾んだ毬に触れて見る

曼珠沙華たんばの畦で燃えつきる

岡山県 牧 野 秀 香

こぼれ萩褥にこおろぎ夢に入り

目立たない所で棍とる母の海

落ち葉焚く炎にジョギング一寸寄り

岡山県 伏 見 すみれ

うす塩にすれば醬油をかけたがり

階段を上れば見える瀬戸の海

返済の期限のばしに妻をやり

大阪市 尾崎 黄 紅

お国訛りの消えないうちに戻つたら

紅い灯の過去持つ社長夫人なり

屋台での酌のあの人博士とか

大阪市 今 西 静 子

まだまだと言つてるうちに傘寿なり

約束にすこし遅れた待合せ

秋祭り母の鯖ずしうまかつた

岡山県 江 口 有一朗

三百歳の威容仰ぐ閑谷校(里の史跡)

コンビニエンスストア塾の子羽伸ばす

灯台に近づきすぎて難破する

唐津市 浜 本 治 幸

ダイエツト身心共に細くなり

勇み足歯止めの人を期待する

嘘一つ許して今日も無事暮れる

岡山県 杉 本 伊久栄

探し物忘れた頃に顔を出し

器からはみ出た孫が頼もしい

お祭りのタイコ早くも風に乗る

姫路市 丸 尾 はる子

聞き役にまわり余生を丸く生き

まな板に刻みこまれた妻の愚痴

誘われて読める振りする書道展

東大阪市 松山 隆

垂れる萩男通れば直ぐこぼれ

古希過ぎの夫婦に話尽き黙る

穂芒の中に錯覚ひそんでる(曾爾高原)

熊本県 立道 善太郎

カリエスと戦い勝つて七十五

平凡な二人で仏の句碑建てる

今日もまた阿弥陀如来は立ちづくめ

東大阪市 大平 太一郎

看病で百合にも眩暈喪の涙

老いてな お日々を新たに花を賞で

思ひ出を酒の肴にクラス会

鳥取市 近藤 秋星

パチンコに行くのと同じ服で旅

瀬戸大橋宿のホテルで見る夜景

留守番電話少し緊張して話し

寝屋川市 後藤 黎之助

世が移り夕やけこやけ北京から(日中友好歌謡祭)

地価下落とらぬ狸に化かされた

覗いても暗くてみえぬ永田町

和泉市 中川 楓

両輪が元気喧嘩もしています

辛口の批評を妻がしてくれる

銀髪になつて優しい夫婦蜜

唐津市 野田 旭恒

リハビリに歩け歩けとドクターは

拭き掃除だまって佇つての母の傍

十月の声聞きや曳山鐘太鼓

泉南市 坂根 流水

辛抱し恰好つくまで耐えてみる

おじいちゃん口癖ですといなされる

散歩道あちこち木犀香で誘う

和歌山市 西村 和成

野良犬が迎えてくれた無人駅

父と子を決させるプロ野球

肌寒し感受性無き人と居て

岡山県 後安 江山

経机三つ揃えてこれでよし

夢一つ抱けば八十路も燃えるもの

秋茄子にお茶漬さらさら天高く

泉佐野市 大工 静子

父方に目尻の下がった人いない

朝顔に窓ふさがれた日の雷雨

転んでもキナコ アンコ付けて起き

島根県 三代 朝子

辞書ひらくたびにこころがおどり出る

平凡で今日は終日針仕事

同窓会ひととき若い日にかえる

今治市 村上久美子

カンニングみたいにかルテ覗き込み
マネキンが着れば似合っていたドレス

静岡市 青柳金吾

やわらかなメニューの多い老夫婦

知らぬ国ばかり世界の地図を買う

広島県 森川抜智

唄う番来るとトイレへ行って来る

ニコニコと首相は笑うだけの役

藤井寺市 川端隆

細やかな税を払って生きてます

母親の敷いたレールが錆びている

鳥取県 伊吹富恵

綿菓子のできる民話はあたたかい

似顔絵の皺まで書いて恙なし

島根県 岩田三和

反省のできないままに年暮れる

深呼吸できない街にさようなら

池田市 木村一笛

過去ばかり追って夢見て独り言

酔うほどに別れた人を追うばかり

鳥取県 岩崎みさ江

通せんぼして欲しかった茨道

しあわせの壺満たされてくる不安

姫路市 服部一典

来年も生きるつもりの子定表
病状へ妻ホツとしてりんごむく

東大阪市 安永暁子

控え目に正座五分でしびれだす

マンガ読む長い足組みシルバー席

大阪市 小糸昭子

傘貸して戻らぬままに雨に会い

所在しない男の掃除行き届き

兵庫県 円増純子

あの日から無言の父の目が許し

油断からもれた噂が倍になる

(前月分) 香川県 植田チカエ

この両手水の尊さ知っている

自動車道石の鳥居も移動させ

香川県 植田チカエ

孫達の笑顔みているのし袋

口ぞえがあつて地元で公務員

羽曳野市 福田悦子

かずのこもおもちも年中売っている

姑になった友から電話愚痴が出る

姫路市 福本好花

お供えを下げて一人のお三時です

年よりが居るなと思うつるし柿

唐津市 山口 ふさ子

ブライドが小指の先に溜ってる
山口弁たっぷり聞かす友来たり

豊中市 井上直次

入院の友の見舞いは誘い合う
ローマ字に読めぬ駅名教えられ

富田林市 山原昭水

年の暮れ刑事と泥棒忙しい
ぼくの部屋のらくろ少尉敬礼し

神戸市 岩田信義

核心に触れる証言足ふるえ
仁王様の肩に戦の弾丸の跡

島根県 武島 ちよえ

ジグザグに歩いて秋をまた拾い
気持良く呑んでる顔の可愛さよ

島根県 福岡博利

茅の穂の線路を走る旅のどか
軍鑑マーチの曲が聞えるPKO

静岡市 大村正雄

渋滞の列を見直す気の焦り
一点になって消えてく渡り鳥

和歌山県 村中悦男

いつの間か法事の渦に孫がいる
宴会の用意も終えて爪を切る

海南市 谷口義男

創業の頃を知ってるうらさ型
最後には金で解決する怖さ

神戸市 木村 貴代子

日は流れ亡母の叱言を口にする
生きのびる昨日の敵の手を握り

八戸市 島田昭治

小さな義理果すもやはり金が要り
妻が旅らーめんなどで留守まもり

静岡市 増田扶美

待ちわびた子が帰農して父は老い
山彦と遊び浮かれる都会の子

静岡市 三浦つね

古いほど味が出てくる梅と友
家風まで嫁の好みに塗り替える

岡山県 福岡辰江

片言がもう覚えてるコマージュル
プラモデル骨を折ってる方はパパ

岡山県 富坂志重

秋祭り町が四五日狂います
合格に父はだまって禁酒する

檀原市 西本保夫

ふるさとの訛りに飛びつきたくもなる
反論もせずにヤジ馬の中に居る

島根県 小林延子
君の手が触れた林檎がいとおしい
定刻に帰ると妻がまるく見え

鳥取県 植田一京
夜のビルもあるい月がよく似合う
ジープの膝も正座し法話聴く

鳥取県 権代康女
馬鹿ゴムになっておひまの出るモンペ
裏表同じ番地で居て他人

唐津市 江川青琴
秋風が吹いて日めくり薄くなり
句の仲間一人誘って輪を広げ

唐津市 入江喜久亭
モナリザの微笑み欲しい妻の顔
好きなだけお飲みと妻のヒステリー

寝屋川市 坂上高栄
学閥はやれ先輩だ後輩だ
寝たきりのベッドがきしむ内輪もめ

静岡市 中西雅
わきまえた一言がよしお人柄
針山を整い終えて衣替え

鳥取県 山内芳江
儂さも強さも知った人生譜
七難を隠す化粧に暇がいる

枚方市 海老池洋
こんな日に限って一日いない妻
手の内はこんなにこんでいた汚職

唐津市 山門幸夫
飛行雲一直線に征った戦友
継ぐ孫に平和を説いて基地を見せ

唐津市 野崎ハル
愛用の日傘失くした今日の鬱
敬老の日に孫が豪華な羽根布団

鳥取市 田賀八千代
手のなる方へ風向き変えるから恐い
無一文になってひまわり種ばかり

富山市 酒井輝
父知らぬ子育てに塗る爪の彩
東京へ刺し身で届くほたるいか

寝屋川市 籠島恵子
慎ましく遊び心で買う器
立話しているうちに日が沈み

藤井寺市 菊地繁男
掌を返せば味方が敵になり
下町の社長気さくに金魚釣り

鹿児島県 大山舞鳥影
メロン切る手元くるわす外野席
肩の子は神輿見ないで兄さがす

夫婦愛 秋刀魚を焼いて誕生日
クラス会渾名といじめが蘇り
十和田市 小笠原 敏 夫

熊本県 増 田 一 乗

観光の幅を上げた高速度
長生きをした気せぬのにひ孫出来

兵庫県 中 野 とよ子

休むひまない私の影法師

奈良県 米 田 芳 子

宇宙から帰還すてきな旅の顔
お隣のぐちを聞いているこれも旅

鳥取県 丸 山 希久代

ゆっくりと愛を味わうフルムーン

福岡県 本 田 忠 男

玄関に孫が待つてる旅靴

和歌山県 上 岡 正 直

保険満期次はどうしよう六十五歳
家庭って何だろうとふと思っ

松江市 浦 辺 静 江

おせっかい迷惑だとは気が付かず
家計簿を困らせている物価高

酒粕に酔うが頼りになる男
息長く二人三脚夫婦旅

寝屋川市 豊 福 路 子

秋いちばんの風にもらったエネルギー
そと孫をいい顔にした諭吉さま

寝屋川市 太 田 とし子

パチンコの音は不況をさけている
笑ってはいるが三枝の丸坊主

島根県 児 玉 幸 子

山道を行けば舞ってる赤トンボ
取り入れを急ぐ農家へコンバイン

島根県 松 本 聖 子

野に立てば芒白髪をふり乱し
酔いどれの夫をねんねさせる役

八尾市 向 井 しづ子

誇り高き女に縁なく寄った年
咲かぬけど季節いろどるつるさきよう

松江市 安 食 友 子

相槌へつらいながらもする笑顔
まな板に悲喜がミックスされている

鳥取市 谷 口 侑 里

巨大ビル仰ぎひっそり生きている
定年でのんびり猫と日向ぼこ

別れきて赤くも赤し冬の花
まな板にごとんと硬し冷凍魚

豊中市 小林 一夫

吹田市 岩鼻 啓三
文字一つルーベにひろい秋灯し
運動会の孫遠くいて傘マーク

箕面市 木村 天弘

初めから間違いだつた夫婦仲
人妻の誇り込めてるのが指輪

米子市 鹿島 松子

病室の窓から雲にのつてみる
麦のないところ仏の膳に盛る

米子市 小塩 智加恵

中国の松茸焼いてお初もの
こだわりを解かした電話涙声

佐賀市 古川 かずのり

乾杯の音頭に下戸のプレッシャー
年金のくらし歩幅が小さくなる

大阪市 乾 哲静

金婚やこの妻ありて今日のあり
学校もここまで来たか五日制

鳥取県 中西 智恵子

おにぎりの味ここにあり日本晴れ
一着もピリもおんなじ賞をとり

高槻市 小林 紀美子
二人きり知つて野良猫お産に来
我が庭を離れない蝶いとoshii

豊中市 みき わきみ

妻器用我がお抱えの散髪屋
バスの中孫への土産見せ合つて

鳥取県 橋谷 静江

うわさ好き人の話を聞きたがり
食欲の秋へ無理なグイエット

大阪市 平井 露芳

冷房の外で風鈴邪魔にされ
川魚浮いてパトカー駆り出され

鳥取市 岩田 浩岳

半袖じゃ寒い季節になつてきた
遠足の楽しみやはりおやつです

広島市 元林 光子

歯一本痛んで病の辛さ知る
国際線出好きな私の好きなどこ

鳥取県 橋本 孝由

満点でないから皆に乗せられる
左遷とは知らずシングル旅に立ち

兵庫県 玉田 三重

最後になると人の靴待っている
今日もまた続きの仕事に生かされる

秀句鑑賞

—11月号から

吉岡 きみえ

平だから言いたい事を言うてます

川崎 ひかり

宮仕えのたのしさとでも言えましようか。

なまじかの肩書のない者の突張り、胸のすく

よさうな句をもらいました。

芋虫も妻もふてぶてしく太る

木下 道子

聞こえていて返事をしないことも日常茶飯

事、可愛げのない妻ですこと。あの可憐さは

どこへいったやら…。

二人居るときにさみしい風になる

池森 森子

平凡な幸に刺激を求めるせいたくな風でし

ようね。そんな時には、美声を張り上げてく

だいいい。

現役という鉢巻をきつく締め

流 奈美子

現役のありがたさ、二度の職には締める鉢巻がありません。

定年の話題に溶けてああ夕日

大峠 可動

お若いときの作者を知っています。もう定

年になられるのかな。万感胸につまる夕陽で

すね。

不断着に替えて自分を取り戻す

大川 幸子

そうですね。ほんとうの自分は、やはり不

断着が一番よく知っています。夕暮れが迫っ

て忙しくなります。

三日目にどっと疲れが出るパート

福田 悦子

張りつめて出たものの馴れないパート。職

場の違いや人間関係、三日もすれば良し悪し

も知れてくる、気疲れ。

制服を着ると仕事の顔になる

山田 葉子

一日が始まる制服で、胸の空気も張りつめ

る。私もときどき制服を着ています。

虹の橋までお迎えにゆく彼岸

原 章峰

独仙居士、雲ののって虹のたもとで彼岸の

お迎えを待つて居られたことでしょう。

大事な話貴方テレビを消しなはれ

田中 みね

真剣な話だから、本気で聞いてちょうだい。

私の家でもよくあることで、目に見えるよう

です。そのうち妻のかん高い声。

大安に流れ作業で嫁に行く

大西 文次

今日一日は美しい人形になって、何も彼も

人まかせ、色直し写真撮り。ああ早く二人に

なりたい。

鍋底をいじめのようによくこする

安食 友子

姑への当てこすり。鍋底をいじめの対象と

は面白い。

お茶にするいとまも惜しい手内職

荒田 つる

肩のこる手内職、貴方ひとりでなんて言わ

ないで一服してください。

ここに残った句。

飯台が丸かった頃大家族

小糸 昭子

自分史に素直に書けぬ傷がある

小林 英子

ぼたん掛け違えたままで夫婦老い

奥谷 彩子

麻生路郎の作品とその周辺

大空の……

(24)

橘高薫風

この号(昭和8年8月)の編集後記に「路

郎主幹は晩春以来神経衰弱で弱って居られま

す。回春を祈って止みません。」とあり、9月

号には「路郎先生は遂に神経衰弱が重くなら

れ、8月17日夜、月評会に出席されながら評

道を清涼な空気と暖かい人情は必ずや先生の

病魔を退治して下さるものと期待している」

とあるので、路郎の神経衰弱を追ってみた。

「半文銭君に与う」と題する三好革郎の文

章の一節に、

君は路郎君は「川柳雑誌の刊行と共に殆

ど愚雑な連中を糾合した結果、経済的に妥協

して遂に自分の芸術の路を失うに到った」と

書いているが、こんなことは友人として君の

口から世間に発表出来ることかどうかと思つ

路郎君は僕の見るところでは決して経済的

に妥協もしなければ芸術の路を失つても

いないと思つ。川柳雑誌の本年1月号の「近

作」に、

党のため海鼠になつたおそろしき

俺は彼を莫迦にしてやろう

同川柳雑誌3月号の「ロンドンの一周忌に」

お父さんはやはり川柳々々と云つてるよ

お父さんの神経衰弱がわかるかい

信心をはじめたおッ母さんも可哀そうだ

などを読んで何処に経済的にも芸術的にも妥

協した跡が見えるのか

とあるのは、経済と芸術とのジレンマである。

北海道の路郎は、函館の亀井花童子居に滞

在して、札幌・小樽・函館を見物、石川啄木

の碑に詣でたり、氷原社の柳人たちと交歓し

たりで、一時は病苦を忘れる。二十日には折

から来函の川上三太郎・河柳雨吉の両氏に札

幌の尾山夜半杖氏ともども渡島川柳社主催の

歓迎会に臨み、

踏みならせば板に悲しみのみ残り (板)

凡人のただ見れば泡がつぶやきぬ (泡)

虫よ虫よ僕も一緒に鳴いてやろ (虫)

虫をおそる妻の美し //

半分は酒に消えたり君と僕 (半分)

奥様一人天井が鳴る (天井)

などの句を残している。この時の出会いで、

「静養中の僕の代りに何か書け」と依頼され

た三太郎が、「僕には到底路郎氏の代理をす

る資格はないが、留守番なら出来る」と、前

田雀郎・河柳雨吉を誘って、水無瀬三吟なら

ぬ志保原三吟、連句を巻くなど、10月11月号

の「川柳雑誌」へ原稿の応援をして友情の敦

さを示す。路郎は、

「人間四十一、これからであると思つてい

る僕も、去年はチブスで殆ど死にかかり、本

年2月には大腸加答児で自ら起つたあたる

を思い、同志に川柳雑誌の将来について語る

程の弱り方であつたが、いつの程にか出勤が

出来るまでになつていたが、亡きロンドンの

一周忌頃から憂鬱性に陥り、遂に強度の神経

衰弱となり、俗務の圧倒と過度の読書と自己

の生存をささ否定するまでの心境に到達した。

たまたま花童子氏から来遊せずやとの手紙

を入手し、何ら顧慮する余地なく漂然として

旅に出てしまった。(中略)あこがれの北海

の地で多くの柳友にいろいろと迷惑をかけ

ました。いずれ印象記をほつぽつ書くつもり

です。が、医者から筆を採ること、読書する

ことを禁じられています。好きな酒や煙草に

さえ逐々別れを告げました。(後略)

と、その重症ぶりを書いています。

銀河系

河内天笑選

弘前市 村田善保

放心の男を見てる影法師

眼を閉じてやっど真実見えてくる

定年に新たな彩を溶く絵皿

静岡市 沢田きん

へりコプター法話の邪魔をして過ぎる

飢えた国思いながらも食べ残し

長所だけ見える眼鏡をさがしてる

高知県 赤川菊野

ご教祖に洗脳された娘の行方

香水ってママの匂いがするんだね

いやなことみんな忘れて鳴子の輪

倉吉市 野口節子

肩に手を触れてくだけるだけでよい

ジェラシーも欲も確かだ生きている

青森市 工藤甲吉

真直ぐに歩けば敵にぶち当たる

台風に北上をする悪い癖

和歌山市 宮口克子

天国へ行くか地獄へ行くか 酒

白い花白い香りを大切に

静岡市 小木久子

賛成をしてから湧いてきた不安

現役の女でいたいとお洒落する

鳥取市 春木圭一郎

あなたとの内緒は日記にも書かぬ

年の差を越えた恋です本気です

出雲市 園山かおる

いい風が俺の頬つべた撫でてゆく

黄金田を恨めしそうに休耕田

和歌山市 福本英子

細ぼそとうちもバブルの後遺症

父の死を早めた子らの遺産分け

兵庫県 遠山可住

灰皿よお前も肩身狭かろう

不届きと思えど喪服美しき

西宮市 奥田みつ子

幕降りたあとの芝居が面白い

友達がほしくはないかサボテンよ

西宮市 林はつ絵

お悔みのあといい死に方と思ったり

マザコンは天の岩戸の昔から

米子市 林荒介

にんげんに忘れることの有難さ

幻を担いで山を降りて来た

広島市 中村要

埒もないことで居据わる低気圧

煮え返る腹にひや酒ながし込み

和歌山県 藤井春子

振り向けば転んだ頃がなつかしい

本物になりすましてるピカソの絵

広島県 森川抜智

軽く聞き重く心にわだかまる

阿呆なこと思いつづけて夜が明ける

倉吉市 野中御前

秋支度したと思えば冬仕度

気分だけ若く老いゆく影法師

鳥取県 江原とみお

爺さんに松喰い虫がとりついた

どんな祭りも神さまに損はない

豊中市 田中正坊

コピーですお安くしますルイヴィトン

お喋りが好きリチャードの紙バッグ

倉吉市 最上和枝

丁重な手紙に刺が添えてある

要注意妻が生き生きしてある夜

唐津市 山門タミ

無農薬の紫蘇をバツタは知ってる

エンデバー鯉の気持も聞きたいね

東大阪市 今岡貞人

八十をよたよた越した日記帳

地球儀がもう勘忍と泣いている

和歌山市 西村 和成
大企業何と大きな奴隷船

和歌山市 楠見 章子
祝杯はいつもおんなじ店です

八尾市 秦 正子
振り向いてほしい草笛吹いて見る

米子市 八木 千代
ともかくも火傷しないで家に着く

米子市 鹿島 松子
蒔くところを鳥が見てはおるまいな

和歌山市 内芝 登志代
深いわけ聞かずに先にお茶を出し

今治市 月原 宵明
どんぐりの兄弟だから仲がよい

茨木市 堀 良江
あの笑い呆けているとは思われず

兵庫県 倉垣 恵美
洋服屋さんに玉葱吊つてある

静岡市 浅子 まつゑ
独りでも生きて行けるが寂しいね

西条市 片上 明水
本堂のお供えものの数をよみ

笠岡市 松本 忠三
人並の扱いをうけほっとする

松山市 谷 真風
手の甲の皺がこんなに摘まめるよ

唐津市 野田 旭恒
煎餅を折つてたのしく妻と食べ

西宮市 西口 いわゑ
お金の好きな人間くさい神もいる

藤井寺市 高田 美代子
ぶつちやけた話が好きな柘榴の実

鳥取県 新家 完司
自費出版の序文に蜜をかけてある

和歌山市 古久保 和子
丁重で小骨の刺さる話し方

米子市 政岡 日枝子
ジョギングで今日の命をたしかめる

西宮市 亀岡 哲子
敬うていた父さんの安来節

松江市 松浦 登志子
子育てに夢中のころのスニーカー

喜屋川市 江口 度
まるで着せかえ人形のような妻と旅

鳥取県 美浦 美代子
果し状 火花かくして届けられ

大阪市 尾崎 黄紅
火口覗いて生まれ変わった夫婦です

鹿児島県 大山 舞鳥影
歳月が友との波長くるわせた

鳥取県 山内 芳江
波風も少しは立って三世代

尼崎市 春城 年代
心ならずも酒をこたわるわけがある

熊本県小立 道恵 美
おじいちゃん祖母ちゃんの花待ってるよ

有田市 松井 かなめ
とんちんかんな話に合わす呆け見舞

静岡市 柳沢 たま
捨て惜しみ着られぬ服が積んである

唐津市 仁部 四郎
子報にはない雨農婦髪を梳く

岸和田市 清野 こう
看病のあいま銭湯の湯につかり

鳥取県 西原 艶子
浮かぬ日は少しおしやれなスカーフで

岡山県 小林 妻子
正直なご意見でした風当たり

和歌山市 桜井 千秀
意気投合 ユーモア通じ合ってから

和歌山市 田中 みね
雲に乗り初心忘れた毬一つ

熊本市 遠山 夏生
火を付けた私がいつか被害者に

岡山県 池田 半仙
要領のよさ良心が見当たらず

吹田市 山本 希久子
三歳の頃を残している大人

米子市 石垣 花子
巣の中で見事に光るお仏壇

香川県 川崎 ひかり
赤ちゃんの泣き声朝日がのぼるよう

米子市 新 正子
豊かさに骨も絆ももろくなる

唐津市 浜本 治 幸
お互いに自由を守る老い二人

鳥取県 ささえき やえ
二度とカードは使わぬことに決めました

香川県 辻上 よしみ
人並の俸せ握ったら放さない

米子市 澤田 千春
毒舌を交わす 頭の体操に

八戸市 島田 昭治
癌告知 僕はさらりと聞くつもり

大阪市 渡部 さと美
吐き出してしゃべれる人の羨まし

倉吉市 淡路 ゆり子
わたくしを美しくする割烹着

富士宮市 渥美 弧 秀
静いを富士に覗かれまいとする

東京都 小寺 九
公園の鳩の仲間になる予定

羽曳野市 吉川 寿美
丸腰になって世間が見えてくる

米子市 光井 玲子
しきたりを省いて嫁に譲りたい

鳥取県 鈴木 公弘
湯舟から弛んだ肉を引き上げる

鳥取県 乾 隆風
五十億の中から有難い絆

八尾市 山下 美津留
よく吼える父だがまるで度胸なし

和歌山市 細川 稚代
恰好よく別れのワルツ踊ろうか

和歌山市 森口 恵子
つかのまの酔いにまかせてしゃべり出す

鳥取県 乾 喜与志
生き生きと反骨の風持っている

鳥取県 土橋 螢
三歳の孫に教わることもある

富田林市 藤田 泰子
火を点けて欲しい枯野を抱いている

米子市 田中 亜弥
マリリンモンローを机の裏に貼ってある

鳥取県 権代 康女
気のある私に夫も歩を合わす

福岡県 本田 忠男
道草を食いたくもなる秋祭り

大阪市 世森 幸雄
あの味が忘れられずに汽車に乗る

鳥取県 西川 和子
薄い毛の散髪代を値切られる

枚方市 森本 節子
私なりの流儀で向う終着駅

唐津市 浜本 ちよ
怪しいと思えば周り皆臭い

名古屋市 藤井 高子
戦争は嫌とりんごも言うてます

広島市 流 奈美子
ダイレクトメールの根気には負ける

羽曳野市 徳山 みつこ
それからの女愛嬌より度胸

青森市 漆戸 凡々子
ありがたく怖い高齢対策税

新潟市 眞壁 芳朗
夕焼へ重さの違う塾靴

八尾市 片上 英一
乾杯がつづいた頃よノンバンク

鳥取県 土橋 はるお
パンの耳が米の話を聞いている

岸和田市 三輪 通彦
辞めさせておいて辞令は依願免

唐津市 久保 正敏
雑兵の足ばかり見る地雷源

箕面市 岩津 ようじ
左傾する自分に気付く佐川便

大阪市 板東 倫子
人里へ悲しい顔で熊が出る

岡山県 江口 有一朗
親九十息子七十の二階建

今治市 越智 一水
金丸をだしに晩酌度をすこし

粟屋川市 平松 かすみ
ご子算はおいくらなどとまといつき

和歌山市 池永 一圃
国内の名所も知らず成田発つ

阪南市 深日 白光子
消費税値上げに触れる面構え

西宮市 瀬尾 六郎太

一戸建てバブルはじけた爪の跡

唐津市 田口 虹汀

四島の餌はでっかいかくし針

鳥取県 谷口 次男

しがらみの中でこどもも生きてる

寝屋川市 堀江 光子

ゴーサイン何が二人を待とうとも

鳥取市 西村 黙光

決め玉は持たぬ男のコップ酒

岡山県 福原 辰江

待つことに馴れて夫婦の小さい城

倉敷市 田辺 灸六

自惚れに虫もつかない貝割菜

鳥根県 加本 義良

美辞麗句 胸にリボンの満足度

香川県 新川 マサエ

蒔いた種刈り取るために流す汗

宇部市 中村 三良

焦点が合わないままで来る別れ

倉吉市 米田 幸子

吹き溜り落葉の私語もきこえそう

大阪市 津守 柳伸

平坦な道避けてゆく父の靴

芦屋市 根来 敬

心にもない嘘だった蟻地獄

箕面市 椎江 清芳

恋煩いまでは写らぬレントゲン

今治市 矢野 佳雲

甘党に酒の割勘高くつき

旭川市 朝倉 大柏

青春の角のあるのが頼もしい

堺市 高橋 千万子

助手席でタクシー代を払わされ

唐津市 浜本 義美

S Lが息はずませて煙吐く

米子市 小西 雄々

ストレスを溜めた河童が繩のれん

大阪市 中西 兼治郎

大蔵も外務も妻はやってのけ

唐津市 筒井 朴竜

傍で見るほど楽しい警備員

鳥取県 田村 きみ子

仏めし冷めても亡夫の香りする

熊本県 増田 一乗

見回りの顔がほころぶ稲の出来

広島市 森田 文

町の子が帰り日ぐらし鳴き止まぬ

尼崎市 春城 武庫坊

虫の音の終章を聞く曼珠沙華

熊本県 高野 宵草

虫たちのコールに月が顔を出し

和歌山県 杉山 精子

緩すぎた縮め直す父の愛

岡山県 矢内 寿恵子

枯葉舞う地蔵の頭から冬に

守口市 森川 まさお

テニスする外人夫妻の白い髪

鳥取県 上田 俊路

イメージが変わり身近になった人

倉吉市 渡辺 菩句

冬將軍来ぬ間に病追い出そう

羽曳野市 福田 悦子

木枯しがテレビの音を強くさせ

豊中市 安藤 寿美子

トロツコに乗り山の秋よう冷える

米子市 中井 ゆき

スリムにはなったが皺がよく目立つ

和歌山県 堀畑 靖子

恋文を絵文字で書いてみたい秋

兵庫県 奥野 テル

八十を過ぎて胸に亡母がいる

寝屋川市 岸野 あやめ

老人会手術の痕も見て貰い

岡山県 土居 ひでの

墓掃除また逢いました赤トンボ

茨木市 藤井 正雄

祭りには帰れと母の味が呼ぶ

寝屋川市 坂上 高栄

孫が来て目も鼻もないおばあちゃん

大阪府 上高 栄

▼お願い 本欄への投句は、川柳塔用箋に3句を連記し、氏名と県・市名を書いて毎月15日までに川柳塔社事務所へ。(選者)

尚香のむ 八木千代選

混濁の池のほとりて熱くなる

大阪市 北川 弘子

今年の夏、7月4日、わたくしはパリに旅していたのですが、その日の感動の大波の中にまだしても全身を置くことになりました。混濁の池にこめられた弘子さんの感懐は、それまでの私では汲みとれなかつたかも知れませんが、それは不思議なこの世ともあの世ともつかぬ二時間あまりの世界でした。まるで時が止まってしまったみたいで、連れの所在なきにやつと気付いてそのホールからゆるりと出たのでした。滝のような涙が脳天から足の爪先まで身の内に流れてるような。オランジュリー美術館の地下にある円形大ホール、モネの睡蓮の連作に立ったときの凄まじい衝撃を思い出します。初々しい春の池、眩しい夏の池、澄みながらも凋落の濃い秋の蓮池。そして混沌とすべてをこどもなげに包みこんで、暗くも暗くなくもない、ただあるがままの濁りの厚み深み。慟哭しつつ描いたであろう天才画家モネの命題。弘子さんの感性は早くも果ての混濁を熱く見つめるのでしょうか。

梨も林檎も一度皮ごと食べてみる

和歌山市 田中 輝子

梨も林檎も皮を剥くのがあたりまえだと思ひこんでいたのですが、一度皮ごと食べてごらんと輝子さんが書いてくれました。そこで瑞々しい津軽りんごを皮ごと私も。時間はかかるけれど二倍おいしい。そういえば噛める歯をもちながら咀嚼する能力を神から頂いていながらと、口の中にひろがる芳香も一味ちがう爽やかさも賞味しました。習慣というのか居座つた概念からか、まあいろいろあるにしても、一度試して噛みしめて天恵をじゅうぶんに頂く喜びは有難いものでした。ただし新鮮なものに限ります。何やら川柳にも通うような、人生からも離れてはいない。軽い響きながら、びしっと的を射て小気味がいいですね。輝子さんの句姿には意気もこもっています。そして私も心意気こそ我が人生の姿として生きたいのです。

潮が引きはじめているに身を投げる

米子市 政岡日枝子

冬を食べるのは歯を笑わせてから私の都合で残す火と消す火
千羽目の鶴と近づくぬくい闇
去っていく足音だったような風
いのち誕生ながくやさしく林檎裂く
古時計言いたいことが溜めてある
墓場まで持参するもの増えてくる
伝言板に書き忘れてた現在地
父の骨父の匂は消えていた
演じ切れるか「秋」一幕に必死です
命とや口紅の彩選りながら
街のはずれで薬師如来のすきまよう
真つすぐにあるいて夕陽吾がものに
心配を山ほど捨てに草千里
熱に浮かされ禁じた名前呼んだらし
笑い流すうしろめたさもひつくるめ
しっかりせよと起こしてくれたのは女
それはそれで畳の下の新聞紙
緩やかに流れてほしい今の刻
もくせいこの香りを開く新刊書
薄い愛 バイミたいに焼きあげちやう
ひと粒ずつぶどうに話とむ午後
ある一点をいつも見つける日めぐりに
登ったら降りる雑念引き連れて
野菊いま秋の系図の中で咲く
花屋には値のついてない花はない
トロイメライを唱う減速知った靴

堺市	板野	美子
藤井寺市	高田美代子	
和歌山市	後藤	正子
和歌山市	森	茜
和歌山市	西山	幸
西宮市	林	はつ絵
大阪市	西出	楓葉
和歌山市	木本	朱夏
米子市	新	正子
名古屋市	藤井	高子
島根県	松本	文子
尼崎市	春城	年代
富田林市	片岡智恵子	
富田林市	藤田	泰子
米子市	鹿島	松子
和歌山市	桜井	千秀
西宮市	奥田みつ子	
堺市	桜沢あかり	
米子市	青川	田鶴
西宮市	西口いわゑ	
弘前市	肥後和香子	
寝屋川市	堀江	光子
米子市	野坂	なみ
和歌山市	福本	英子
米子市	林	瑞枝
吹田市	栗谷	春子
米子市	川上より子	

価値観の違いも私には宝

この世のことを知りすぎたのか金魚

娘に少し遺言状がわかりだす

これだけの力よ遠く海光る

今すぐに解つてほしいとは言わぬ

暗雲を一掃したい風よ吹け

実る花 実らぬ花もみな愛し

一日をしぼり短い日記書く

みぞおちの微熱はきつとあの人の

出る穴にやつと目鼻がついてくる

あつけない別れを花と分かち合う

面ひとつ割れてきのうの俺でない

息とめて木犀の告白を聞く

酔芙蓉ききも五時から女だね

末席で次の遊びを考える

泣き抜いた朝の光がやわらかい

うちのめされた私を救う大空だ

不整脈 嘘はつけない秋の天

筆先が揃うと描けぬことばかり

残る一枚 風の情けで散って行く

北側はいつも清めているところ

昨日からの続きの今をいとおしむ

住い話まず便箋を買いに行く

細腕は何も女のものでなし

化ける面沢山持つて妻強し

湯気立てて今日の冷たさなど忘れ

木犀が自己主張する曲がり角

岡山県 矢内寿恵子

羽曳野市 吉川 寿美

米子市 白根 ふみ

熊本市 永田 俊子

米子市 茂理 高代

和歌山市 堀畑 靖子

豊中市 辻川 慶子

米子市 寺沢みど里

京都市 山海 友照

和歌山市 和田美寿子

岡山県 山本 玉恵

鳥取県 さえきやえ

米子市 光井 玲子

和歌山市 福井 桂香

米子市 金山一夕子

姫路市 丁坪サワ子

米子市 澤田 千春

倉吉市 淡路ゆり子

和歌山市 小倉 アサ

宝塚市 丸山よし津

米子市 田中 亜弥

米子市 木村 春枝

千葉県 上鈴木春枝

茨木市 堀 良江

大阪市 神夏磯典子

鳥取市 西原 艶子

和歌山市 古久保和子

二合炊く飯も時どき芯がある

焼け石に水でも放つて置けなくて

勝ちどきはスポット浴びるだけなのか

結論が出ない 秋から冬へ旅

枕二つにあなたとの距離考える

留袖へ腰紐の位置定まれば

老いの夢 地獄極楽取りまぜて

ポニーテール結んでやはり乾燥花

上品な言葉で男殺せませす

一つずつ飾りはずしていく年か

華やいだわたしが渡る橋がない

波頭飛び散るきわに想うひと

大根を煮て自分一人を愛おしむ

お金などかけてないのを自慢する

労られ温い言葉に病んでいる

絵心を知って時間をかけて見る

静かな夜誰かに電話したくなる

昼と夜をつなぐ絵具が見つからぬ

根の深い友情だから枯らすまい

憂きことを聞き梨の皮長く剥く

口の字はあまりに角が多すぎる

解説の欲しい絵を見て満たされず

鬼あざみ無視することのむつかしき

この一年、力のある作品で支えて頂きました。ほんと

うに有難うございました。

米子市 石垣 花子

大阪市 本間満津子

大阪市 安食 友子

松江市 宮口 克子

和歌山市 門谷たす子

西宮市 岸野あやめ

寝屋川市 高橋千万里

堺市 山口 新子

東京都 宮崎 菜月

寝屋川市 黒田 能子

芦屋市 倉垣 恵美

兵庫県 佐治千嘉子

弘前市 神原 文

堺市 日阪 秋子

大阪市 園山多賀子

出雲市 小塩智加恵

米子市 植田 一京

鳥取市 佐野木みえ

松江市 酒井 靖子

兵庫県 松井かなめ

有田市 川崎ひかり

香川県 福本 好花

姫路市 細川 稚代

和歌山市 花

投句先 干54 大阪市生野区勝山南1-18-10 小出 智子

神 父

永田俊子選



普断着の神父はただの好々爺
 神の名で金集めする似非神父
 罪一つ神父に懺悔して眠る
 神父さん園児集めて生活たて
 神父さん少年の夢ありがごと
 神父にも何か秘密がありそ
 宝くじ神父も列に並んでる
 神父から教えをもらう処世訓
 逃避行神父の前にたどりつく
 十字架に縋れど消えぬ風の罪
 教え説く神父にさえも過去が
 演技力豊か神父のサンタ歴
 仰山な懺悔で神父琢磨する
 行く道の灯り神父に照らされ
 神父に落ち着くまでの人生七曲り
 天国を見て来たように説く神父
 理性での神父と葛藤する生身
 神父から裁きをうけることに
 欲望を神父黒衣に包み込み
 同じ身の痛みで懺悔聞く神父
 神父さんが大きく見える迷いの日
 神父さまに聞いて貰って軽くなる

愛誓う神父へ二人仏教徒

真直ぐに神父が歩むネオン街

そうですか神父やっぱり世捨人

お話は幼児の高きで神父さま

ご神父も神を欺く夢を見る

神父らの布教の辛苦も戦国史

煩惱を包み神父の黒ごころも

行きずりの風も招いている神父

懺悔聞く神父にもある苦い過去

受難にも神の愛見る神父さま

傷いづつ神父に頼る悔いを持つ

火の過去を見せずに道を説く神父

神父さまに扮して風を抱いている

なんとなく懺悔をしたい神父の目

ちぐはぐなカッパル神父は笑わない

住

イエス様神父の澄んだ瞳の奥に

偽りの懺悔も神父聞いてやる

独り言神にもらしている神父

裏面史にけされた神父の墓がある

十戒に生きる神父の黒い服

人

神父様に安らぎ貰う隅の椅子

地

それは愛ですと神父の掌が温い

天

神父もつ踏絵の悲劇語らない

軸

天国への夢ホスピスで説く神父

緑

明水

正敏

康子

芳朗

達子

寿恵子

アサ

和成

渉

愛論

鉄治

重人

枯梢

寿美

俊路

美智子

雀踊子

正坊

よし津

可住

松川杜的

鏡の裏に見える私の茶番劇

すれ違ふ女が値踏みする早さ

事故現場見て来た話尾ひれつく

その裏を見抜いた母の目が笑い

墓洗う姑の笑顔が見えてくる

映画見る太郎と花子手をつなぎ

夢枕われより若き亡父と逢い

母からの便り行間愛が打つ

心眼で見る一閃に面と対

見て悟れ師匠教えぬ芸の道

山崎君子選



見 る

三男

和枝

和成

有一郎

温子

温子

ちかし

御前

洛醉

ようじ

寿美

度

洋

義美

鉄治

愛論

芳郎

正雄

大柏

祥庵

白光子

寿恵子

路 集

業務二課へボチを見送る手向花
少年の手錠と乗った奈良のバス
北四島見まもる漁夫の深いしわ
渡り初め三代夫婦を見るなごみ
青い目にせがまれて見る文楽座

見ての通りと明るい声につい長居
斜かいに見るので困った世と思つ
よく見れば納得のゆく値札です
野仏の視野に四季あり風の彩
海見えてふるさとの駅近くなる
荒れた日も海を見ている島の墓
暗闇に馴れると鍵が見えて来る
老人を見る眼で席を譲られる
宇宙から見れば地球は悪い星
一人では惜しくて月へ妻を呼ぶ

逆転を見たどよめきを聴いている
落し穴見れば本音が詰つてる
公園のブランコ過去と揺れて見る
節穴を一人覗けばみんな見る
星を見ることを忘れていませんか

ぼっくり寺平らな戻り道が見え
死に顔に初めて見ます母の紅

風の彩落葉が見せてくれました

木守りかまもりは落ちた仲間を見つめてる

哲子
静子
義子
一乗
みつこ

ただし
希久子
玉恵
杜的
薰
よし津
富喜子
正坊
可住

輝子
旋風
清芳
正敏
保州
英千子

英千子

榎本路児

十二月

上田佳秋選



厄年がようやく終る十二月
妻逝つて殊更寒い十二月
建て増しへ嫁は来ぬまま十二月
電卓の指ももつれる十二月
国民に三猿さめこみ十二月
金のなる木がほしくなる十二月
一夜だけ神の子になる十二月
師走の海 無職気楽に糸を垂れ
渋滞に叫びたくなる十二月

それぞれ暮らし師走の顔になる
十二月から乾く街の辻
句読点はつきりつける十二月
寅さんが帰って来ない十二月
通天閣で干支の引継ぎ十二月
一年の計はとづくに棚ざらし
十二月八日の釘は錆びさせぬ
かさこそと落葉がせかす十二月
ものふの覚悟を決める七面鳥
もめごとと終りにしたい十二月
妻たちが火の輪をくぐる十二月
割れた茶碗接いでみたとして十二月
十二月救世軍を除隊する

十二月

十二月クロスワードが埋まらない
天井棧敷しばし私の年忘れ
赤電話師走の鬼がかけている
いらだちの時計を外す十二月
唐辛子ちよつと効かせて十二月
そつとしておいと下さい十二月
足跡を消す暇もない十二月
十二月証明付きの請求書

三和
よし津
雄々
佳雲
水煙
諷云児
正子
時弘
白光子

敬
有一朗
希久子
正坊
達子
森生
ただし
義美
一花
狸村
京子
恵美
四郎

こんな時歯が痛くなる十二月
十二月憎しみ一つ消すとする
十二月今年の後遺症が出る
酒臭くなる十二月の免許証
十二月大金落ちてないかいな

精子
良江
テル
虹度
千歩
アサ
愛論
高夫
輝子
しげお
宵明
寿美
杜的
三男
薰
可住
保州
正敏
雀踊子
重人
路児
螢

初歩教室

題 — 貰う

吉岡美房

本欄では、毎回のようには推敲や定型のことについて申し上げて来ましたが、本誌九月号と十月号に定型についての立派な柳論が掲載されており、大いに参考にして頂きたいと思ひます。ただ定型・非定型については、「絶対にこうでなければならぬ」と断定した定義や解説は、あまり拝見したことがありません。従つて我々は、手に入る柳誌等を通じて、各人勉強せざるを得ないと思ひます。私は川柳は例外として非定型が存在し、それがどこまで許されるかという点で論議されていくと解していただきますので、本欄では初歩の勉強の場という特殊性から、今後も定型を尊重しながら現実の問題として、非定型での添削もあり得るとともに、立派な句として取り上げる時も従来どおり、定型・非定型にとらわれずに、発表して行くつもりです。

それでは添削した句から発表します。

政治家は貰う怖さを御存知か

(貰ひ方知らず五億で見た地獄)

あと後を思えばむげに断われぬ

(断われぬ金を貰つて眠られず)

貰う度正論だんだんしぼんで来

(貰うもの貰うと変る主義主張)

自己顕示すぎて貰つた勇み足

(自己顕示欲から貰う勇み足)

散歩道野菊は貰うことにする

(道に咲く野菊に思い出を貰う)

貰ろた鉢本家のよりも花が咲き

(本家より貰つた鉢が先に咲き)

花の種類貰うて水やり余念ない

(花の種類貰つて春を夢みてる)

息子には嫁を貰うに四苦八苦

(農を継ぐ息子で嫁が貰えない)

よつ言うわ短所はみんな親からと

(よつ言うわ短所はみんな親ゆすり)

貰うまでまつたけ食へぬ母の膳

(貰うまで松茸が出る気配なし)

新米を貰ひ早速御仏飯

(神仏の恵み貰つた御仏飯)

金一封古稀の祝いと子に貰う

(幸せは古稀の祝いを子に貰う)

嫁貰う息子より父親上機嫌

(嫁貰ひ父が一番上機嫌)

黎之助 敬

教えて貰つた言葉にいつも亡母が居る

(土壇場で母に貰つた知恵が生き)

手に一杯お芋貰つた孫の顔

(抱いた子の両手一杯貰う芋)

アレセント貰つて怖い娘の無心

(アレセント子の魂胆が見えてる)

貰える心づもりの秋になり

(出来秋に貰う予定の里がえり)

お古ばかり気にもとめない三人目

(お古ばかり貰つて三女たくましい)

世話をして貰うつもりが別居とは

(世話をして貰うつもりにあるギャップ)

嫁貰う話題作りの人だかり

(嫁貰う話題を拾う人だかり)

子に貰う苦勞はさして苦にならず

(苦にならぬ苦勞しつかり子に貰う)

遺産分け孝行もせず貰うとは

(孝行を知らず遺産は貰いたい)

重くない里で貰つて来た荷物

(重くない里で貰つて来た荷物)

母さんに貰うた箆筒歴史あり

(母さんにもろた箆筒と嫁に行く)

妻の留守隣の嫁にすし貰う

(隣から貰つて妻の留守凌ぐ)

地味な服だけど心を貰つとく

(亡母からの心を貰う地味な服)

軒太楼

凡々子

隆雄

マサエ

ふさ子

節子

孝由

節子

方子

方子

方子

方子

方子

方子

方子

方子

方子

方子

方子

方子

方子

方子

夕ミ

よしみ

美恵子

とし子

栄

幸雄

義男

きぬ

美智子

美寿子

忠男

忠男

忠男

忠男

忠男

忠男

忠男

忠男

忠男

忠男

忠男

忠男

達者なうちボランテア今貰う番 義子

(ボランテアいつかは貰う日と思う) 高栄

監督さんロケ地の風景皆貰い 高栄

(監督はロケ地の景を皆貰い) 芳水

幸せを貰っています手話の指 芳水

(幸せな話を貰う手話の指) 松子

石仏から安らぎ貰う散歩道 松子

(安らぎを貰う散歩の石仏) 志重

貰い物買ったものより高くつき 志重

(買う方が安いが心貰っとく) 幸夫

半世紀遠くの戦友の宅急便 幸夫

(励ましを貰う戦友半世紀) 君枝

トンネルを抜けられましたと貰い泣き 君枝

(トンネルを抜けた話に貰い泣き) 正子

招待状貰ってタンスに寝る着物 正子

(招待状貰い着物が甦る) 武治

輪に入り笑いの中で貰う夢 武治

(輪の中で幸せ貰う位置を運る) 秀香

あげる時貰う立場を考えて 秀香

(お歳暮を貰う立場で考える) 明吉

戦中派も文化サークルまで生きがい 明吉

(生き甲斐を文化サークルから貰う) はる子

人びとの情け貰うて世に生きる 是る子

(人様に貰う情けに生かされる) 隆

空気がタタタ貰いしてツケが来る 隆

(空気がタタタで貰ったツケが来る)

コンタクト入れて貰った青い空 善太郎

(コンタクト入れると貰う夢がある) 章久

九百円貰う薬に多い無駄 章久

(山程の薬貰って溜めている) 三重

お情けの役職貰う定年前 三重

(定年を待つ窓際の名を貰い) 芳郎

折々の情を貰う左遷の地 芳郎

(左遷地で貰う情けが身にしてみる) 保夫

定年の引き継ぎに貰う古机 保夫

(定年の引き継ぎ重い椅子貰う) 一乗

花名刺貰い二次会疑われ 一乗

(貰ったのうっかりしてた花名刺) まさお

この試合貰う積りが九回裏 まさお

(この試合貰うつもりへ逆転打) みつこ

貰ったと秘かに満ちてくる自信 みつこ

(この試合もろたと自信満ちてくる) 舞鳥影

うちのこを貰ってくれが子猫とは 舞鳥影

(うちの娘を貰ってほしいのは子猫) 九

花嫁を貰った筈がとられてた 九

嫁貰い息子も孫も取られたり しづ子

(嫁もろて嫁に息子を攫われる) ますみ

男前の小犬が先に貰われる ますみ

貰われて行った小犬が男前 嘉子

(美男美女犬にもあって貰われる) 洋

着想・表現ともに立派な句 洋

花柄の手紙貰ってから微熱

両親に貰った器量よしとする 義子

物忘れ神様からのプレゼント 章子

指輪ひとつ貰っただけで添い遂げる 春枝

コスモスを一茎貰う散歩道 志華子

餌貰う雛こわい程口を開け 春子

貰うより贈れる幸を噛みしめる 晋

もろて見て少なすぎたと知る保険 晋

給料は妻とローンへ右左 辰男

両親に貰った愛を子につなぐ 金吾

もろて来た子猫の親がとまらぬ 幸枝

気休めに貰う薬で飲み忘れ 君江

猫もろて来たお魚を犬が食べ 忠治

妹は姉のお古で衣装持ち 侑里

石仏にやさしき貰う里の秋 彩子

小遣いを貰う時だけ祖母ファン 好花

釣り好きの隣に住んでいる果報 和子

貰うもの貰えば孫の素っ気ない 絢子

路郎貰ううまでとはとてかい夢 杏村

私の句

母という至福を貰う児の寝顔

自首をしてぐっすり眠る夜を貰う

貰われて行った子猫へ書く便り

題「評判」—12月15日締切(2月号発表)

宛先 千583 藤井寺市道明寺2丁目11-4

吉岡美房

川柳塔あおもり五周年記念大会

弘前から盛岡へ

宮西 弥生

流れる景勝の地で、炎えるようなナナカマドの赤がひときわ鮮やかであった。続いて弘前公園へ向ったが、行く先々は紅葉また紅葉、汗ばむ体に秋風が心地よい。

「いちいの木の樹間から見える弘前城を後にいよいよねぶたに到着する。絢爛豪華の一語に尽きるばかりで、やっと畳に座ってくつろいだ昼食をすませ、岩木山神社を訪れたのは午後一時をまわっていた。

車は一路、会場のアップルランド南田温泉へひた走ったが、途中の楽しかったりんご狩は忘れられず、アップルロードの両側に並ぶ枝もたわわなりんごの木は、見事としか言いようがなかった。

大会の模様は別稿にゆずるとして、翌十九日は大八先生を団長として黒石を経て奥入瀬へ。一万一千百五両の眺めがあるという流れに我を忘れた一行八人は、『死の行軍』を偲びつつ八甲田山へ。ついで子の口から乗船、透明度十三度の『伝説の湖』十和田湖に遊び、

発荷峠を七曲り九曲りして八幡平のふけの湯ホテルに到着したが、このホテルは木のぬくもりが全身に感じられる秋田杉で建築したロτζジで、露天風呂の湯煙はこの世のものとは思えなかった。

さて、最終日の二十日は、天候が悪かったが、北上川にのぞむ石川啄木のふるさと洪民村を訪れて記念館を見学、車は盛岡駅へ。ここで大八先生と別れた一行は帰路につき、午後十時半、新大阪駅に帰着したが、盛岡で食べた名物、わんこそばが忘れられない。

盛岡で笑った笑ったわんこそば 弥生



温泉で川柳を語る

田中 叶
西出 楓 楽

アップルランド南田温泉の大広間では、書家の肥後和香子さんの手になる掲示が会場の



ふんい気を盛り上げている。午後三時半、席題二題の発表があつて空気がひきしまる。同四時半に投句締切り、一応ホツとする。東野大八先生のお話は、若いころの戦争体験、記者時代の思い出などで、三十分間の時間制限がいささか恨めしかった。

午後五時から一時間、休けいになったが、これは昨夜、入浴できなかった夜行組には大変ありがたく、豊富な温泉に手足を伸ばし、会場を換えた句会に出る。

豪華なお膳の前に主催者の川柳塔あおもり主幹、波多野五楽庵氏のあいさつ、西尾菜本主幹の祝辞の後、披講となる。総合得点の成績発表、表彰とどこおりなく終り、満足げな顔、次の大会へ期するものを秘めた顔、それぞれに箸をとる。杯が回り、この大会のサブタイトルである「温泉に一泊して川柳を語り合う会」どおり、侃侃諤諤・和気藹々と川柳塔あおもり五周年記念大会の夜は更けていった。

大会における総合得点順位と各課題の秀句
(天・地・人の順)は次のとおり。

- ①寺尾俊平 ②工藤甲吉 ③西出楓楽 ④斉藤あ
⑤松本文子 ⑥中川弘明 ⑦田中叶 ⑧小出智子 ⑨
八木千代 ⑩真喜内実

「かけだし」 波多野五楽庵選

かけだしが右むけ右で走り出し 西尾 菜

かけだしの抱負は野火の美しさ 寺尾 俊平

かけだしの鳥もやはりカァーと鳴く

「葉書」 小出 智子選

書簡集一銭五厘から続く 工藤 甲吉

住きひとの往復葉書買いにゆく 寺尾 俊平

一枚の落ち葉は亡母の葉書かも 斉藤 あ

「温泉」 橘高 薫風選

不老不死温泉の名に釣られ 工藤 甲吉

今宵まだ天女に会えぬ露天風呂 中川 弘明

湯の町で男を軽く見てしまふ 西出 楓楽

「道連れ」 黒川 紫香選

道連れの一人時間表ばかり見る 東野 大八

道連れがチューインガム一枚くれた

秋の花買う秋の蝶道連れに 小出 智子
寺尾 俊平

「旅愁」 西尾 菜選

旅愁あり各駅停車のおさげ髪 浅田 隆樹

旅愁濃く虫歯の痛むのを忘れ 寺尾 俊平

酒の酌不美人でよし旅ごころ 橘高 薫風

▼訂正▲ 11月号「銀河系」P72中段

の7人目に「新 正子」とありましたが、本人の句ではないとの申し出がありました。

唐津バンザイ

林 荒介

「唐津くんち」に釣られて、川柳塔唐津支部十周年記念川柳大会に参加した。十一月一日、小雨の米子駅から同行六人。倉敷までノーストップ。四人掛けの空席があり、県境に近くなると霧が谷を上り、濡れた紅葉が緑に映えて鮮やか。岡山から大阪組の十三人と合流、窓から懐かしい顔がこぼれる。

トンネルの切れ目に見える山は、紅葉かと



見紛う松の木の墓場だ。食堂車でお喋りをしている博多は近い。唐津駅では塔の旗に迎えられる、会場の唐津シティホテルに着。夕食会は、唐津風しっぽく料理と豪華。地元の方々と膝を交えて三十余人で温かい。

昨日は風があつて少し寒かつたが、大会当日の二日は快晴。駅から十五分ほどのところに唐津神社があり、すぐ横に曳山展示場があつて見てきたと、声高な話し声。一緒に散歩に出ようと約束したが、行き違いで二組に別れてしまった。唐津神社周辺の道は屋台の準備で慌ただしい。展示場の曳山は各町内に帰つて磨かれているらしく空き家になつていた。唐津くんちの最大の呼び物は、氏子が奉納する曳山行列で、刀町の一番ヤマ「赤獅子」から十四番ヤマ「七宝丸」まで勇壮華麗な十四台が登場する。現在のお金に換算すると、一台の制作費は一億五千万円くらいとか。藩政時代には唐津城には天守はなく、昭和四十一年に建てられた。出句締切りは午前十一時、何時までも遊んではいられない。

会場一杯の参加者で和やかな雰囲気だ。街

は青山目当ての人出で賑わっている。中村弘氏の司会で会は進められ、次のように、天の句が披露された。

「外国」 久保 正敏選

外国に媚びない父の肋骨 政岡日枝子

「受付」 仁部 四郎選

秋祭りはや受付の赤い顔 池田 敏子

「カタログ」 寺中三枝子選

カタログに秋の疑似餌が塗つてある

「名物」 白木 盛雄選

名物のモナカ城主の紋で売り 久保 正敏

「ものさし」 八木 千代選

百歳のものさし確か尾は振らぬ 高杉 千歩

「逃げる」 高杉 鬼遊選

贖罪の最後は弥陀の手に逃げる 永田 俊子

「爆笑」 西尾 栗選

爆笑の真只中に居る孤独 石田げんこ

墨痕あざやかに田口虹汀会長の筆で貼り出され、栗主幹の裁定で、天の天の大きなトロフィーは、永田俊子さんの手に渡された。

唐津の皆さん、お疲れさまでした。まだ唐津くんちのどよめきが臉にある。ちなみに、くんちの塗り替えには千五百万円以上も要するそうだ。唐津の歴史と人情に触れ、楽しい思い出を頂き、ありがとうございました。

■各地句会だより

南大阪川柳会

金井文秋

南大阪川柳会の流れをさかのぼれば、川柳雑誌社阿倍野支部、その前は同南支部となる。

昭和二十三、四年頃、垂鈍さんらの呼びかけで、小松園・梅里・野介・晴峰・幽王・文蝶さんなど、錚々たるメンパーによって開かれたのだそうだ。

会場は阿倍王子神社で、句会終了後は梅里さんのお店で一ぱい飲むのが楽しみだったそうだ。阿倍野支部と変わったのいつかは知らないが、私が句会へ参加したのは二十九年頃で会場は王子神社であったが、幸念寺であったかはよく覚えていない。豆秋・小松園さんらが中心となり、賀峰さんが句報を出しておられた。当時はもちろん、ガリ版刷りである。幸念寺時代は大分続いたのだが、寺の都合で断られ、世話をしておられた賀峰さんは、一身上の事情から柳界を退かれた。



会場は旭町の金塚会館へと移ったが、句報が出なかったのが一年ほども続き、会の低迷で存続も危ぶまれた。豆秋さんの死から休会の話も出たほどだったが、一三夫さんとも相談の上、梅里さんを担ぎ出すことで危機を免れた。何しろ料亭の座敷を無料でお借りするのだから強いものである。その頃、盛んであった大萬川柳も雑誌より早く会場で発表するので、人気もいやが上にも上って行った。阿倍野本社などとひやかす人もあったほどだ。昭和四十年、路郎先生が黄泉路の旅に出ら

れた後、会の名が南大阪川柳会と改められた。それから二年後、梅里さんも不埒の客となられたのである。その後、私が引き受けねばならなくなってから早くも二十五年になる。

当会では、特に会員制を取っておらず、句会費と有志の協力金によって運営しているフリの柳人たちの集りである。指導者として特別にお迎えした人はいない。ペテランがたくさん来られるのだから。司会は柳安子さんに、書き物は滋雀さんが健康上、出席できないので、智子さんをお願いしている。

句報は一般の句報と異なり、雑詠を並べたような形になっている。こうする方が作家の個性が分かるし、上位へ昇ろうと励みにもなると言ってくれる人もある。私の狙いは、姓も共に書くことで同じ雅号の人を識別できるし、字数が少なくなるので印刷費も安上りである。中には、入選句の少ない時は目立つので出席しないとと言う人もあり、みんなの気に入るようにはできないものと、つくづく思う。記念句会は何もやったことがない。南大阪市と言う市名はないし、何周年かと言われてもはっきり知らないの、何も建前にとらわれることはなく、楽しい句会になれば好いと思っっている。初心者もペテランも気軽に超越してください。お待ちしております。

おせめお増

原稿は川柳塔社事務所へお送りください
 毎月25日締切・30句以内厳守。所定の原
 稿用紙に清記をお願いします。 編集部

岩見川柳会

羽津川公乃報

縹雲流れて夏の跡を消す
 船止めの夜を船宿で雑魚寝する
 自家用の船で大物釣りに行く
 船足はおそいがこれも親ゆずり
 船頭の唄にも酔って川下り
 三世帯乗る大船を補強する
 泥船の話素直に娘は聞かぬ
 船酔いを知らぬ女房舵を取る
 女房と今も漕いでる丸木船
 生き残ること考えて船に乗る
 軍艦を持つと戦がしたくなる
 PKO特殊手当の船が出る
 大かきを覚えて船の客になる
 船名に子への絆が彫ってある

川柳後楽吟社

従野 健一報

さても見事に仮面を塗り変える

草風

月に泣き月に笑った青春譜
 双六の休みが僕には多すぎる
 いろいろな浮き世のをせる終電車
 鈴虫を枕に秋の夜長かな
 愛の灯が消えて造花の首が落ち
 振り向けば気弱な雑魚がついてくる
 スイッチオフ湯殿から妻のハミング
 ストレスを捨ててゴミの日見付からず
 子のために親は生命をすりへらし
 幸せの数をかぞえている手毬
 確答はお預け妻に聞き返事
 野晒しのピエロ哀しい風を生む
 耐えている男明日の虹を取る
 腹がたつ修養不足と慰める
 夢捨てず生きる命のある限り
 歩け歩け健康のもと古希近い

名月は酷暑和らく風残し
 奥の院押しつ押されつ登る坂
 戦友を歌う大正も遠くなる
 五風十雨世間話の好きな祖父
 夜の暮朝はそ知らぬ夜来香
 そつとする編制完結生き返り
 分校が消えてピアノがせりに出る
 尾頭が付いて父さん誕生日
 裏金の都合つくほど儲けさせ
 清らかな月の光と眠る幸
 嫁二人持たぬ娘の味がする

川柳塔唐津支部

久保

正敏報

美智子 拓治 たけ志 浄美 健一 道博 義親 博友 玉水 正秀 柳五郎 桃風 進 佐加恵 哲郎 照路

露天風呂秋の夜空の月さやか
 親の恩つくづく老いて見てわかり
 天高し黙っていても腹が減り
 年齢相応の柄気に召さぬお婆さん
 高齢化姥捨山が狭すぎる
 帰りたい実家が欲しいときがある

川柳塔わかやま吟社

宮口 克子報

他人のミスを責める私が厭になる
 漬物石 母の重さで沈む秋
 社長室の叱って貰えない孤影
 自分との戦い川が蛇行する
 小太鼓のリズムで青春突つ走る
 補聴器を外して父は怒鳴りつけ
 昔々太鼓叩いて来た館屋
 ふるりの血が忘れない笛太鼓
 飽食を叱る主治医の二段腹
 叱られて見たい少女の軽い嘘
 叱る背が波打つ母を見てしまつ
 叱られた思い出詰めた玉手箱
 勇ましく叱って欲しい駄馬の尻
 地下足袋がきょう叱られた匂いする
 一発の拳に秘めた愛がある
 沈んではおれぬ米櫃は軽い
 希望あり沈没船が動き出す
 陽が沈む今日も一日ありがとつ
 書き残す絵筆湖底に沈む村
 皮算用 底なし沼へ沈む株
 沈みがちな胸あけさせる風の私語

喜久亭 治幸 紀一 ちよ 義美 正敏 英子 栄美子 應 輝子 和子 萬的 吞天 アサ 鉄治 佐代子 三男 三三代 武雄 忠雄 信秋 豊太 和成 登志代 稚代 紀久子 好笑

陽が沈む今日の足跡消すように
 ずっしりと沈んだ椀にかける夢
 沈む時は一緒二人の海は風く
 踏み台の下に想いを沈ませる
 本当の自分がわかりかけた喜寿
 生ぬるい自分に腹を立てている
 棄てきれぬ自分を時に戒める
 晒された自分を冷めた眼で見詰め
 メス猫に手をやいている太鼓腹

川柳たけはら

森井 善居報

秋かしらつめたい風が吹いてきた
 傷心の旅行は北の国がいい
 秋の天羅漢が笑う僕が笑う
 現役の俺には要らぬ句読点
 稚児に出た記憶の中の秋祭り
 迎え火を信じて亡夫と乾杯す
 八十年使った足がまだ達者
 朝顔の種持って行く新学期
 満月へ幸せですと言っておく
 安芸の島の晴れ姿観る券を買う
 水割りの水カラカラうつを解く
 自分史は恐くて書けぬ罪の数
 作品展老人会もいそがしく
 久方の出雲参りや亡夫恋し
 頭から返す気のないエリツイン
 一人居のさびしさおもつ一人の夜
 盆踊り孫のお目当てはかにあり
 仏壇の落雁孫は欲しがらぬ

綾子 信子 千寿子 寿子 白光子 加代子 精子 光代子 克子
 小千枝 中史子 善居 幸子 喜美子 喜久恵 浪子 千代美 一枝 夏喜 静佳 麻代 ヤスエ 八重美 栄恵 愛子 鶴牛

まつすぐなきゆうりの方が奇形かも
 赤トンボ君等も塾へ行くのかい
 たとう紙を開き目出度い日が近い
 柱時計働き過ぎか止つてる
 再就職上司は息子と同じ年齢
 カマキリに似合うと思うサングラス
 神様でないから迷うことにする
 旅好きのまだ納豆が食べられず
 この川の流れる街で爪を染め
 古希ま近まだまだ恥をかくつもり
 最下位がまだ戦いを捨ててない
 思い出の小箱がひとつ揺揺れる

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

盆提灯灯影に浮かぶ亡夫の顔
 みにくさも夜霧やさしく労るよ
 スタミナがほしいと牛がまたやかれ
 波平ら濃霧が船をのんだ海
 そしてまだ私の坂はまだつづく
 ライバルがいるからスタミナためておく
 スタミナをもっていました低気圧
 スタミナがショートパンツをこぼれそう
 スタミナを蓄え今日も蟻になり
 スタミナの尽きた姿か流れ星

川柳塔鹿野みか月

土橋 螢報

比呂子 笑子 貞子 房子 静雨 淑子 一路 政己 不朽 静風 伸子 白狐
 比呂子 笑子 貞子 房子 静雨 淑子 一路 政己 不朽 静風 伸子 白狐

お悔み欄に名前残して友は去り
 もう少しこうしてほしい欲ばかり
 呱呱の声めでたく作るお赤飯
 頭から噛みつく癖のある父で
 許されぬ面影抱いて黒くなる
 はやとちり六甲おろし夢に消え
 結婚はせぬぞ菩薩が胸に居る
 時どきは妻も菩薩に見えてくる
 菩薩の目今日は涙でぬれている
 子を守る母に菩薩の貌がある
 百歳の姑も菩薩の顔になり
 安い米作り菩薩の道かじる
 よく出来た友で菩薩のように見え
 菩薩さま抱いてください五十キロ

佳句地十選 (11月号から)

井上白峰選

イヤなことイヤだと言えず顔に出る
 スイミング親の野心を子は知らず
 存在を主張している咳払い
 言い訳のうまさ唖然と聞いている
 スパイスのように皮肉が効いてくる
 輪の中で鬼が薄目をあけている
 スタッフに紅一点の潤滑油
 秋風に身のふり方を問う案山子
 すべらせた口へ火の粉が降ってくる
 うますぎる話へ返事明日にする

喜与志 正恵 明美 はお 睦子 睦子 弘子 盛桜 みさ子 房子 富恵 芙美 智恵子 和子 孔美子
 小菜実子 千鶴子 雀踊子 すみ 美代子 早苗 光子 太泡 千万子 金吾

つぶらな瞳夜叉を菩薩に変えてゐる

父に似て裏も表もなく生きる

行列に入つて番を待っている

行列が好きで並んだ日本人

自乗した列から人間と称す

連れ添つてやがて似通う顔となる

野の花を活ける心に彩を足す

秋風に平和な菊の花が咲く

秋の野は静かに恋を語らせる

故郷の野山に栗も茸もない

山が呼ぶ秋がはじける音がする

少し長めに秋の便りを母に書く

この秋も無事通過して妻を抱く

川柳岩出

小倉

アサ報

動いたら互角が崩れだす将棋
月よりの使者も途絶えた月の石
セールのうまい言葉にある粘り
歳月が教えてくれた変化球
一日中動く仕事のある励み
動いてもなお動いても用がある
満月の真下に生きて影を踏み
お金では心動かぬ世は遠い
口動く女同士の喫茶店
あまりにもお上手だから買つてみる
追う者の強さを秘めている動作
動かない人が一番得をする
秋風に誘われるまま箸動き
月の夜に人影淡い白道

しげる
公弘
節子
早苗
風人
みさ江
かつ乃
久枝
美つ千
信江
くに子
三千代
螢

名月に二人は話すこともなく
無駄足へセールス笑顔絶やさない
地球との距離を縮める月の石
善人が動く朝の庭になり

ほたる川柳同好会

江口

明光報

逆風に耐えて男は策を練る
灯をかばう指のぬくもり絵に残る
よそ者は祭に酔えぬ一人旅
人生の曲り角では風が吹く
タンポポの着地点は風次第
よのお飲みやしたな貴方 万灯会
秋まつり親子の笑顔 絵のように
祭の日淋しい人もいるのです
迷う背を隙間風からささとされる
人生に運 つきと言つかくし味
ひと電車遅れただけで運かわる
蛸焼きを子と立食いの夏祭り
引き返す勇氣に運がついてくる
ふるりの灯は温かい友と酒
紀子さまの運命線を見てみたい
地鎮祭長いローンが待っている
百円で買える運なら買つてみる
達筆の乱れが何か気にかかる

悦男
瑞穂
忠雄
与呂志

高槻川柳サークル卯の花 辻白漢子報

満願へ走り続けた百度石
はした金いつでもよいと見得をきり
返すのは何日でもよいと貸してくれ

岸和田川柳会

芳地

狸村報

澄江
久江
眞郎
宣司
正雄
欣史子
田実子
明光
澄子

一人暮しをゆずらぬ母の背がまるい
巻きもどしベンチ花咲く古い二人
曖昧な暮らしパチンコ玉に馴れ
夏瘦せをひきずっている虫の声
ハスキーな声で男を狂わせる
九十歳の通夜に孫達よく笑い
蛸さげて堺の夜市妻と去に
茶柱が立つてきつかけ出来かかり
血統書付きの仔犬でよくあまえ
風鈴に風ありさるすべり揺れている
忘れ上手な妻のリードで明け暮れる
占いのやがてを信じ待つつもり
その日暮しを笑つて通る蟻の列
巻紙の水茎の美にだまされる

富志子
ダン吉
小紋
白光子
一弥
柳宏子
甘平
通彦
すみえ
浪速子
狸村
武助
萬的
スミ子
静江
稲子
恵美子
正坊
よ志子
春風
紫香
萬的
杜的
芳子
英子
しげお
武庫坊

雲のはぎまで手まねきをするほとけ
マジックがやがて出そうないカース
見合ひではやがて課長と言つたはず
ノーマルな暮らし言葉が付いてこぬ
相槌を上手に話丸く聞く
人形は名人の手で泣きたがる
やがて咲く月下美人を待つ瞬間
雑音のやがて静かな街になる
忘れない過去がグラスの底に浮く
やがて聞く医者を老人待つている

川柳化粧粧

植村寄遊子報

呆け防止その名目で酷使する
昨日の事忘れ上手に明日を生く
表紙絵の美女幸せを一人占め
道具箱父が遺した貧乏性
休肝日だから余計に暇な夜
日銭追う世帯差繰る暇もない
裏ばかり思いつける不幸せ
夏呆けも夏バテもした古希の坂
どの柳誌見なれた名前がつている
一人身の気儘な暮らして今日もすぎ
まだ元氣申年の梅母が干す
夫婦げんかお金のからぬうさばらし
どう書こつ心の病処方箋
手鏡を渡して美容師仕上げ見せ
クローラーに逆らい汗をがまん爺
山笠がパレード沸かせた城まつり
付添婦面会謝絶へ化粧する

年代
二南
波留吉
茶の子
瀧小
薫
栄
真柳
諷云児
白漢子
岳詩
サワ子
葉子
礎石
悲子
三青
遊峰
治夢
はる女
茂章
嘉
美代
春蘭
好花
姫女
はる子
一典

転勤へまた新しい仮面買つ 客遊子

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

終章へ実つたような実らぬような
吾が庭のごと公園の虫すだく
縁談が実らず木瓜が狂い咲く
カナカナの声が声呼ぶ古寺の庭
実りある老後へ夢は持ちつづけ
虫が鳴く庭の隅から秋になる
神将のま近に萩のゆれる庭
山吹の実らぬ恋の片思い
退院を祝つてくれる庭の虫
影踏み遊びは何処へ行つたやら
本当のことまた言いすぎて嫌われる
寝たきりの眼に実りゆく庭の柿
一坪の庭に金魚の墓がある
三回忌亡母の愛した庭の萩
エアコンに慣れて忘れた風の詩
ガメランの調べ佳境に入る影絵
吹き抜ける風がみのりの秋を告げ

あずき
香住
留吉
洋
宣司
能子
光子
清芳
シマ子
千枝子
暁子
とよ子
欣史子
田実子
慶子
英一
弘直

川柳クラブわたの花

片上 英一報

孫去んで腰の痛みを妻が言う
無理するな言うて洗濯山と出し
無理だとは思ついても試着室
年金で無理だと孫に見ぬかれる
無理を言つても可愛く見えたのは昔
無理をして出かける友の慰霊祭
ファミコンを無理やり孫に買わされる

シマ子
春子
幸枝
君江
正子
道子
トシエ

無理な役また買つて出るお人好し
無理をして買ったスーツも一度きり
無理するな本気にきて休むバカ
OB会余生に無理のない集い
無理したが娘が嫁ぐ晴れ姿
無理してもいい顔したい時がある
それは無理壺もはんこも高すぎる
返杯がはしゅうて無理につきまわり
無理ばかり言つた泣かせた王将碑
蝶々に情け無用のフマキラー
散る紅葉野点の席の主役です
幼子の祭り化粧の紅映る
願ひ乞うお地藏さんに通う日日
彼岸花思い通わず陽が沈む
落ちそうな素振りへ通うお人好し
友達はみな敵ばかり塾通い
うれしさを顔いっぱい歯が笑い
気持良い汗を流して歯が笑つ
心せくようにキユウリを刻む音
子守唄のミシンを聞き馴れて
無理のないとどに老いの恋もよし

みき子
しのぶ
節子
その
朝子
千枝子
花子
龍襄
英一
明子
弘直
龍

三幸川柳教室

三宅 保州報

秘密好きくたびれて来た影法師
嫌な奴他人の秘密かき回る
ポックリさん信じて秘密ぶちまける
重大な秘密を聞いた紙コップ
少年Aで隠し切れぬ田舎町
社の秘密知らぬ程度今の椅子

美美子
一郎
道子
朱夏
かなめ
利治

白蟻がローンの家を狙い出し

愚痴ひとつ言わずに蟻は炎天下

右向けば右へとつづく蟻の列

下積み蟻に似ていてつまされる

なぜになぜ蟻一匹が縁を這う

労働歌唄って強い蟻でいる

蟻の穴ほどの痛みも埋められず

ぼちぼちと運が出て来た石の上

ぼちぼちと謎解けてくる掃り道

鈍行といえども時刻表がある

明日は未知何も慌てることは無い

飽食の付けばちぼちと地球病む

ぼちぼちの回復一喜一憂し

鍵一つ持たされ右往左往する

キーカード一夜の恋に慣れている

心の錠解いて明日へ脱皮する

ルパンさえ知らない鍵を持っている

まだ青い老舗の鍵が重すぎる

鍵の束男の虚勢ぶら下げる

一生をスベアで終る鍵もある

東大阪川柳会

森下

愛論報

安すぎる家賃怪談聞かされる

怪談の語尾闇夜に消されてく

アベックの悲鳴に怪談盛り上がり

二度の職スベアと思う回り椅子

合鍵を渡す踊りの輪の中で

スベアキーいつまで続く共稼ぎ

スベアの鍵が事件を解くヒント

(日)幸子

当代

親路

茜

千枝子

百合子

満洲子

昭枝

千秀

保州

高夫

鉄治

美智子

幸子

公子

みね

桂香

町子

和子

正雄

私には過ぎた妻だと余所で言う

横着な妻で見事に肥えている

娘妻母へと女強くなる

きんさんの婆さん確かに妻の道

まるい声ばかりではない妻の愛

妻の座にあぐらをかいた二段腹

およばれの自慢話にも慣れる

久し振り会えば自慢の料理出る

出すまでは自慢の一句であった苦

あべこべに亡娘を偲んで万灯会

アルバムのモノクロ褪せて惚ぶ貌

尼崎いくしま川柳会(前月分)春城年代報

本物は黙って耳を傾ける

本物のわるは昼寝の真つ最中

本物の味売り物の京野菜

本物が各地方にあった小町像

そっくりさんの方が何もかもつま

造花ではないから粘れる胡蝶蘭

星空へ二人の愛を誓いあう

金星を射止めて増えるプレッシャー

流れ星落ち着くところ神ぞ知る

プラネタリウム孫は星座に酔っている

星影のワルツで朝を刻む妻

過疎の里きらめく星が降る如く

仕合せをどこへ運ぶか流れ星

めぐりきて一茶の里は星ばかり

タイムマシン 遍歴像がおもはゆい

遍歴の道で拾った人情味

文秋

湖風

晋吾

喜風

度

美子

愛論

東雲

高尚

勝美

隆

薰

佳秋

萬的

紫香

杜的

正坊

敏之

澄子

一笛

正子

勇次郎

尚利

キク子

福一

行隆

園歩

遍歴へ方向音痴で困ります

遍歴は男の幅を広くする

遍歴の過去を刻んだ父の顔

遍歴の地図に曲がった道はない

遍歴の数だけ脛に傷を持つ

遍歴の毬は弾んで行ったまま

首位の座までは遍歴程遠い

そよ風が昼寝のぞいて通り抜け

日めくりを一枝ごとに風は秋

ナイターはどちらでも良い初デート

女房と何か相談してる医者

まだ少し言い足りなくて一人言

真夏日の洗濯小気味よく乾き

軒下で母のたい焼待つ日暮れ

川柳さやま社

遠山

可住報

貝殻になつても波の心読み

弱火から豆がふくら煮え上がり

可愛さが少し出て来て弱音はく

有名でないから夫にある魅力

有名になつて近所と遠ざかり

遅刻して来賓席を譲られる

有名になつて帽子がよく似合う

のんびりと豊かな風呂で唄が出る

よい戒名もろて豊かに数珠を繰る

豊かさに乗って仮面を付けかえる

子に譲る荷物は軽く旅に出る

いまここで譲る男の顔がある

有名になり外出のサングラス

真柳

鹿太

正治

風云児

武庫坊

すみ

二南

メ女

修水

歌子

伊三郎

芳子

英子

正一

恵美

純子

とよ子

貞子

つや子

テル

靖子

とみ子

百合子

ヒサ子

和子

可住

市三

ごみ袋つくづく豊かだと思つ
そろかしこ心豊かに目を閉じる

尼崎いくしま川柳会

春城

年代報

女癖任地へ先に着くうわさ

一輪車の子のスピードにも負けそつて
スピードの旅はなまきを置きざりに

進行中の愛へ一途な毛糸玉

変遷の齡重ねて古希を編む

夜も更けて初産に編む老いし母

寂しきは子無し夫婦の編む童話

毛糸編む妻が素顔を見せる時

節くれた指が編んでる破れ網

未婚の母は神が弁解してくれる

いいわけをふんふん聞いてくれた亡母

弁解の一つひとつに出る本音

一言の弁解も無く社長消え

ブライドがもう弁解はよせと言ふ

一人住む気軽さ誰も咎めない

弁解の稚氣を愛してゆるしてる

みちのくの旅で芭蕉の風と合ひ

逆効果果らつた筈の矢がきかぬ

時にわびしい時にさわやか虫の声
人生の愚痴をきいてる丸い鼻
立ち話何れは緑な事でない
立ち食いの足が並んでいるホーム
味方から反撃されている誤算
書く程もない遺書を書けという

芳郎
文平

勇次郎
杜的

澄子
薫

正治
一笛

すみ
尚利

鹿太
正一

吉太郎
紫香

英子
敏之

石舟
正子

行隆
文夫

敬
女

福一
二南

芳子
園歩

伊三郎

近松に深まる秋がよく似合い
コスモスをまたいだ風が背を押す
ワツとばかり溢れて咲いた曼珠沙華
ついと来て羅漢とあそぶ赤トンボ

秋の顔女に髪をいじる癖

川柳塔きやらぼく

政岡日枝子報

役降りてつい気が緩み熱ドツと
やんちゃこがやつと寝てくれ顔緩む
胸元を緩めて女吾子を抱く
急がねば地球が緩みだすばかり
旋緩めてわずかばかりの毒を抱く
きのう作つた梓をゆるめている私
骨一本土産に地獄から帰る
金婚の風へ絆は深うなり
人さまさま潮の満ち干の絵を描く
あの人もやっぱり鬼の舟にのる
切り捨てた言葉が一人歩きする
人ひとり通れる道をあけておく
宇宙人一度だけでも見てみたい
山嵐を耕し天にくさび打つ
天罰に人は手足もでぬ無力
五十からの顔が本当の人の顔
悩むまい人さまさまな風が吹く
血管の錆おとしてすと薬飲む
人愛し身軽い旅の出発だ
いい人であったと言つて送られる
人に逢い火の輪くぐりをすることも
人間に媚びてアドウは種を消す

修水
武庫坊

萬的

のりこ

保子

松子

ふみ

日枝子

千代

天雀

亜弥

てい子

高代

玲子

八重子

弘子

登栄

富美子

瑞枝

ゆき
寿々子
恵子
正子
千春
花子

人間に生まれて嘘を弁える

酒くさい軒で親爺よく寝てる
常に無い軒案じて声掛ける
口開けて大きな軒かいている
観劇の人妻今日でさようなら
教室の椅子も小道具運動会
辛抱を強いられいている齒科の椅子
重役の椅子を夢見た蟻が死ぬ
ひと言添えた粗品に血が通ふ
ささやかな粗品で長いお付き合い
金満家粗品までもが家に似る
粗品でも喜ぶ顔を思い出す
開店へ誘う粗品の引換券
粗品だが達者が取柄の妻といふ

尼崎小園川柳会

立谷勇次郎報

荒介

紫香

いわお

向西

弘治

尚利

定人

鹿太

夢之助

十四郎

澄子

ミサ子

六浦

勇次郎

南大阪川柳会

金井
文秋報

作二郎
智子
楓楽
信治
度
重人
浩一郎
萬的
湖風
凡子

荒介

紫香

いわお

向西

弘治

尚利

定人

鹿太

夢之助

十四郎

澄子

ミサ子

六浦

勇次郎

南大阪川柳会

金井

文秋報

作二郎
智子
楓楽
信治
度
重人
浩一郎
萬的
湖風
凡子

同郷の誼で世話を焼きたがる
 同郷のよしみが垣根とりはらい
 自己破産増えるヤングのもつカード
 増加する長寿へ福祉ゆるぎ出す
 惜しいけど捨てねばならぬ義理一つ
 方言が飛び交う里のクラス会
 さんま漁の漁獲増加に泣き笑い
 人選に人脈金脈ばかり居る
 なんばでも増える汚職の根が断てぬ
 夫より子供に望み託す妻
 書き出しの望みが消えている日記
 困った時はそつと心に手を合わす
 同郷の気安さ言葉飾らない
 寄付の額困ると言えぬ暮し向き
 同郷の誼ひと口乗せられる
 口で言えぬ望みはみんな絵日記に
 同郷へ遠慮のいらぬ国訛り
 同郷の大臣自慢の種にする
 一人や二人増加見込んだ鍋にする

京都塔の会

松川

杜的報

あやふやな気持でOKした見合い
 露草に似た一生の姑でした
 化野の露は祈りを待っている
 朝露を踏む闘病の日を憶い
 つまずいてから矢印の逆探る
 露に似ためぐりあわせであるけれど
 露草のはかない白に秋を見る
 露に濡れて仔猫捨てられたと知らず

二南 頂留子 柳宏子 寿美 千里 柳伸 勝美 悟郎 文秋 友美 トミ子 文子 久江 庸佑 章久 新造 シマ子 シメ子

英子 薰 礫 百合子 武庫坊 紫香 芳子

秋の灯へすり寄るように窓の露
 露程も思わぬ人に思われて
 よくもまあテレビが探るスキヤンタル
 あやふやな記憶で探す夜の街
 手探りのままで人生終りそつ
 ページ繰る探究心に齢はない
 どれ着ても宿の寝巻が大きすぎ
 通勤着脱ぐと寝巻と言う暮し
 宿浴衣よからぬ処へ行きたがり
 初産に母はやつぱり寝巻き添え
 宵まどい寝巻のまままでひとり酒
 花名刺妻が探りを入れて来る
 この人の本音を探る酒を注ぎ
 目の光見ながら探る肚の底
 湯上りの寝巻あわてる不意の客
 単身赴任あと寝るだけという寝巻
 盆過ぎて元の独りの灯を点す
 たつぷりと愛をまぶして飯握る
 消防が着いて煙の色変わる
 白薔薇の白に近寄る隙はなし
 コーヒーもカレーもうまい店にいる
 雨の音やます秋がきてる音

南海川柳会

飯田

悦郎報

人並以上にでっかい夢を持つ小粒
 小粒でも想い出詰まるアメジスト
 まだ小粒明日の期待が重すぎる
 握手してまだ本心は明かさな
 敵も味方疑問をもっている握手

求芽 栄 萬的 正坊 諷云児 英一 白漢子 葉子 杜的 福子 真柳 倫子 女 だだし 庸佑 飛鳥 笑女 てる しげお はつ絵 達子 水客

泰 凡子 文 真砂

ライバルに握手求める日のゆとり
 落選が手が腫れるほど握手して
 犯罪へ住所不定の悪だくみ
 愛情の不足と知った調停委
 念押しと言葉が不足で食い違い
 西成は住所不定の里にされ
 打合せ通り相槌派手に打ち
 相槌がとつてもうまい聞き上手
 正論へ目だけ相槌うっておく
 自動音黙って働く二度の職
 全自動家族とけ込む泡の中
 眼が悪く自動ドアに馬鹿にされ

堺川柳会

河内

月子報

路に寝る酔いどれ神様かも知れぬ
 順番を待っている間に虹が消え
 神よりも鬼を信じる決戦日
 おとなしく順番どおり流れよう
 ちよばちよの財布で長いお付合い
 辛いことみな歳月にゆだねよう
 順番があつて静かに散る枯葉
 生きているうちが花だと墓が言う
 なまぬるい氷枕は辛かろう
 仲良しと入る墓なら買つてある
 火の車家族会議をまた開く
 地下道の昼を蟋蟀辛かろう
 頑として一番風呂は父である
 墓までの道が一本見えてくる
 輪の中のユタをひっそり処分する

信博 文秋 柳伸 覚然坊 東雲 美津留 甘平 三男 悦郎 志華子 花仔 薫風 紀美女 金三郎 美代子 昭子 凡子 森子 泰子 岳人 道胤 東雲 半銭 小雪 かりん 雪梢

お墓への道を知らせる曼珠沙華
燃えさかる現場へマイク飛んでくる
ご主人の顔は知らないお付合
亡父の背撫でるつもりで墓洗う
ひつついたり離れたりしてもう長い

尼崎尾浜川柳会

前田いわお報

ついでろりこぼす言い訳株をさげ
一輪車少女の足がよく動く
ペランダで鳩の夫婦が子を育て
諸もろの業を背負った遍路笠
彼岸過ぎ急に早目に冬仕度
秋を呼ぶ赤い気炎の曼珠沙華
十月に良縁信じたいみくじ
カレンダーの薄さに気付く秋の風
澄みきった十月の空万国旗
ヘッピリ腰で御輿をかつぐ秋祭
体育の日に遠くいる白い杖
トンボ飛ぶ夕陽を秋の画布にする
うんざりと長い弔辞を聞く花輪
うんざりとするほど猫の子沢山
うんざりと大もあくびの立ちばなし
三面鏡今朝もうんざり嘘を聞く
秋雨にうんざりしてるベレー帽
うんざりとさせ滞滞の灯がつづく
ノッポビル地震で腰を抜かさぬか

城北川柳会

吐田 公一報

夏休み日焼けもせずに塾通い

新世代子供部屋にも鍵がある
子供から見れば大人の無責任
受験生パパは帰宅拒否症に
月の謎解いても酒は酒の味
迎え火で亡き夫偲ぶ蓮の飯
勿体ないもつたいないで太りすぎ
化ける面沢山持って妻強し
悲しさを逆なでをして記事を取り
寄進帳うるさい奴が二、三人
蟬しぐれ聞かれなくなりふと咤し
お返事を待つと切手が入れてある
健康は金で買えない宝物
人間不信子供になんと教えよう
手付かずの膳へ看護の重い雲
運転席子供ふれたいものばかり
セセラギの流れがイドの歴史聞く
書かれざる記事に真実かくされる
腹の立つ記事の無い日の茶が旨い
時々は愛確かめる貝の女
男なら泣くなど叱った母のむち
くじ当る噂へ寄付がよってくる

川柳塔まつえ吟社

恒松

町紅報

いやな事忘れなさいと風が吹く
負うた子が教えてくれた忘れ物
そして秋忘れる事も生きる知恵
忘れよとすすきの風が髪乱す
太陽の恵み忘れる罰あたり

白峰
静歩
政子
静子
八重子
登美子
典子
秀夫
史風
寿美礼
倫子
あい子
満津子
千世子
温子
頂留子
佐津乃
昭子
ただし
達子
柳影
公一

そばに居る妻を忘れるほど平和
役人がつなぐパイプの天下り
コピーしてつないだ愛がほろ苦い
つなぎ目に少しゆとりのある平和
つなされた鎖ほどける定休日
類はるい以って勝手な手をつなぐ
大物も金の力につなされる
納得のゆかぬ家計の火の車
ハンドルを握れば背筋のびている
公園の空気がうまい車椅子
泣き寝入りした子へ回る風車
同情を嫌う男の車椅子
家族みな乗せている日の車間距離
顔色を常に窺う癖がつき
いい顔で老母は仏になりたもう
幾星霜耐えて仏の顔になる
ピエロ哀し二つの顔を持って余す
鏡台の顔が私に指図する
不細工な顔でも金は持っている
落ち込んだ胸でコスモス揺れている
コスモスが咲いてご飯が美味くなる
コスモスは昨日の出会い淡くする
コスモスの夏へ疲れた葉包紙
待っている素振りは見せぬ秋桜
秋桜政治不信はまだ続く

川柳藤井寺

高田美代子報

調子よし七年ぶりの夢果す
お人好しいつも調子にのせられる

ちかし
軒太楼
雄々
太泡
芳枝
たつみ
長三
米子
房子
祥庵
雀踊子
与根一
友子
文子
静恵
多賀子
登志子
鶴丸
瑞枝
荒介
畔
義良
寿美子
町紅

敬一
三夫

鍵盤の調子狂わす片思い
調子いい男に風が吹き抜ける

乱調の女がまわす風車
合唱へ調子外れが一人いる

金魚鉢元氣よいのが突き当り
突き当る壁を破つてすすむ芸

猪に突き当られた道祖神
物売りの声が二度来る突き当り

矢印のない人生で突き当り
親の夢をむいて壁に突き当り

突き当り地獄へ墜ちる穴がある
突き当り戻る余裕も年の味

突き当ることにも馴れた夫婦独楽
弱り目にたたり目路地に突き当り

ブレイキになるまい母が子を思ふ
反対にブレイキ踏んだ地獄門

ブレイキの音しておんなから母に
晩酌のブレイキらしい茶漬ける

アクセルもブレイキもなく日を送る
ブレイキの効かぬ嫉妬が鬼となる

白い靴きれいに拭いて夏終る
母の乳房にある永遠のテーマ

良い所あるのに叱つてばかりいる
泳がして手掛りつかむ特捜部

どの子にも差別はしない陽の当り
火花火の匂いの残る兎に添寝

うみなり川柳会

森田 熊生報

世界的一花咲かす毛利さん 正

四等でよし鉢巻の汗ほめる
躓いてもいのち咲かせる花が好き
朝の蜘蛛逃して今日の無事祈る
鉢巻をすると雑音聞こえない
勝算のある鉢巻がまっ白い
鉢巻のアンカー僕の父ちゃんだ
彼岸花真つ赤で嘘が切り出せぬ
友情の花がきれいに咲いている
虫喰いをかばってくれる裏表紙
再起する鉢巻気迫みちあふれ
人柄をめがね掛け替へ見極める
やりとげる汗を鉢巻からもらう

打吹川柳会

奥谷

弘朗報

一止 あづま 華子 芳子 草人 雅女 蛙泡 静生 雄人 葉士人 熊生 善政 節子 柳風 野草 よし江 小生 明治 よしえ 佳女 松盛 仙岳 白峰 喬水 みほの 寿満湖

東寺さん出たところにあるストリップ
アツケラカン古出し笑い済ましちゃう
人気出て苦勞話も花を添え
出直すとキツパリ書いて置き手紙
神の前に出ると素直になる心
切り札が出る頃合いを待っている
出し切った力爽やか青い空
この薬飲めば力がわいてくる
弁当の出る總會へ行つてくる
外に出て太陽眩しサングラス
出向くのがいやで電話に最敬礼
老人の研修バスが今出るぞ
古知恵をしぼり出してる老いの意地

西宮北口川柳会

林 はつ絵報

杜の 邦俊 孝恵 早苗 典子 幸子 温子 勝見 妻子 正雄 玲子 喜与志 弘朗 透太 義子 香子 みつ子 園歩 房子 たず子 柳影 てる 武庫坊 よし津 芳子 富喜子 哲子

あれからの心を照らす灯がぬくい
北千島の灯がやや遠くなる政治
闇討に会いそう好きに生きている
明日のこと判らぬまに虫の闇
一人一裁いからの深い闇
帳尻が合わなくなつてからの闇
自分史の古い所にあるいくさ
野仏と話がはずむ古い道
そのままの古表札よ何を待つ
古い手紙が愛を大事に抱えている
達筆の封書は古い仮名遣い
観覧車恋の遊びをしています
手遊びの胡桃が聞いた老母の私語
遊び方教えて消えてしまつたね

遊動円木若い二人が揺れている
遊ぶこと知らぬ夫の定年後
つなされた紐の長さで遊ぶ猿
それぞれにカルチャーゴッコする夫婦
えんぴつがよく折れる日は残さからわず
言い勝つて胸に小さな乱残す
コーヒーが冷めて水掛論つづく
黙っている時が一番怖い父
戒壇めぐりかすかに鍵に触れました
秋風や水桶で足る髪の量
いつからか接ぎ目が消えていた夫婦
留守番を頼んだ犬の目が淋し
彼岸花ひとりになれる道を選ぶ
ママの切符持つてるお目まあるい子
書道展の出口で高い筆が売れ
暗闇になればベカコをしてやろう

川柳ねやがわ 高田 博泉報

約束のデートやめると雨が降り
み仏の慈悲を頼りに数珠の紐
裏ばかり読んで人間悪くなる
生意気な口をきいてた娘の寝顔
秋まつり疲れて家事を手抜きする
守り札滅茶苦茶になる事故現場
やじ馬が油そそいで引揚げる
中之島恋は楽しいだけでなし
老化防止くみ紐を編む
参加して若さを一貫つてくる
パーティー券売れてくつろぐ二枚舌

道胤 江美 正とし ヒサ子 年代 いわゑ 風云児 白漢子 杜的 春蘭 正坊 涼子 トミエ 萬的 しげお 紫香 覚然坊 権太 庸佑 亜成 シマ子 波留吉 一笑 あやめ 光子 とし子 かすみ

三つ編みの紐解き少女期が終る
反核のコールに老父のスニーカー
ふりむいた夏にさよならする九月
参加してさてそれからの忍の文字
ブライドが邪魔で紐にはなり切れず
どのようなお面でもいいか初参加
滅茶苦茶にほめられささて身構える
デートから解放されて呑むビール
元の付く名刺を抱いて行く参加
三歳の意地を積み木の眼で見つけ
ふるりはボキボキ折れる手打ちそば
忘れたい事をわざわざ言いに来る
父ちゃんは塾の名前も知りません
雑草も床に活けたら床の顔
そもそもの出会い短く頭文字
秋ごよみ参加で埋まるスケジュール
たぐりよせる母の紐みな同じ色
じいちゃんのデート鎮守の森だった
トイレまで遠いか月のきれい寺

倉吉川柳会 渡辺 善句報

地に落ちてまだ這い回るとんどろけ
天地人人の一生ふと思つ
天敵のような男が好きになる
天女ではないが毎日衣干す
天高く夢は自由な彩をぬる
甘い汁吸つてる人と庇う人
いい人と出逢つてからは月丸い
秋風が妙に今頃気にかかる

磯 章 惠子 冬葉 亜也子 菜月 一芳 博泉 良三 頂留子 速水 欣史子 英明 一途 英壬子 度 風 柳宏子 紫香 寿朗 寿満湖 康志 久子 康子 千代子 柳風 加代子

包帯を入さし指にしてあげる
野心あるから地固めしておこ
天皇の訪中の足重たかろ
万歩計秋の香りも刻んでる
決め玉は天の神様にも見せぬ
汗をかくわたしを天が見てくれる
空びんがいっぱいいたまって秋になる
満月のころになれず天仰ぐ
天井のシミがあんな顔になる
稲の穂が垂れて刈り入れ待っている
地下街で迷い出口がわからない
脳天に消えぬお人の顔がある

翠洋会 井上 照子報

またひとり身内を殺してスル休み
立てこんで目くばせで出る常の客
菊人形花のいのちに息づいて
人形もくたびれている退院日
お客様万円札の顔に見え
ごまかしの言い訳まなご宙を舞い
ごまかしても顔がひきつる小物です
最後までごまかしぬいたすごい人
花嫁人形目をうるませて母をみる
虎が勝つ鍵かけられている人形
禁煙をしない赤いイヤリング
ごまかしのきく病人で救われる
信長にそっくり似てる菊人形
マネキンの着せ替え男横目で見
早足で通り過ぎたらマネキンで

よしえ 喜美子 秋人 秋草 雄々 和枝 とみお ゆり子 御前 独歩 苦句 ひろ子 宣司 良江 久峰 東雲 叔子 友美 照子 蛙 正雄 さと美 凡子 拓生 満子 綾子

きせ替え人形わたしの思い通り生き
薬人形こつそり作っていたワイフ
ごまかした病名知っていたらしい
愛妻をごまかすなんてめつそうな
自販機の酒買うて来る不意の客
来客を口実に切る長電話

ごまかしの限界知った化粧品
真夜中に人形たちの座談会
人形が亡妻に似てくる季の変わり
妻の客ばかりで演技もつかれます
菊人形足元へ水のまされる
二段目の箱のいちごは小粒なり

川柳塔とつとり 岩原 喬水報

当選の自信ないのに立候補
容姿とも自信はないが飾りたい
自分から別れぬ自信なら持てる
かあさんが領いたので自信湧く
生きて行く自信に愛の傘ひらく
イメージはよいのになぜか嫁がない
初恋のイメージ老化せず残り
実物に会ってイメージダウンする
ああ今日は良いイメージをつくらうか
アデランスつけてイメージアップする
眼鏡替えてもイメージ同じ顔になる
イメージは白で再起の店を塗る
イメージががらり変っていた素顔
芝栗を拾った村がタムの底
耳よりな話も拾う程です

宏子 恭昌 希久子 英一 石舟 正坊 光子 みつ子 佳秋 千歩 兼治郎 鬼遊 宗吉 侖里 鬼桜 一京 大漁 友夫 太平 幸子 孝由 よしお 新風 帆雀 静生 政子 山人

広漠な砂丘の中で恋拾う
草花は星から明日の色拾う
落ちこぼれ拾ってくれる神があり
花びらを拾う情けを風にして
拾った命でも大事に生きていく
暗号を拾った日から貝になる
のつそりと裏山へきて栗拾う
子供らの良縁願ひ寄付をする
縁あって結ばれた仲むつまじく
縁遠い三人娘に肩がこる
縁切った筈だが夢で会いに来る
くされ縁断ち切り心また晴らす

川柳塔おっぱい吟社 木村 明人報

台風を待ってたような水不足
台風に乗山子討死したらしい
背を向ける子程気になる親心
落ちこぼれピカリと光るものを持ち
自動車道石の鳥居も移動させ
乱れ髪直して写す水鏡
終局へ向けて女が花咲かす
叱られても叱られても親がよい
締切りを控えギリギリまで辛い
今水かけた後からすぐに雨
肩書が溶けて無心に土いじり
大和路は遺跡発掘つぎつぎと
台風が倒していったコシヒカリ
沢山の水を運んで来た嵐
台風の洗ったような星光る

粗粒 明美 多可志 艶子 しげる 俊路 螢 圭一郎 輪多朗 一 枝 喬水 旋風 迷観子 明人 ひかり よしみ チカエ マサエ 白柳子 放任 かおり 吟笑 ふみ 迷貫 正雪 伽名子 スミエ

お魚と話が出来るそうダイビング
夏祭り白鳥踊りて幕が開く
富柳 会(前月分) 池 森子報

七転び夜具が知ってる熱帯夜
倦怠期喋り忘れた腕枕
面目あるだるまは金に転ばない
真夏日の安眠願う夕しぐれ
百歳の人相みんないいお顔
一升瓶転がしてある妻の留守
それからの安眠があるしまい風呂
善いことをした人でなそう顔写真
安眠がずらり並んだ保育園
お喋りが万札拾ってから無口
インターホン セールスだけに喋らせる
おさげ髪ひさで安眠くれた母
残業をさせて休みは二日制
胸の中ひそかに喋るボールペン
転んでも心の鍵はかけてある
百歳の寝顔 安眠だと思ふ
本当の男の恋は喋らない
情熱を失くしてからの転び癖

むらくも川柳 藤井 明朗報
一日のプランを囲む朝のお茶
秋深きもえる紅葉が目にしみる
朝がすみ峯寺の山を抱いている
あらためて希望を燃やす子は二十
ひとときを燃える夕日に手を合わせ

小5菜実子 いさむ 山久 澄子 生子 登子 二子 三子 昭水 智久 莊次 花子 トシエ 維久子 花梢 透太 美房 森子 正朗 三喜 鶏生 秀子 文子

流れ雲燃えた心の紅の彩

米作り照る日曇る日老いの汗

野心もつ男ゆつくり靴を履く

新米が出来たと母の荷が届く

朝顔のきれいに咲いて深呼吸

喜寿むかえ燃えた青春よみがえる

燃えさせる何かがあつた青春譜

夕焼けのよう心はいつも燃えてます

新米の豊作祝い乾杯す

燃えるほど楽しく追つた日の若さ

やさしさの中にも燃える根性持つ

米といで今日の終りの台所

孫の手に小づかいにっこり秋祭り

氏神のにぎあう子等の祭り店

新米も出来て豊作秋祭り

政治家の野心国民の風あたり

燃えるものまだあつたのね四十八

若いとは何にも勝る武器がある

みんなきて米とく音の爽やかさ

燃えるもの秘めておんなはひと住む

川柳はまでら

井上

喜酔報

連れだつて遊ぶ計画すぐにてき

計画と実行するとは別のもの

念入りの計画が洩れ水の泡

計画の段階ではや旅に酔い

無計画見事足元すくわれる

計画を三日でこわすダイエツト

計画に家族の知恵も入れてある

義良

林蔵

昭子

ヤス子

久仁

島子

仲子

百代

定子

はる代

幸夫

カツ子

美恵子

藤子

しげ子

八重子

延子

朝子

芳子

明朗

人生の計画あわてることがない

計画がずれて昭和史踏み外し

毒を盛る計画もある会議室

久世川柳クラブ

二宗

吟平報

つくつく法師夏の終わりを告げに来た

孫曾孫優しい心のプレゼント

敬老会あの顔の顔なつかしい

敬老会手を握り合い語り合い

浮き草の流れに耐えた敬老日

わが家での敬老鯛が膳回る

気使ってくれる残暑の冷奴

残暑なお老いて仕事のにぶる日々

も少しになってクーラー買う話

おしどりで敬老会の墓座につき

まだ蟬が鳴いて残暑を主張する

扇風機まだ居座っている残暑

眉書いてみても締まりのない家系

静岡川柳塔

永倉

僕川報

戒めの中に嬉しい褒め言葉

神様を拝むとふつ飛ぶ気の迷い

脳細胞減つたか養母の物忘れ

お齡ねと写る鏡が言いたそう

終章を飾る保険は掛けてある

愛情を試す遅刻の言い訳す

古着でも美人が着ればよく似合う

指定席祖父が居るから輪が和む

古希の旅 独身ですと笑わせる

笑風

与呂志

喜酔

秀香

江山

伊久栄

すみれ

山入

吟平

志重

美恵子

甫正

恒心

半仙

邦人

贊平

正雄

たま

たき

つね

きん

まつゑ

静代

久子

柳華

川柳高知

川竹 松風報

半分は情性で回る夫婦ゴマ

心変わり男女半々だと思つ

半額で乗つた子供が席を占め

足音が乱れ急患慌てさせ

休肝日予定狂わす飲み仲間

予定では悠々自適だったはず

足腰の弱りへ予定を変えていた

金になる方へ予定をばかっていた

うしろから見るほど若くない女

相槌を打って深みにはまり込み

日焼した素顔青春まっしぐら

何もかも許して母の座りだこ

真夏日に訪ねて貰ううちわ風

イヤリング孫も二十になりました

豊中もくせい川柳会 田中 正坊報

特攻で散つた友だよあの星は

海に散る唐人お吉 地のままた

十字架を映して銀杏散る運河

島みんな柿色にして陽が沈む

大和路の塔には柿がよく似合う

渋滞の列なぐさめる柿畑

デパートでおふくろの味買うてくる

優勝をしてデパートがまた過ぎ

デパートで私の欲しい服がない

デパートで衝動買ひをするカード

デパートの地下を上手に泳ぐ妻

佳風

京子

圭風

朱坊

功

千鳥

幸

松風

千恵子

菊野

さち

春枝

竹萌

とみ子

武庫坊

早苗

作二郎

しげお

萬的

博史

田実子

白溪子

(因)英子

正坊

きく子

さらさらと人気力士も書くサイン
 巻紙にさらさらとこころ憎い文
 ささらさと水に流せば友がくる
 ささらさとこぼれて落ちるほくの時間
 買わぬ母に不景気風はこぬらしい
 アチャラ語もまじえて説教笑わせる
 紅葉映え叶わぬまでも地図を買う
 入道雲見る見る広がる窓の外
 けもの道空気の抜けた毯一つ
 駅長が一人尾灯を指で追う
 どん底の極限パワーが湧いてくる
 与野党も腹の底ではもたれ合い
 指の傷治りコロッセ掲げてます
 去年何着てたのかしら風は秋

富柳会 池 森子報

謎かけてライバルの目に射る心
 メラメラと芯までもやす恋の花
 ルールない膳の料理は気楽です
 ルールなき愛にエイズがしのび寄る
 とりきめたルールだんだん邪魔になる
 モナリザの微笑の謎はまだ解けぬ
 惚んでる間なし葬儀屋テキパキと
 仲良しのルール違反は見ないふり
 トンネルを抜ける謎が解けてくる
 騒がれた頃惚ばれるお下げ髪
 引き際の美学 男の芯を見せ
 ドン辞職五億の謎はまだ残る
 見抜かれた道化に今日の花の芯

芳子 石舟 一笛 富子 杜的 つえ子 明吉 路児 明光 悟郎 吉太郎 きく子 寿美子 登子 生子 花子 トシエ 絹子 昭勇 昭水 庄次 文次 透太 智久 維久子

第7回 国民文化祭 石川92川柳大会特選句

私の芯に大の夫がぶらさがる
 芯のある男で射程距離に置く
 謎めいた言葉で女承知せず
 荒れた手の母を惚んで鱗雲
 花梢 美房 柳太 森子

「交流」

地球病む国境はない肩を組む
 風船が飛んだ町から嫁が来る
 我がにも黒船が来る娘は二十歳
 交流をつづける手紙書いている
 握手した数がわたしの宝もの
 ビザなしで夢に見た島確かめる
 大森風来子選 佐藤 マサ 板倉みゆる 今村 久栄 田口 麦彦選 今川 乱魚 藤倉 澄湖 渡邊 蓮夫選

「ことば」

刺のある言葉は知らぬ茶の間の灯
 方言で話して親子だと思ふ
 かあさんのことばが生きている厨
 地を掘れば父のことばが蘇る
 さくらんぼ熟れてことばを地に満たす
 石田きみ 望月 弘 依田幸一 木野由紀子選 三崎 規正 辻本 俊夫 細川 一紗

「名人」

アリガトウ地球が響き合ってくる
 国民文化祭石川92実行委員長賞
 名人のこもる部屋から時が消え
 白井 花戦選 田中 伯

名人の気迫が人を寄せつけず
 名人はいつか敗れる時を知る
 傑作を数えて尚も名を恥じる
 眼を彫れば龍が雲呼ぶ鑿の冴え
 像を彫る名人の瞳に弥陀宿る
 望月 和美 上野 天井 丹羽 麦舟選 東條 紅雀 竹内 孤雁 金子 蒼雲 黒沢かかし選

石川県知事賞 文部大臣奨励賞

断崖の松に男が見た美学
 太郎冠者松は悲しいまでの青
 防風へ松の必死な根をみたか
 雪吊りの松に過保護が少し見え
 根上がりの松に弱気をどやさされる
 多間 哲夫 太田 虚舟 津田吾小子 悦子 佐伯みどり選 横山アキ子 橋高 薫風選

「織る」

名を成してから横糸を織り忘れ
 読み伏せて源氏絵巻を織り上げる
 走馬灯糸巻く亡母のめぐりきし
 節くれば手が織りあげた文化財
 稀に見る越後が織れた雪晒し
 ガチャ万の時代日本は若かった
 酒井 静枝 小森清江 久保 律子 野口 初枝選 開発 淑乃 梶川雄次郎 大野 美枝

▼ご芳志 小野克枝さん(倉敷市)から切手をとくさんご寄贈いただきました。
 川柳塔社

本社 十一月旬会

十一月六日(金)午後五時半
メンズフアッションセンター

今年最大級の台風が近づきつつあり、すっかりしないお天気の中、七十八名と十一月旬会の出席者はいささか低調であった。例月の七日と間違えている人がいないか、ちょっと気にかかる。

まず、十月二十四日に急逝された山本規不風氏(理事・京都市)を偲んで、黒川紫香氏から直前に同行した東北旅行でのエピソードの紹介があった後、全員黙祷を捧げた。

「おはなし」は河内天笑氏でハーモニカに夢中だった少年時代の思い出。友達に借りた上等のハーモニカを紛失した失敗談に同情し全ての曲が吹けるには種類の異なる二十八本があるという驚いたあと、演奏が披露された。おぼろ月夜、夏の思い出、里の秋などの名曲につられてハモる人もあり、晩秋の夜を心地よく酔わされた。

初出席は細川稚代さん(和歌山市)と伊藤正紀氏(東京都)。月間賞は宮口笛生氏(奈

良市)に輝く。

(司会―東雲) (受付―年代・みつ子)
(清記―楓葉) (記録―射月芳・月子)

席題「近い」 岩内外吉選

暮敵が近くににいるも良し悪し
お歳暮が近い財布と呪めっこ
近くまで来たから寄った母の勤
近道をしたばかりの無駄づかい
近すぎて本当の事がわからない
近い他人に世話になるマタニティ
近道を通らぬ父を真似ている
ほめた後 近視でしたとうちあける
近くまで来たと招かぬ人が来る
近づいて見るとソバカス少しある
近寄って見るとエクボが消えていた
至近距離すぎて衝突する夫
そこそこの近さで迷う花と蝶
嫁はんの実家隣で頼られる
ご近所の手前セピロを着て出かけ
ウィーナスの近く夫が落ちつかぬ
冬が近いたっぷり愛を蓄える
すぐ傍に聖書が置いてある安堵
透かした絵のなかに近道ひとつある
一番近いのがやきもきさす遅刻
ライバルが欠席と知りお近づき
近くから女の顔は見ぬように
通りゃんせあの世だんだん近くなる
入口の近くに当てがあって立つ

章久 吐来 美房 達子 射月芳 冬葉 一風 欣史子 洋敏 典子 眉水 保州 ただし 月子 鬼遊 いわゑ たす子 寿子 寿子 小路 トメ子 射月芳 千歩 道胤

近道を覚えてからの落とし穴

近いところに幸せが落ちていた

一人息子 嫁の近くで家を建て

人妻と近くで話すのはよそつ

近いから箸のこけたも言うて来る

母になる日が近いのでケチになる

男性に近い女でリーターで

ご近所の犬がどうやら親らしい

近道にされたか路地の人通り

老夫婦の会話コントに近くなる

疑えば近い妻でもみな他人

急接近したのは月が青いから

近いのにスूपちつとも届かない

病院もお寺も近いナアお前

兼題「静か」 宮崎シマ子選

台所 静かに起きてた母の音
犬が一匹 鳥居をくぐっただけの夜
燃えるもの秘めて静かな隠し釘
木守柿のとても静かな役どころ
静かでもときどき猫の耳動く
瀧の水 静かに落ちて紅葉燃え
静かすぎどこかお悪いところでも
はりつめた静けさ電話ベルを待ち
やり直す決意 静かに足洗う
座禅組む心の底は無に還る
残り火を溜めて静かに燃えている
静かなら静かでのぞく母の部屋

雀踊子 度 幸 幸 紫香 利武 憲太郎 一風 太風津 諷云 いわゑ

隆

諍いのコップの渦へ静かな眼
静けさは逃亡に犯し怖い森
エンゼルのヒレだけ動いている茶の間
おじいさん静かなれば柿をむく
息をのみ妻が札束数えてる
地の果てで静かに歩調の音がする
御苦労さん桑山子静かに眠らせる
その時は静かな海で騙される
バブルはじけて静かに不況押し寄せる
金婚の愛は静かに燃えている
過労死を静かに聞いている社長
澄んだ目に静かな闘志秘めている
丸い嫁で静かな余生ありがたい
点滴の音が聞える夜のしじま
静寂のまん中に置くデスマスク
石投げてみても騒がぬ水の底
名曲のタクトが私語を許さない
停電が静かにさせる戎橋
一行詩 石は静かに燃え続け
妻が留守 静かで長い一日だ
悪いことして静かな子供部屋
火の女 今は静かな目に戻る

ただし 吸江 一人静かに病む友に折る千羽鶴

生き甲斐をみつつけ口紅かえてみる
口紅を拭き消したのに妻の勤
口紅の本音はこわいことばかり
口紅を変えて白衣も秋を着る
口紅が大事 焼そば抄らす
吸殻の口紅 気炎衰えず
口紅を拭いて夜汽車に揺れてます

トメ子
小路
悟郎
稚代
稚代
章久
諷云児
武庫坊
保州
狸村
勝美
薰
美代子
重人
狸村
いわゑ
トメ子
美代子
みつ子

兼題「口紅」 福本英子選
口紅がかわる女の季がうつる
朝の紅は少うし薄く母子草
口紅がつくところまで許してる
喪服着た日から口紅やめました
夫には内緒の紅をひく鏡
憎まれ口 濃い口紅で反抗期
転落の詩集に残すキスマーク
唇の通りに塗って大きすぎ
ラストダンスに燃える口紅ぬれている
口紅の赤に骨までしゃぶられる
紅の色変えても未練たち切れぬ
口紅も彼も知らずに山が好き
淡口紅にしてはどきついこと言われ
口紅のないのが蛸やき食っている
口紅をちよつと濃くした嬉しい日
口紅を直すのを待っている煙草
口紅を落とすといつも妻になる
魅力ある口紅男従える
口紅をつけなくなったサロンパス
大正ロマン口紅淡き夢の絵
口紅を買うときめきを大切に
三途の川で紅さしているのも女
口紅を今日は薄目に参観日
ストレスが溜り口紅濃くなる
喪が明けて翔ぶ口紅を替えている

口紅の数だけ恋をした私
口紅のついでる場所が悪かった
口紅があせて遮断機下りた恋
口紅で慌てたらしい置き手紙
口紅が鬼神を飼いに馴らす
口紅を塗る丹念に嘘を塗る
バツイチがなんだ口紅厚く塗る

度
トメ子
小路
悟郎
稚代
稚代
章久
諷云児
武庫坊
保州
狸村
勝美
薰
美代子
重人
狸村
いわゑ
トメ子
美代子
みつ子

兼題「背広」 川島諷云児選
父よりも背広が似合う脛かじり
よれよれの背広はボクの命です
体重計までも背広がきつくなる
背広着た住職に逢う秋日和
十五年前の背広で冬を越す
すばらしい背広の方と御堂筋

口紅を塗る丹念に嘘を塗る
バツイチがなんだ口紅厚く塗る
口紅を変えて魔女たり淑女たり
逢えそうな予感ピンクの口紅で

度
トメ子
小路
悟郎
稚代
稚代
章久
諷云児
武庫坊
保州
狸村
勝美
薰
美代子
重人
狸村
いわゑ
トメ子
美代子
みつ子

兼題「背広」 川島諷云児選
父よりも背広が似合う脛かじり
よれよれの背広はボクの命です
体重計までも背広がきつくなる
背広着た住職に逢う秋日和
十五年前の背広で冬を越す
すばらしい背広の方と御堂筋

口紅を塗る丹念に嘘を塗る
バツイチがなんだ口紅厚く塗る
口紅を変えて魔女たり淑女たり
逢えそうな予感ピンクの口紅で

度
トメ子
小路
悟郎
稚代
稚代
章久
諷云児
武庫坊
保州
狸村
勝美
薰
美代子
重人
狸村
いわゑ
トメ子
美代子
みつ子

兼題「背広」 川島諷云児選
父よりも背広が似合う脛かじり
よれよれの背広はボクの命です
体重計までも背広がきつくなる
背広着た住職に逢う秋日和
十五年前の背広で冬を越す
すばらしい背広の方と御堂筋

口紅を塗る丹念に嘘を塗る
バツイチがなんだ口紅厚く塗る
口紅を変えて魔女たり淑女たり
逢えそうな予感ピンクの口紅で

度
トメ子
小路
悟郎
稚代
稚代
章久
諷云児
武庫坊
保州
狸村
勝美
薰
美代子
重人
狸村
いわゑ
トメ子
美代子
みつ子

兼題「背広」 川島諷云児選
父よりも背広が似合う脛かじり
よれよれの背広はボクの命です
体重計までも背広がきつくなる
背広着た住職に逢う秋日和
十五年前の背広で冬を越す
すばらしい背広の方と御堂筋

口紅を塗る丹念に嘘を塗る
バツイチがなんだ口紅厚く塗る
口紅を変えて魔女たり淑女たり
逢えそうな予感ピンクの口紅で

度
トメ子
小路
悟郎
稚代
稚代
章久
諷云児
武庫坊
保州
狸村
勝美
薰
美代子
重人
狸村
いわゑ
トメ子
美代子
みつ子

兼題「背広」 川島諷云児選
父よりも背広が似合う脛かじり
よれよれの背広はボクの命です
体重計までも背広がきつくなる
背広着た住職に逢う秋日和
十五年前の背広で冬を越す
すばらしい背広の方と御堂筋

口紅を塗る丹念に嘘を塗る
バツイチがなんだ口紅厚く塗る
口紅を変えて魔女たり淑女たり
逢えそうな予感ピンクの口紅で

度
トメ子
小路
悟郎
稚代
稚代
章久
諷云児
武庫坊
保州
狸村
勝美
薰
美代子
重人
狸村
いわゑ
トメ子
美代子
みつ子

兼題「背広」 川島諷云児選
父よりも背広が似合う脛かじり
よれよれの背広はボクの命です
体重計までも背広がきつくなる
背広着た住職に逢う秋日和
十五年前の背広で冬を越す
すばらしい背広の方と御堂筋

口紅を塗る丹念に嘘を塗る
バツイチがなんだ口紅厚く塗る
口紅を変えて魔女たり淑女たり
逢えそうな予感ピンクの口紅で

度
トメ子
小路
悟郎
稚代
稚代
章久
諷云児
武庫坊
保州
狸村
勝美
薰
美代子
重人
狸村
いわゑ
トメ子
美代子
みつ子

兼題「背広」 川島諷云児選
父よりも背広が似合う脛かじり
よれよれの背広はボクの命です
体重計までも背広がきつくなる
背広着た住職に逢う秋日和
十五年前の背広で冬を越す
すばらしい背広の方と御堂筋

口紅を塗る丹念に嘘を塗る
バツイチがなんだ口紅厚く塗る
口紅を変えて魔女たり淑女たり
逢えそうな予感ピンクの口紅で

度
トメ子
小路
悟郎
稚代
稚代
章久
諷云児
武庫坊
保州
狸村
勝美
薰
美代子
重人
狸村
いわゑ
トメ子
美代子
みつ子

兼題「背広」 川島諷云児選
父よりも背広が似合う脛かじり
よれよれの背広はボクの命です
体重計までも背広がきつくなる
背広着た住職に逢う秋日和
十五年前の背広で冬を越す
すばらしい背広の方と御堂筋

口紅を塗る丹念に嘘を塗る
バツイチがなんだ口紅厚く塗る
口紅を変えて魔女たり淑女たり
逢えそうな予感ピンクの口紅で

度
トメ子
小路
悟郎
稚代
稚代
章久
諷云児
武庫坊
保州
狸村
勝美
薰
美代子
重人
狸村
いわゑ
トメ子
美代子
みつ子

兼題「背広」 川島諷云児選
父よりも背広が似合う脛かじり
よれよれの背広はボクの命です
体重計までも背広がきつくなる
背広着た住職に逢う秋日和
十五年前の背広で冬を越す
すばらしい背広の方と御堂筋

口紅を塗る丹念に嘘を塗る
バツイチがなんだ口紅厚く塗る
口紅を変えて魔女たり淑女たり
逢えそうな予感ピンクの口紅で

度
トメ子
小路
悟郎
稚代
稚代
章久
諷云児
武庫坊
保州
狸村
勝美
薰
美代子
重人
狸村
いわゑ
トメ子
美代子
みつ子

兼題「背広」 川島諷云児選
父よりも背広が似合う脛かじり
よれよれの背広はボクの命です
体重計までも背広がきつくなる
背広着た住職に逢う秋日和
十五年前の背広で冬を越す
すばらしい背広の方と御堂筋

口紅を塗る丹念に嘘を塗る
バツイチがなんだ口紅厚く塗る
口紅を変えて魔女たり淑女たり
逢えそうな予感ピンクの口紅で

度
トメ子
小路
悟郎
稚代
稚代
章久
諷云児
武庫坊
保州
狸村
勝美
薰
美代子
重人
狸村
いわゑ
トメ子
美代子
みつ子

兼題「背広」 川島諷云児選
父よりも背広が似合う脛かじり
よれよれの背広はボクの命です
体重計までも背広がきつくなる
背広着た住職に逢う秋日和
十五年前の背広で冬を越す
すばらしい背広の方と御堂筋

口紅を塗る丹念に嘘を塗る
バツイチがなんだ口紅厚く塗る
口紅を変えて魔女たり淑女たり
逢えそうな予感ピンクの口紅で

度
トメ子
小路
悟郎
稚代
稚代
章久
諷云児
武庫坊
保州
狸村
勝美
薰
美代子
重人
狸村
いわゑ
トメ子
美代子
みつ子

兼題「背広」 川島諷云児選
父よりも背広が似合う脛かじり
よれよれの背広はボクの命です
体重計までも背広がきつくなる
背広着た住職に逢う秋日和
十五年前の背広で冬を越す
すばらしい背広の方と御堂筋

口紅を塗る丹念に嘘を塗る
バツイチがなんだ口紅厚く塗る
口紅を変えて魔女たり淑女たり
逢えそうな予感ピンクの口紅で

度
トメ子
小路
悟郎
稚代
稚代
章久
諷云児
武庫坊
保州
狸村
勝美
薰
美代子
重人
狸村
いわゑ
トメ子
美代子
みつ子

兼題「背広」 川島諷云児選
父よりも背広が似合う脛かじり
よれよれの背広はボクの命です
体重計までも背広がきつくなる
背広着た住職に逢う秋日和
十五年前の背広で冬を越す
すばらしい背広の方と御堂筋

口紅を塗る丹念に嘘を塗る
バツイチがなんだ口紅厚く塗る
口紅を変えて魔女たり淑女たり
逢えそうな予感ピンクの口紅で

度
トメ子
小路
悟郎
稚代
稚代
章久
諷云児
武庫坊
保州
狸村
勝美
薰
美代子
重人
狸村
いわゑ
トメ子
美代子
みつ子

兼題「背広」 川島諷云児選
父よりも背広が似合う脛かじり
よれよれの背広はボクの命です
体重計までも背広がきつくなる
背広着た住職に逢う秋日和
十五年前の背広で冬を越す
すばらしい背広の方と御堂筋

口紅を塗る丹念に嘘を塗る
バツイチがなんだ口紅厚く塗る
口紅を変えて魔女たり淑女たり
逢えそうな予感ピンクの口紅で

度
トメ子
小路
悟郎
稚代
稚代
章久
諷云児
武庫坊
保州
狸村
勝美
薰
美代子
重人
狸村
いわゑ
トメ子
美代子
みつ子

兼題「背広」 川島諷云児選
父よりも背広が似合う脛かじり
よれよれの背広はボクの命です
体重計までも背広がきつくなる
背広着た住職に逢う秋日和
十五年前の背広で冬を越す
すばらしい背広の方と御堂筋

口紅を塗る丹念に嘘を塗る
バツイチがなんだ口紅厚く塗る
口紅を変えて魔女たり淑女たり
逢えそうな予感ピンクの口紅で

都々逸の好きな背広がもてている
 鎧とも思ふ背広で朝を出る
 背広新調 嫁さんをもらうんだ
 虫干しのつもりで背広を着て出かけ
 青い背広で恋をしたのは昔
 定年後 声のかからぬ背広吊る
 三ツ揃いボクも紳士の端くれか
 作務衣から背広に替えて山を降り
 肩書きが今日も背広を着て出かけ
 出世には遠い背広を持っている
 ノータイは遠い背広がある
 背広は月賦そんな昔がありました
 つっかけて背広も母が選びます
 マザコンで背広も母が選びます
 和解するつもりで背広かしこまる
 胸のバッジにも言わせている背広
 五十年 背広と長いつきあいだ
 背広の下に鎧が見えてます
 エリートが背広着てると限らない
 ロボットに背広着せると僕になる
 満員車 器用にマンガ読む背広
 七人の敵へ背広を送り出す
 背広着替えて夢中になれる火を探す
 過労死の制服だったナア背広
 サラリーマンの涙を知っている背広
 背広の皺に今日のいくさのあとがある

静子 美房 シマ子 射月芳 美房 眉水 勝美 笛生 たす子 吐来 吸江 白溪子 萬的 歌子 満津子 透太 敏 柳宏子 保州 欣史子 いわゑ 太茂津 外吉 正紀 武庫坊 岳人 雅文

嫁はんが妬くので背広地味にする
 背広着た猿で反省などしない
 会社の垢に背広が汚れてる
 人
 よれよれの背広でボンと寄附をした
 地
 定年の背広に解放感がある
 天
 時々には火薬の匂する背広
 軸
 頂点の椅子に野心のない背広
 兼題「与える」 黒川紫香選

太茂津 武庫坊 悟郎 外吉 鬼遊 みつ子 諷云児 柳宏子 東雲 狸村 柳伸 吐来 覚然坊 透太 岳人 文子 年代 白溪子 眉水 たす子 三男 度

平等に光与える陽の優し
 お師匠さんがチャンス与えた初舞台
 与えるもの何もないので飯を炊く
 新入社バッジと名刺与えられ
 恋に餌を与えてからの待ちぼうけ
 与えられた命大事にして九十
 与えられたのちを燃やす秋祭り
 助言だけ与え気にする言葉尻
 貧乏神が与えてくれた子沢山
 骨付きを与えておこう吠える犬
 釣つてから太らす餌を与える
 何もかも与えて息子駄目にする
 偉そうに訓示与えるおじいちゃん
 ブラネタリウム星の王子の夢与え
 アメ玉与えて鬼を手なずける
 ほのぼのとロマン与える秋の月
 佳
 ヒントだけ与えて母は手を貸さず
 それぞれの指紋 神より与えられ
 教祖サマに与えてもらうのはイヤだ
 ワンサイドだけに与える策がない
 難民に与えてほしいのは愛だ
 人
 句碑になる石にこころを与えよう
 地
 肩書を与えて骨を抜いておく
 天
 すぐあきるおもちゃばっかり与える
 軸
 敏 道胤 たす子 勝晴 文秋 幸 宣司 シマ子 美代子 隆 歌子 太茂津 諷云児 歌子 三千子 雅文 外吉 小路 保州 稚代

神様が与えてくれた齡の数

兼題「白」

西尾

栞選

紫香

蕎麦畑 貧しい村を真白に
 七難を隠す白さには負ける
 虚像 実像 風が重たい白いビル
 闇つづく白を白いと言つてから
 白いうなじほんのり染めている返事
 戻したい白紙へ妥協せぬ外野
 日記帳に白いあしがいつもある
 男一匹 下着は白と決めている
 片肌脱ぎの遠山桜を見た白州
 飢えたのはきのうのことか白い飯
 エプロンの白 新妻の恥じらいが
 白黒は意地でも決める唐辛子
 潔白を信じてくれる妻が居る
 白和えの豆腐するのは僕の役
 白百合が均等の傘を着る
 胡蝶蘭 白いドレスで咲きのぼる
 病室の壁より白く友が病む
 爆笑をして白黒へケリをつけ
 大根の白さを洗うとき無欲
 白蟻におびえローンにさいなまれ
 山茶花の白彷彿と無人駅
 鍵穴から覗く真昼の白い部屋
 白無垢で嫁す花嫁の過去問わぬ
 白い皿 今日の主賓はブチトマト
 寄せ書の白地に罪がたとある
 千日回峰 白装束が駆け抜ける

緑良 笛生 達子 楓楽 千秀 幸 保水 眉水 薰子
 (小)英子 太茂津 悟郎 一風 歌子
 英壬子 度 柳伸 一二三 勝晴 欣史子 典子 憲太郎 透太

手袋の白と政治家裏腹に

どこの白髪もみんな福だと信じよ

勝美

武庫坊

白黒を言える若さに拍手する

勤ぐれば紙の白さにまでおびえ

真つ白い月を見ていた逃亡記

白々しい嘘を聞いている人形の目

白線の外へ追いやる母性愛

ブラウスは真つ白したたかに見えぬ

好きな色 白にしておく妥協癖

私 白 旦那の色をやわらげる

恐れ入りが社長へ白で勝ち

君が代を聞けば真白くなる男

白寿まで生きる氣力の筆を選る

老いらくの恋ハンカチが真つ白い

北欧の白夜の恋はだまりがち

欣史子 雅文 雀踊子 稚代 凡子 外吉 正坊 東雲 愛論 太茂津 岳人 杜的 笛生 栞

川柳塔社常任理事会 (10月31日)

▽工藤吟笑 (香川県) 小森正晴 (枚方市)
 大角正道・大角幸代・鈴木公弘・西浦小鹿
 (いずれも鳥取県)の同人推薦を承認。
 ▽薫風理事長から飄云児氏が会計を辞任し、
 後任に吐来氏の選任を提案 承認。

▽新春おめでとつ会を1月15日、大成閣で開
 催することを決定、課題・選者を選考。
 ▽平成6年1月の「川柳塔」800号記念行
 事について検討することを決定。
 ▽柳宏子氏から同人の表彰などについて表彰
 規定を設けることが提案された。
 ▽薫風理事長から二賞選考の基準について選
 考委員が集まって審議することを提案

本社会皆出席者 (11月現在)

田中道胤・北勝美・金井文秋・春城年代
 春城武庫坊・藤田頂留子・宮園射月芳・
 吉村一風・堀端三男・玉置重人・江口度
 小林英子・板尾岳人・福本英子・田中薫
 野村太茂津・神夏磯典子・本間満津子・
 坊農柳弘・吉岡美房・高杉鬼遊・西田柳
 宏子・松原寿子・川原章久・松本ただし
 寺井東雲・西口いわる・黒川紫香・北山
 寺郎・高田美代子・河内天笑・河内月子
 (32名)



母みどりさんを悼む

堀江芳子

母みどりさんが10月6日午後0時40分、内臓疾患のため、国立療養所松江病院で逝去されました。六十八歳でした。6月入院、その後経過もよく、秋ごろ退院、自宅療養でした。再入院され、ご快癒のみ念じていましたが、残念でなりません。

みどりさんは昭和40年、むらくも川柳会同人として温厚なお人柄そのままに心の優しさを詠み続けられ、同48年7月本社同人推薦、また、いずも川柳会同人としても活躍、53年7月には堺川柳会に藤井明朗先生と出席されるなど、元気で「むらくも観桜句会」の脇取りなどのお世話をされていました。

49年の交通事故には奇跡的に一命を得られましたが、やっと健康をとり戻されたところにご主人が急逝、今年の秋彼岸に十七回忌のご法要をなさったと聞きましたのにもなく病状悪化、悲しいお別れになりました。

みどりさんは日本画・手芸を習得され、織

細なみごとな作品ばかり。温かいご家族に囲まれ、同級生・柳友、そして未生流の師として最良の友、槻谷一葉さんの大きな心の支えでした。

折々に好きなお花と見舞いを欠かされませんでした。みどりさんは「川柳に支えられて頑張るから」、また「良くなったら温泉にも行こうね」など、沢山の約束を一葉さんに残されたまま…。

市場籠を提げて「正朗さん、みどりで」という元気な声が私の耳を離れません。川柳を語り合ったみどりさんは、心身ともに美しい方でした。心からご冥福をお祈り申し上げます。 合掌

戒名 観音蓮室喜光大姉

遺句

念珠くる再入院の覚悟して
散る桜病床の心静かなり
目にしみる緑わが家の朝が明け

野草みな葉にみえてよもぎ摘む
合わす掌にすがる心の汗にしむ

第27回岡山県川柳大会

とき 平成5年1月23日午前9時開場
ところ 岡山県・邑久町立中央公民館
(邑久郡邑久町尾張465-1)

兼題と選者(各題2句)

- 「飾る」 石井冬魚選
- 「深い」 山田止水選
- 「瞳」 かなもりかず枝選
- 「砂嵐」 河内月子選
- 「海峡」 板東弘子選
- 「昏れる」 門脇洋子選

特別席題 当日1題発表

出句締切 正午 閉会予定 午後3時半

会費 1500円(昼食・参加賞呈)

賞 各題秀句に知事賞ほか多数

投句 縦22cm・横4cmの句箋に500

円を添え1月21日までに左記へ

〒701-42

岡山県邑久郡邑久町山手1116

嘉数 幸栄宛

主催 白百合川柳社



山本規不風様を偲ぶ

津守柳伸

紅葉の素晴らしい10月18日、川柳塔あおもり5周年記念大会に出席。観光もされて至極、ご満悦で20日夜、無事帰られましたのに、22日突然、呼吸困難で手術のいかにもなく、24日午後3時過ぎ、永眠してしまわれました。

いつもお元気で、爽やかなご性格、誰方にも親切で、人さまの幸福ばかり願っておられる方でした。以前、子供の欲しい女性に改名してあげたら、小指がほとんど伸び、やがて赤ちゃんを産まれたとか、いろいろな方にアドバイスをされ、良い結果になると、我がことのように喜んでおられましたね。

昭和41年2月、理容業者を主体とした「駒つなぎ川柳会」が発足した時が、規不風さんと私との出会いでした。その時は、お店の名前を取って山本「フイガロー」と呼名しておられました。当時、

真ん中のかんかん決め涼み合ひ
蔭口の目は右に左によく動き
などの句が、菊沢小松園選で抜けておられたことを憶えております。

しばらくして、本名の「規一郎」に戻り、また、10年ほど前に「規不風」と改名されました。ちょうどその頃に理容店を廃業され、困った方を助けるための易に熱中されるようになりました。

自由の身になられてからは、何度も外国旅行をされ、また、外国から易を見てほしいと招待されたり、ブラジル旅行中にご病気をされ、お孫さんには世話をかけたことなどを話しておられました。川柳塔社の勉強会を始め各柳社の吟行には進んで参加されるという旅行好きな方でした。以前、川柳塔本社句会で柳話をされた時は、旅と易の話を水を得た魚のように話されましたが、時間切れでシュンとされたのが昨日のことのように思い出されます。

京都の都大路川柳会にも、レギュラーで参加、いつも素晴らしい句を発表しておられました。同誌の9月号に、

陽炎に包まれている魂

あの時にきつと死んでいたのだろっ

ほんとの味方に逢った事がない
神も仏も 仏や神よ 死が近い
寿命帳 閻魔ノルマを挙げて
を發表されておられ、虫が知らせたのか、易者としての勤なのか、目に見えぬ神祕を覗いたような気持です。

川柳のほか、競馬にもとても熱心で、よく研究しておられました。駒つなぎ句会へ実弟の桐下さんといつもご一緒に、陽気な風を持って来て下さっていました。

美しい奥様と大勢のご家族に囲まれ、何不自由なく、陽気な規不風さんに、もう二度とお逢いできないなんて、どうしても信じられません。天国という会場で、沢山の柳友とお髭の手入れなどしながら、私たちの勉強ぶりを見て下さっていると信じます。

後世に遺る お髭に和む句座 柳伸

追悼句

山本桐下

綿菓子子の記憶へ笑みし棺の兄
鈴振って鳴らし規不風旅立ちぬ
峠には右へ習えの兄が居た
あさの鏡にかならず写る兄の顔
慰めてほしい電話帳を繰る

柳界展望

編集部

市民川柳大会は10月25日、

枚方公園青少年センターで

88名が参加して開かれ、次

の3賞のほか、久山一文・

碓氷祥昭・青木桂堂・志水

浩一郎各氏が秀句に入選。

枚方市長賞

荒波にもまれ凜々しく子

が帰る 豊田 洋子

同教育委員会賞

あした咲く花を手本に耐

えてます 大野百合子

同市会議長賞

相性は問わぬ人口授精室

谷口 笠香

★第39回八尾市民文化祭川

柳大会は10月25日、八尾文

化会館で106名が参加し

て開かれ、次の本社同人2

氏のほか、荒井荒星・岩内

外吉・小山紀乃・楠昭子の

各氏が秀句賞を獲得した。

響き合う音から人が響き

あう 榎山 隆

うれしさへ顔いっぱいの

齒が笑う 吉村 一風

★第43回西宮市民文化祭川

柳大会は10月25日、市立勤

労会館で開かれ、本社同人

の門谷たず子さんの次の句

が天位に入賞した。

懂れて掌にとれば散るシ

ヤホン玉

★岸和田市文化祭参加第42

回市民川柳大会は10月25日

51名が参加して市民会館で

開かれた。各題天位句は次

のとおり。

脇役で上手にお茶を淹れ

ている 小出 智子

ヘルシーな朝だサラダが

添えてある 三宅 保州

水掬う掌 冬がもうそこ

に 松本初太郎

亡母の樽仕込めば母の味

に似る 島崎富志子

遺伝子をわざわざ変える

ことはない 三宅 保州

嫁ぐ娘が気楽な振りをし

てくれる 日野 愿

癖のない夫婦に飽きたカ

レンジー 深日白光子

新同人紹介

大角

— 薫風・紫香・螢・はるお・盛桜・諷人推薦

大角

— 薫風・紫香・螢・はるお・盛桜・諷人推薦

鈴木

— 薫風・紫香・とみお・螢・はるお・諷人推薦

西浦

— 薫風・紫香・螢・盛桜・諷人推薦

工藤

— 迷観子・明人・ひかり推薦

小森

— 薫風・恭昌推薦

★堺まつり協賛・堺市民川柳会は10月10日午後1時から「治兵衛」大広間で98名が参加して開かれ、次の同人両氏が「神」「輪」の課題で秀句賞に輝いた。

人間に笑い袋をくれた神
三宅 保州
ブランコを漕ぎに時どき
輪を抜ける 門谷たず子

★第20回東大阪市民川柳大会は10月11日、市立社会教育センターで開かれ、

土に生き土の匂いのまま
果てん 片岡 湖風
のほか、板野美子・桑田砂
輝守・上島みえ子・岩内外
吉・松田壮之助・土田欣一
の各氏が秀句賞に輝いた。

★枚方市文化祭協賛第2回

★吹田川柳会25周年記念川柳大会は10月25日、同市文化会館メイシアターで114名が参加して開かれ、本社同人の山本希久子さんが席題の連想吟で秀句となったほか、原宣子・与三野保佃良二・瀬川幸子・板谷明子・西川景子の各氏が秀句賞に輝いた。

る 玉置 重人

★高槻川柳文化連盟では、11月12日から17日までたつき松坂屋5階アチサンクで第9回川柳と川柳画作品展を開催した。

い 宮口 克子

★全日本川柳協会常任理事川柳研究社主幹渡邊蓮夫氏は11月3日、秋の叙勲で文化普及功労者として木杯一組台付を授与された。

終の日が迫ると象は群れを出る 足立 淑子
パートナーどうぞ仮面はとらないで 栗谷 春子
居酒屋で洗う傷ならしれている 吉川 晋吾
身に沁みる意見を妻はさりげなく 山本 磔

★川柳展望社は第5回新子賞を次のとおり決定した。昼深く還らぬ水を使いおり 渡辺 康子
また、第7回火の木賞に情野千里(兵庫)、準賞に坂東乃里子(兵庫) 渡辺康子(東京)の各氏を決定。

★大阪市民健康フェスティバル第6回健康づくり川柳展の入賞作品がこのほど決定、特選に松本ただしさんの次の句
万歩計 毎朝老いを捨てにゆく
が選ばれたほか、同人の西田柳宏子・井上白峰両氏が入選した。

★高槻川柳サークル卯の花は11月3日、文化功労団体として市教育委員会から表彰された。

父として父の拳をまだ探す 池田 南岳

▼訃報▲
■山本規不風氏(理事・京都市)は10月24日、心不全のため死去、78歳。告別式は同26日に行われ、紫香・太茂津副主幹ら多数参列。また、11月12日、東山区本町五条上ルの遺族宅で、三七日の法要が行われた。

★第15回寝屋川市民川柳大会は11月3日、同市立総合センターで開かれた。各題秀句は次のとおり。

★ふれあいの祭典92(兵庫のまつり)川柳祭の入賞者が決定、11月8日、神戸市勤労会館で開かれた発表大会で表彰された。文部大臣奨励賞は

まつとうに生きて無冠の石を積む 福田 和子

ある 三宅 保州

美しい顔だ全力出している

微動だにしない心の城がある

ふるさとの月が一番美しい

ふるさとの月が一番美しい

美しい顔だ全力出している

美しい顔だ全力出している

美しい顔だ全力出している

美しい顔だ全力出している

川柳 東大	26日(土)午後6時から 少女・ペット・歌・灯	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3-21 片岡湖風
はびきの 市川柳 民会	27日(日)午後1時から 音・座る・カレンジャー・(乾杯)	羽曳野市立陵南の森公民館 〒583 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏

★特に記載がない場合 句会費 500円、投句料 310円(62円切手5枚)、各題3句以内(お願い) 平成5年1月以降の各地句会案内の原稿は、編集部(川柳塔社事務所)へ。日時・会場が変更になる場合は、西出楓楽まで電話でご連絡ください。

12月各地句会案内

	日 / 時 および 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	1日(火)午後1時から 魔女・楽しい(共選)・自由吟	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅西所西入ル 〒593 堺市堀上緑町2丁16-3 河内天笑
尼 崎 いくしま	4日(金)午後1時から 動く・地球・自由吟	サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代 句会費 300円 投句料 62円切手 3枚
八尾市民 川柳会	10日(木)午後6時から ケーキ・心配・人柄・望郷	八尾市立労働会館(山本) 近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1-15 宮崎シマ子
京 都 塔 の 会	11日(金)午後1時から 損・狭い・平日	京都府南労働セツルメント 近鉄東寺駅西徒歩3分 〒601 京都市南区西九条開ヶ町41-1 松川杜的 句会費 400円 投句料 62円切手 3枚
川柳塔 まつえ	12日(土)午後1時半から 師走・計算・終る	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
川柳塔 わかやま	13日(日)午後1時から 責める(共選)・線路(迫る)	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川柳会	14日(月)午後1時から 味・うっかり・焼く・自由吟	西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒663 西宮市高木東町9-4 西口いわゑ 句会費 300円 投句料 62円切手 4枚 各題2句
富柳会	17日(木)午後1時から 裏・吹雪・進む	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴町4-1 池森子
高槻川柳 サークル 卯の花	17日(木) 正午から いのち・迷子・根回し・自由吟	高槻市民会館306号室 阪急高槻駅徒歩5分 〒569 高槻市宮田町3-8-8 川島颯云児 各題2句
南 海 川柳会	18日(金)午後6時から 遠出・足音・手落ち・原価	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
南大阪 川柳会	19日(土)午後6時から 巻く・自棄・落胆・童	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋 句会費 500円 投句料 62円切手 3枚
川 柳 ねやがわ	20日(日) 正午から ピリオド・反省・荷物・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 句会費 500円 投句料 62円切手 3枚
もくせい 川柳会	21日(月)午後1時から 黒・法律・転ぶ・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南徒歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
岸和田 川柳会	25日(金)午後6時から 切手・屈指・月末・根性	岸和田市立福祉総合センター2階 南海線岸和田駅南東徒歩5分 〒596 岸和田市上町7-36 植山武助

編集後記

★今年もようやく十二月号

の編集をおわり、年末のあいさつを述べることとなった。毎号百頁を越える本誌がとどこりなく発行できたことについて、多くの方々のご協力に感謝したい。

本社としての行事も多彩であったが、紫香山での句碑建立、和歌山での全日本川柳大会、香川における勉強会、鳥取で開いた同人総会が何れも成功を納めた。

★編集部についてはこの二年間、私を含めて五人のスタッフであったってきたが、十月号・十一月号のこの欄

で射月芳・しげお両氏が触れておられるように、新年度から編集部を去られることとなった。これまでのご尽力に対し、お礼申し上げたい。ただ両氏の文章の中

で、後任云々という文言が

あったが、これについては当分の間、三人の体制で行

こうと思っている。

★もとより私は、本誌の刊行という大きな事業が、わずか三人や五人の力だけでやれるとは考えていない。川柳塔社という組織があったこそであり、主幹・理事

長はじめすべての役員の英知を結集することによって立派な柳誌が生まれると信じている。同人・誌友のご支援・ご協力については、言うまでもない。

★そこで編集部の役割ということだが、組織の一部門としてプロフェッショナルな編集業務を担当すること

にある。それを効率的に遂行するためには、やはり最

(正)

ひとこと

かねて読者のみなさんから自由に意見を発表する場を設けてほしいというご要望があり、検討を重ねてきました。平成5年1月号から「ひとこと」欄を設けることにしたいと思えます。

これまでも、みなさんから本社または編集部へ寄せられたご意見やお便りを「編集後記」や「柳界展望」欄で紹介しましたが、今後はこの欄に掲載しますので、ご

投稿をお願いいたします。

限られたスペースなので、原稿はできるだけ要点をコンパクトにまとめていただきたいこと、ご希望により紙上匿名は結構ですが、氏名(柳号)は明記していただきたいと思えます。

内容は、編集部ないしは川柳塔社への注文・批判、川柳についての意見など、何でも結構ですが、採否は一任ください。(編集部)

○「体が覚える」とはどんなことか、身をもって何度か感じた。そのいずれもが若い頃マスターしたことが数十年後、すんなり再開できた時である。

○ひとつに自転車乗りがある。小学生の頃、大人用を横乗りできるようになり、得意になって乗り回した。

その時のハンドルに伝わる地道の振動は、今も手に生々しい。それから何十年か

後にまた乗り始めたが、公園で二、三十分練習すると道路に出られた。ほかに水泳、スキーも長いブランク後、労せずして楽しめた。三日間、もたもたはららら

日本と反対に、道路横断が車優先という国に旅行した時である。事前に注意を受

けていたから、頭の中では「体が覚える」ことではない。納得していた。けれど、いざ歩き始めると、横断歩道で右(左)折の車に出るような気もする。(ふ)

作品募集

2月号発表 (12月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 栞 選
 水煙抄 (10句) 黒川 紫香 選
 銀河系 (3句) 河内 天笑 選
 茴香の花 (3句) 小出 智子 選
 綿 春城 年代 選
 吟納「豆」 田辺 炎六 選
 吟投げる「」 神保 拓生 選
 課題吟 (3句) 吉岡美房担当

★川柳塔欄は同人、水煙抄欄は誌友、茴香の花欄は女性、その他はどなたでも投句できます。

3月号
 課題吟 「笛」「人形」「華やか」
 初歩教室 「希望」

本社12月句会

日時 12月7日(月) 午後5時半
 会場 メンスファッションセンター3階
 中央区内本町1-1 電06・941・1918
 地下鉄谷町4丁目下車(3番出口)交差点南西角

おはなし
 兼題 「ゲスト」 黒川 紫香 選
 「文句」 津守 柳伸 選
 「すらすら」 神谷 凡九郎 選
 「止まる」 吉岡 美房 選
 「旅」 阿萬 萬的 選
 西尾 栞 選

席題 1題 当日発表 各題2句以内

会費 500円
 柳箋(4cm×19cm) 1葉に1句を書き、
 投句料310円(62円切手5枚)同封のこと

本社1月句会 7日(木)

兼題 「そろそろ」「有名」「進化」
 「混む」「空気」

夜市川柳募集

第7回「波」 寺尾 俊平 選
 ハガキに3句 12月末締切
 投句先 〒593堺市堀上緑町2-16-3
 河内天笑方 堺川柳会

NHK川柳作品募集

課題 「迷う」 橘高 薫風 選
 ハガキに3句 12月10日締切
 投句先 〒540 大阪市中央区馬場町3-43
 NHK大阪放送局
 「ラジオセンター」川柳係
 発表 12月27日(日) ラジオ第1放送
 午前11時5分から

西日本文字放送作品募集

課題 「写真」 森中恵美子 選
 ハガキに3句 12月15日締切
 投句先 〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20
 大手前ウサミビル3階
 西日本文字放送 川柳係

定価 六百元(送料51円)
 半年分 三千八百円(送料共)
 平成四年十一月二十五日印刷
 平成四年十二月一日発行

編集兼 西尾 栞
 発行人 藤原 童心 社
 印刷所 藤原 童心 社
 大阪府阿倍野区三木町二丁目一〇一六
 ウェルラ第2ビル202号室
 〒545

発行所 川柳塔社
 電話 06・691・6914
 振替口座大阪8133368番

賃貸住宅の建築・設計・仲介・管理

売買貸借大きな家から小さな家まで
住居の事なら何でも相談できる店

TJ 豊津住宅株式会社

本 社 豊津住宅KKビル

〒564 吹田市泉町5丁目28-27 TEL (06) 330-0102

豊 津 店

〒564 吹田市泉町5丁目11-14
TEL (06) 330-0006(代)
FAX (06) 388-6102

関大正門前店

〒564 吹田市千里山東1丁目9-21
TEL (06) 388-6166(代)
FAX (06) 388-6886



白島海岸

潮騒のリズムに
身をゆだねて
心地よくつろぎを

国立公園 隠岐の島

施設のごあんない

収容人員 45名
客室 13室
舞台付広間 42畳
駐車場 乗用車10台
冷暖房完備

きん ぶ そう
旅館 金峰荘

〒685 島根県隠岐郡西郷町
TEL (08512) 2-1427 FAX (08512) 2-2330